伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書　(2)

犬　田　布　貝　塚

1984年3月

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会

序　　文

本町は，埋蔵文化財が多く所在すると言われています。その中のいくつかは，町の指定文化財として保護しています。これをさらに専門的に，しかも緊急に調査研究をすすめる必要を考えて，昭和57年度から，埋蔵文化財確認緊急調査事業として，国，県の助成を得て，面縄第１・第２貝塚を調査してその概要をまとめて公表してきたところであります。

今年度は特に，海浜の砂丘遺跡が比較的多い奄美諸島にあって，内陸部に位置する重要な遺跡として知られている犬田布貝塚について，その性格，範囲等を明らかにするため調査事業を実施しました。

本報告書はその概要をまとめたものでありますが，これが関係者の学術研究の資料として活用されることを念願します。

この調査にあたって，文化庁，県文化課ならびに土地所有者や直接作業に従った方々をはじめ，ご協力くださった多くの皆さんに謝意を表します。

伊仙町教育委員会教育長　　寛　山　成　男

例　　言

1．本報告書は，伊仙町教育委員会が，文化庁及び鹿児島県の補助を得て，昭和58年度に実施した犬田布貝塚の重要遺跡確認緊急発掘調査報告書である。

2．調査の組織は調査の経過の中で記した。

3．本書で用いたレベル数値は，すべて海抜絶対高である。

4．本書の執筆は次の通りであり，石器の実測・トレース等は県教育委員会文化課中村耕治氏の協力があった。第５章まとめ及び編集は吉永・宮田が行なった。

第２章，第４章１・２・８～15節	吉永
第１章３・４節，第３章，第４章３～７・16節	宮田
第１章１・２節	戸崎

5．出土した貝類及び動物骨については，それぞれ植之原道義氏（現串木野市教育長）・西中川　駿氏（鹿児島大学農学部助教授）に鑑定を依頼し，玉稿をいただいた。

6．本書の遺物番号は，通し番号とし，挿図番号・図版番号と本文中の番号は一致する。

7．出土遺物は，本報告刊行後伊仙町教育委員会が保管し，伊仙町歴史民俗資料館に展示・公開する。

目　　次

序 …… 1
例言 …… 3
第1章　調査の経過 …… 7
第1節　調査に至るまでの経過 …… 7
第2節　調査の組織 …… 7
第3節　調査の経過 …… 8
第4節　調査の概要 …… 9
第2章　遺跡の位置及び環境 …… 10
第3章　層　位 …… 13
第4章　遺　物 …… 16
第1節　土　器 …… 16
第2節　土製品 …… 30
第3節　石　器 …… 35
第4節　貝製刃器 …… 40
第5節　貝製刺突具 …… 40
第6節　貝製道具 …… 40
第7節　骨製利器 …… 44
第8節　貝匙等 …… 46
第9節　貝　輪 …… 50
第10節　垂飾品 …… 50
第11節　簪 …… 52
第12節　耳　栓 …… 52
第13節　貝　錘 …… 52
第14節　釣針・その他 …… 56
第15節　糞　石 …… 56
第16節　岩陰上部平坦地採集の遺物 …… 58
第5章　ま　と　め …… 60
犬田布貝塚出土の貝について …… 植之原道義 …… 64
犬田布貝塚出土の動物骨について …… 西中川　駿 …… 74

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 11
第２図　遺跡周辺の地形及びトレンチ配置図 …… 12
第３図　土層図 …… 15
第４図　土器実測図１ …… 17
第５図　土器実測図２ …… 18
第６図　土器実測図３ …… 20
第７図　土器実測図４ …… 21
第８図　土器実測図５ …… 23
第９図　土器実測図６ …… 24
第10図　土器実測図７ …… 26
第11図　土器実測図８ …… 27
第12図　土器実測図９ …… 28
第13図　土器実測図10 …… 29
第14図　土製品実測図 …… 30
第15図　石器実測図（石斧）…… 34
第16図　石器実測図（石斧等）…… 35
第17図　石器実測図（磨石・敲石等）…… 36
第18図　石器実測図（石皿）…… 37
第19図　チャート片実測図 …… 38
第20図　貝製刃器実測図 …… 41
第21図　貝製刺突具・貝鏃他実測図 …… 42
第22図　貝製道具実測図 …… 43
第23図　骨製利器実測図 …… 44
第24図　貝匙実測図１ …… 47
第25図　貝匙実測図２ …… 48
第26図　貝匙実測図３ …… 49
第27図　貝輪実測図 …… 51
第28図　垂飾品実測図１ …… 53
第29図　垂飾品２・装飾品・貝錘実測図 …… 54
第30図　釣針・その他実測図 …… 55
第31図　糞石実測図 …… 56
第32図　岩陰上部平坦地表採石器実測図１ …… 58
第33図　岩陰上部平坦地表採石器実測図２ …… 59

表　目　次

第１表　犬田布貝塚と周辺遺跡 …… 10
第２表　土器出土区・層対照表１ …… 31
第３表　〃　２ …… 32
第４表　〃　３ …… 33
第５表　石器計測表 …… 39
第６表　貝・骨器計測表 …… 45
第７表　貝匙・貝輪・垂飾品計測表 …… 57
第８表　岩陰上部平坦地採集石器計測表 …… 59
第９表　カーボン測定結果 …… 62
第10表　犬田布貝塚出土貝類一覧１ …… 64
第11表　犬田布貝塚出土貝類一覧２ …… 65
第12表　犬田布貝塚出土貝類一覧３ …… 66
第13表　犬田布貝塚出土貝類一覧４ …… 67
第14表　出土貝類集計表１ …… 68
第15表　出土貝類集計表２ …… 69
第16表　水洗出土貝類集計表１ …… 70
第17表　水洗出土貝類集計表２ …… 71
第18表　水洗出土貝類集計表３ …… 72
第19表　水洗出土貝類集計表４ …… 73

図 版 目 次

ＰＬ１		動物骨(1)	80
ＰＬ２		動物骨(2)	81
図版１	上	犬田布貝塚近景	83
	下	調査風景	83
図版２	上	調査風景	84
	下	調査風景	84
図版３	上	６ＢＴ完掘状態	85
	下	２Ｔ土層断面	85
図版４	上	遺物出土状況	86
	下	遺物出土状況	86
図版５		遺物出土状態	87
図版６		遺物出土状態	88
図版７		遺物出土状態	89
図版８	上	出土土器(Ⅰ類)	90
	下	出土土器(Ⅰｂ類・Ⅱａ類)	90
図版９	上	出土土器(Ⅱａ類)	91
	下	出土土器(Ⅱｂ類)	91
図版10	上	出土土器(Ⅱｂ類)	92
	下	出土土器(Ⅱｃ類・Ⅱｄ類)	92
図版11	上	出土土器(Ⅱｄ類・Ⅲａ類・Ⅲｂ類)	93
	下	出土土器(Ⅲｃ類)	93
図版12	上	出土土器(Ⅲｄ類・Ⅲｅ類)	94
	下	出土土器(Ⅲｅ類・Ⅳ類)	94
図版13	上	出土土器(Ⅳ類)	95
	下	出土土器(Ⅴ類)	95
図版14	上	出土土器(Ⅵ類)	96
	下	出土土器(Ⅵ類)	96
図版15	上	出土土器(底部)	97
	下	出土石器(1)	97
図版16	上	出土石器(2)	98
	下	出土石器(3)	98
図版17	上	出土石器(4)	99
	下	出土石器(5)	99
図版18	上	貝製刃器	100
	中	貝製刺突具	100
	下	貝鏃	100
図版19	上	貝製道具	101
	中	骨製利器	101
	下	シャコガイ製品	101
図版20	上	出土貝製品(貝匙等)１	102
	下	出土貝製品(貝匙等)２	102
図版21	上	出土貝製品(貝匙等)３	103
	下	出土貝輪	103
図版22	上	出土垂飾品	104
	下	出土垂飾品・簪・耳栓・貝錘	104
図版23	上	釣針・その他	105
	下	土製品・糞石	105
図版24	上	岩陰上部平坦地採集石器	106
	下	岩陰上部平坦地採集石器	106

第１章　調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

犬田布貝塚は，地元の岩井正一氏により，土器，貝製品等が採集され先史時代の遺跡であることは地元の一部では知られていた。

この遺跡が考古学的評価を得たのは，昭和44年12月～昭和45年１月，鹿児島短期大学付属南日本文化研究所徳之島総合学術調査団の一員として来島した白木原和美氏（当時天理大学講師現熊本大学教授）の調査であった。

その後，昭和50年，小林達雄氏（文化庁技官・現国学院大学教授）が来島し，遺跡を視察され，保護対策等について指導・助言がなされた。

このような経緯のなかで，町としては貴重な本遺跡の取扱いについて，県教育委員会文化課とも協議を重ねてきたのである。

その結果，南西諸島の先史時代研究のうえで，貴重な本遺跡の保護対策の資料とするために遺跡の範囲確認等を，埋蔵文化財確認緊急調査事業として，国および県の助成を得て実施することになった。発掘調査は伊仙町教育委員会が主体者となり，発掘は県教育委員会文化課に依頼した。

第２節　調査の組織

調査主体者　伊仙町教育委員会

調査責任者	伊仙町教育委員会教育長	寛山　成男
	〃　社会教育課長	高野　階喜
	〃	稲村　忠彦
	〃	中山　忠良
	〃	寿元　一美
	伊仙町歴史民俗資料館	大谷　耕一
	〃	四本　延宏
調査担当者	鹿児島県教育委員会文化課文化財研究員	吉永　正史
	主　事	宮田　栄二
	文化財研究員	戸崎　勝洋

発掘作業員

伊東武文　伊藤米信　町田志乃夫　前田悟　四本政栄　有馬徳寿　牧島世造　木場栄造　伊集院君枝　町田みね子　西節子　浜田良子　有馬喜久美　稲島順子　中村富子　上木イワ　高野リエ子　勝山松枝　福田和子　水本ミヤ　岩井久美代

整理作業員

橋口紀美子　喜入カツエ　陣之内サチ子　山下治子　川口セツ子

なお調査・企画及び現地指導等について文化庁ならびに黒崎直氏（文化庁技官），鹿児島県教育委員会文化課（課長　猿渡侯昭）の埋蔵文化財担当，管理係等の指導・助言を得た。

また，発掘調査の現地指導，および遺物については河口貞徳氏（鹿児島県考古学会長）の指導を受けた。調査中は義憲和氏（町文化財保護審議委員会長）・成尾英治氏（徳之島高校教諭）の協力・助言を得た。遺物の写真撮影は，中村耕治氏（文化課）の手をわずらわした。

第３節　調査の経過（日誌抄）

10月13日(木)　現地確認後，町教委にて調査計画等の打合せ及び発掘道具の準備，点検。

10月14日(金)　調査道具運搬。遺跡周辺の伐採及び草払いを行なう。午後よりサトウキビ畑の中にトレンチを設定する。１Ｔ・２Ｔ（２×３ｍ），３Ｔ（１×５ｍ）とする。１・２Ｔの掘り下げを始める。１Ｔの表層中より土器片多く出土する。

10月15日(土)　４Ｔ（２×２ｍ）・５Ｔ（２×３ｍ）を設定し，掘り下げ開始。

10月16日(日)　１Ｔ～５Ｔの掘り下げを行なう。１Ｔの平板実測及び遺物取り上げをする。６Ｔ（２×２ｍ）設定後，掘り下げ，表層より磨製石斧検出。

10月17日(月)　１Ｔ～６Ｔの掘り下げ。

10月18日(火)　１Ｔ～６Ｔの掘り下げ。１・２・４・６の各トレンチの平板実測及び遺物取り上げを行なう。７Ｔ（２×２ｍ）を設定する。

10月19日(水)　１・２・４・６・７Ｔの掘り下げ。２，６Ｔ平板実測。第６Ｔは貝層を確認する。獣骨，魚骨が多く認められる。県文化財保護審議会委員の河口貞徳氏の指導を受ける。

10月20日(木)　貝層は陸産系のものが多い。８Ｔ（２×４ｍ）を設定し掘り下げ開始。４，５Ｔの平板実測を行なう。

10月21日(金)　１・４・５・６・８Ｔの掘り下げ及び遺物平板実測を行なう。

10月23日(日)　平板実測図の整理。

10月24日(月)　６Ｔの南側（岩陰内）にトレンチ（２×４ｍ）を設定し，６ＢＴとする。表土層より面縄西洞式土器及び磨製石斧を検出する。各トレンチの掘り下げ。

10月25日(火)　４Ｔの下位の層より須恵器片出土。第６ＢＴの貝層は獣骨及び魚骨等が多く認められるため，水洗作業を始める。６ＡＴより鹿角製垂飾品が出土する。諏訪県文化課主任文化財研究員の指導を受ける。

10月26日(水)　６・８Ｔより貝器，骨器が出土する。

10月27日(木)　５Ｔ下層より須恵器片出土。１・６・８Ｔの平板実測及び遺物取り上げ。

10月28日(金)　８ＴよりヤコウガイＩ製加工品，スイジガイ製利器出土。犬田布小学校児童の見学。平板実測及び遺物取り上げ。

10月29日(土)　８ＴよりヤコウガイＩ製スプン出土。平板実測及び遺物取り上げを行なう。面縄中学校生徒見学。

10月30日(日)　約４㎞離れた三角点よりレベル移動を行なう。仮ＢＭＬは44.4ｍであった。
10月31日(月)　雨のため作業中止。河口貞徳氏の遺物指導を受ける。
11月１日(火)　１・６・８Ｔの掘り下げ。６Ｔ出土貝層の水洗作業。河口先生の現地指導。
11月２日(水)　２・４Ｔの土層実測。８Ｔより牙製垂飾品出土。周辺地形の測量を始める。犬田布中学校生徒見学。
11月３日(木)　２・４Ｔの埋め戻し。６・８Ｔの掘り下げ。平板実測及び遺物取り上げ。
11月４日(金)　１Ｔに混土貝層を確認する。１・６・８Ｔ平板実測及び遺物取り上げ。
11月５日(土)　１Ｔの平板実測及び遺物取り上げ。土層実測後埋め戻し。８Ｔ埋め戻し。道具の点検，後始末。遺物の梱包。調査終了。
11月14日(月)より収蔵庫にて整理作業

第４節　調査の概要

犬田布貝塚は貝層が一部露出し，周知の遺跡として注目を集めていた。表面採集された遺物も少なくなく，重要遺跡として認められてはいたが、その性格及び範囲は不明に近い状態であった。そのため今回の調査は，貝塚の性格，範囲等を確認するために実施された。

隆起サンゴ礁による岩陰の前面に位置する現サトウキビ畑は，以前より遺物等が多く採集されており貝層の広がりが相当存在すると考えられていた。そこで試掘トレンチはキビ畑のなかに第１～第５Ｔを十字形に設定し，貝層の確認に努めた。しかしながら，畑のなかは水成層と思われる砂層，粘土層等が堆積しており，貝層は認められなかった。また４，５Ｔの下位の層より須恵器片が検出され，かなり新しい時期の堆積であることが判断された。

その後，新たに設定した岩陰内の６ＢＴ，前庭部の６ＡＴ及び８Ｔの調査により，陸産貝であるヤマタニシを主とした貝層を確認した。このなかより面縄西洞式から宇宿上層式に及ぶ土器片・石器等の多くの遺物を検出することができた。また貝塚特有の貝器，骨角器等の利器及び貝・猪牙・鹿角製の垂飾品も多く出土している。今回実施した調査により，犬田布貝塚の重要性が再認識される結果となった。さらに陸産貝を主とする貝塚であるという付加すべき特殊性も確認された。

第 2 章　遺跡の位置及環境

犬田布貝塚は鹿児島県大島郡伊仙町犬田布字連木竿1,152番地で役場の北西約 6 kmにある。

この付近は旧河川の河床にあたり東西に連なった高さ数mの珊瑚礁崖に南北から狭まれた長さ500mほどの細長い低地であり，遺跡はその南側の崖に形成された岩陰部を中心に広がっており，約50mにわたり貝層が露出している。又岩陰部と前面の畑地との間には農道が存在するが，その脇の溝にも貝層が観察され多くの遺物が表面採集され歴史民俗資料館に保存展示されている。

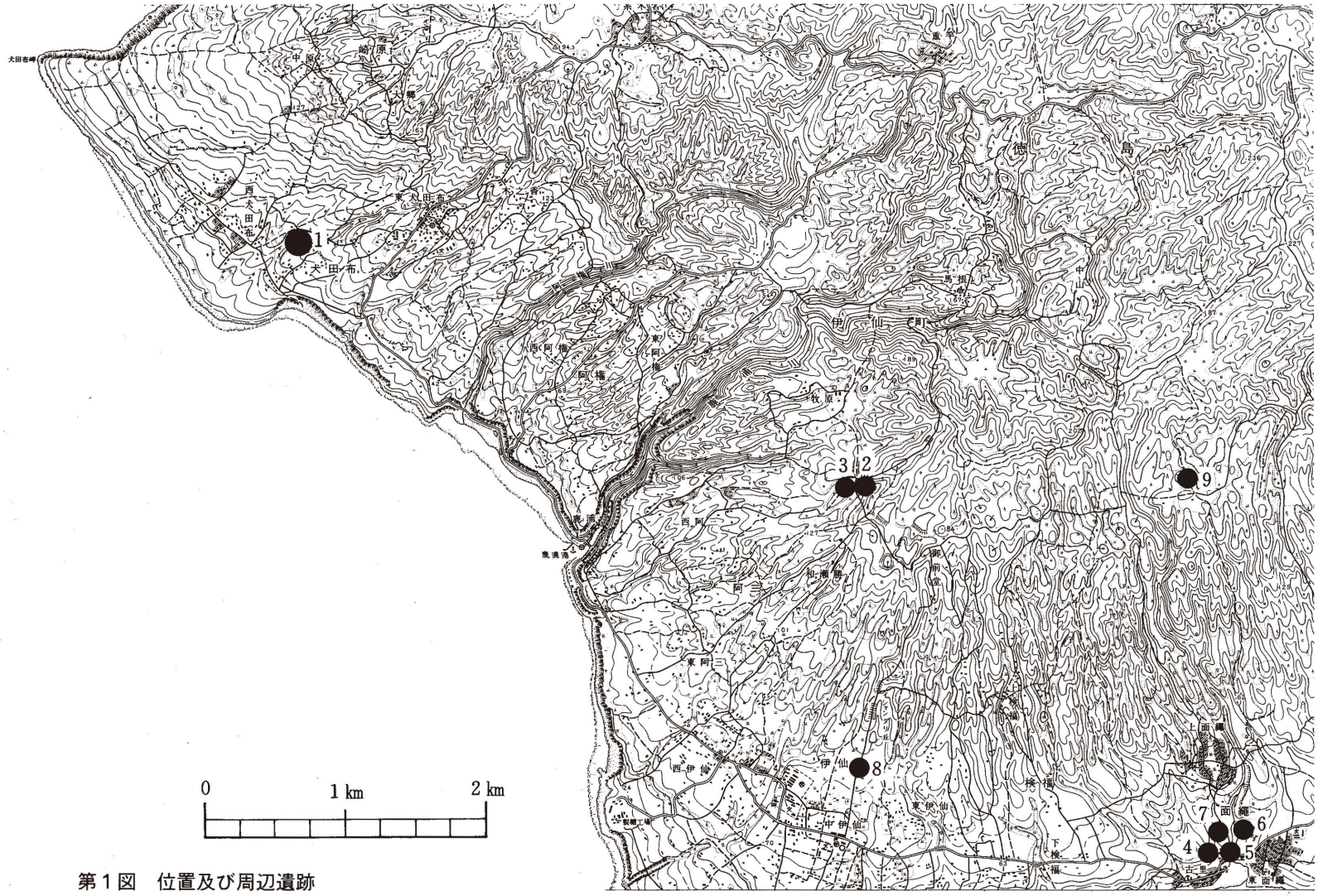
遺跡の所在する伊仙町は徳之島の南部にあたり，北部側で徳之島町と天城町と境を接する。地形は山地と隆起珊瑚礁とからなり，200m前後の山地から海岸へ向ってゆるやかに傾斜した段丘が広がり島南西部に発達している隆起珊瑚礁へと続いている。この隆起珊瑚礁は厚さ100mに達するところもあり西海岸線は20～100mの断崖となっているものの東岸部では、なだらかな海岸を呈している。

遺跡の周辺には，多くの遺跡が研究者等により確認されている。貝塚としては，本川貝塚，喜念貝塚，佐弁貝塚等や貝輪や人骨が検出された洞穴遺跡喜念原始墓，また近年砂丘地外でも遺跡の発見がなされ，標高235mの喜念上泉袋には，土器や石器が多く見られる喜念上原遺跡や，陶，磁器を多く出土するミンツキ集落址，完形の青磁碗12点が出土した面縄按司城（通称ウガンウスジ），昭和58年に発見された須恵窯跡も分布している。

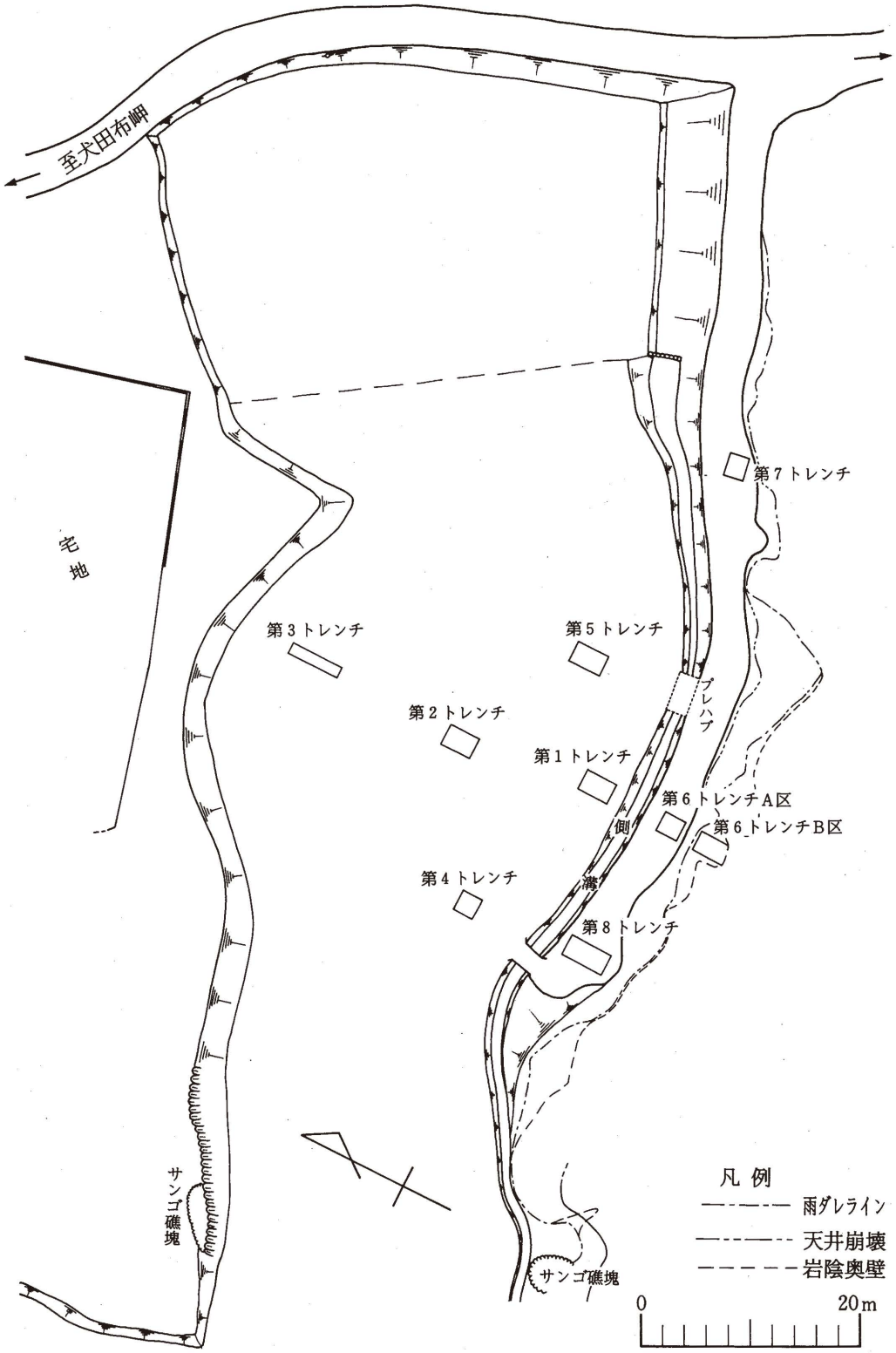
徳之島での多く遺跡は伊仙町に属し，しかも南海岸に集中している。特に面縄貝塚群は，昭和初期より多くの研究者によって調査，報告がなされ土器型式等奄美の考古学研究の基礎となっているところである。

第１表　犬田布貝塚と周辺遺跡

No	遺　跡　名	所　在　地	備　　考
1	犬田布貝塚	伊仙町犬田布字連木竿 1,152	本報告
2	カムヤキ須恵器窯跡１地点	〃　阿三	
3	〃　　2地点	〃　〃	
4	面縄第１貝塚	〃　面縄	昭和57年度報告
5	〃 第２ 〃	〃　〃	〃
6	〃 第３ 〃	〃　〃 兼久	
7	〃 第４ 〃	〃　〃 兼久 661	
8	ミンツキ集落址	〃　伊仙	
9	面縄按司城	〃　上面縄	



第１図　位置及び周辺遺跡


至犬田布岬
宅地
第7トレンチ
第3トレンチ
第5トレンチ
第2トレンチ
第1トレンチ
ブレハブ
第6トレンチA区
第6トレンチB区
側
溝
第4トレンチ
第8トレンチ
サンゴ礁塊
サンゴ礁塊
凡例
雨ダレライン
天井崩壊
岩陰奥壁
0
20m

第2図　トレンチ配置図

第３章　層位

第３図は各トレンチの土層断面図である。試掘トレンチは岩陰内部・岩陰前面の現道路部分及び旧河床と推定される現サトウキビ畑に各々設定した。調査区域は隆起サンゴ礁の上に土層が堆積しているものと思われる。

貝層は６Ａ・６Ｂ・８の各トレンチで確認された。また１トレンチでは混貝土層が認められた。各トレンチの土層を統一した基本層序は設定していない。

６Ａトレンチ

Ⅰａ層　黄褐色のサンゴ礫等の客土である。

Ⅰｂ層　黒褐色土層。旧表土であり，硬く粘質である。

Ⅱ　層　混貝土層。陸産貝等・炭化物・灰・焼土を含み，明るい赤褐色を呈する。やや粘質である。

Ⅲ　層　貝層である。炭化物・灰・焼土が多く混在し軟質である。下部は特に炭化物が多い。色調はⅡ層より暗い。

Ⅳ　層　黄褐色粘土層。軟質で粘性に富む。

６Ｂトレンチ

Ⅰ　層　暗褐色土層。薄く堆積しており，粉塵のように粒子が細かい。

Ⅱ　層　混貝土層。暗褐色土のなかに陸産貝を中心とした貝類が混在する。魚骨の小骨細片が多く認められた。

Ⅲ　層　貝層である。炭化物・灰・焼土を多く含み軟質である。

Ⅲ下層　混土貝層。Ⅲ層と比較して貝類が少なくなる。

Ⅳ　層　砂層。隆起サンゴ礁である岩陰の奥壁に，部分的に堆積している砂が流れ込んだものと考えられる。

８トレンチ

Ⅰａ層　黄褐色のサンゴ礫等の客土である。

Ⅰｂ層　黒褐色土層。旧表土であり，硬く粘質である。

Ⅱ　層　混貝土層。貝類・炭化物・灰・焼土を多く含み，硬く粘質である。赤灰色を呈する。

Ⅱｂ層　暗褐色土層。軟質で粘性はない。貝類・木炭・灰・焼土等は少ないが認められる。

Ⅲ　層　貝層である。軟質で粘性は弱い。径10～20㎜の木炭が多く混在する。また焼土・灰等も多い。Ⅱ層より明るい赤灰色を呈する。

Ⅳ　層　黄褐色粘土層。粘質で，若干硬さがある。

３トレンチ

Ⅰ　層　暗褐色土層。軟質の耕作土である。

Ⅱ　層　砂層。厚さは不明である。

下層は確認できなかった。

7トレンチ

Ⅰa層の黄褐色サンゴ礫等の客土のみである。下はサンゴ岩であった。

1トレンチ

Ⅰ　層　暗褐色土層。軟質の耕作土である。粘性は少ない。

Ⅱ　層　暗褐色土層。硬く粘質である。貝細片が混在する。

Ⅲ　層　暗茶褐色土層。硬く粘質である。貝片等は磨耗している。

Ⅳ　層　褐色土層。軟質で粘質である。貝片及び遺物等が混在する。

Ⅴ　層　混貝土層。軟質で粘質である。焼土・炭化物・灰等が多く混在する。

Ⅵ　層　黄褐色土層。部分的に確認した。

2トレンチ

Ⅰa層　暗褐色土層。軟質の耕作土である。

Ⅰb層　黒褐色土層。攪乱層であり，粘質で硬い。遺物が混在する。

Ⅱ　層　暗褐色土層。サンゴ粒子を多く含み，硬くしまっている。下半部は色調がうすくなり砂質が強くなる。

Ⅲ　層　淡褐色砂層。明茶色粘土が若干混じる。水成作用によるものと思われる。

Ⅳ　層　茶色粘土層。硬質であり，粘性も強い。

4トレンチ・5トレンチ

Ⅰa層　暗褐色土層。軟質の耕作土。

Ⅰb層　暗黄褐色土層。軟質で石灰岩礫が混在する。攪乱層である。

Ⅱ　層　暗褐色土層。粘質が強く硬い。石灰岩（径10～50㎜）が点在する。

Ⅲ　層　茶褐色土層。砂礫が多く粘質は弱い。

Ⅳ　層　明茶褐色土層。粘質は弱く，石灰岩粒子が多い。

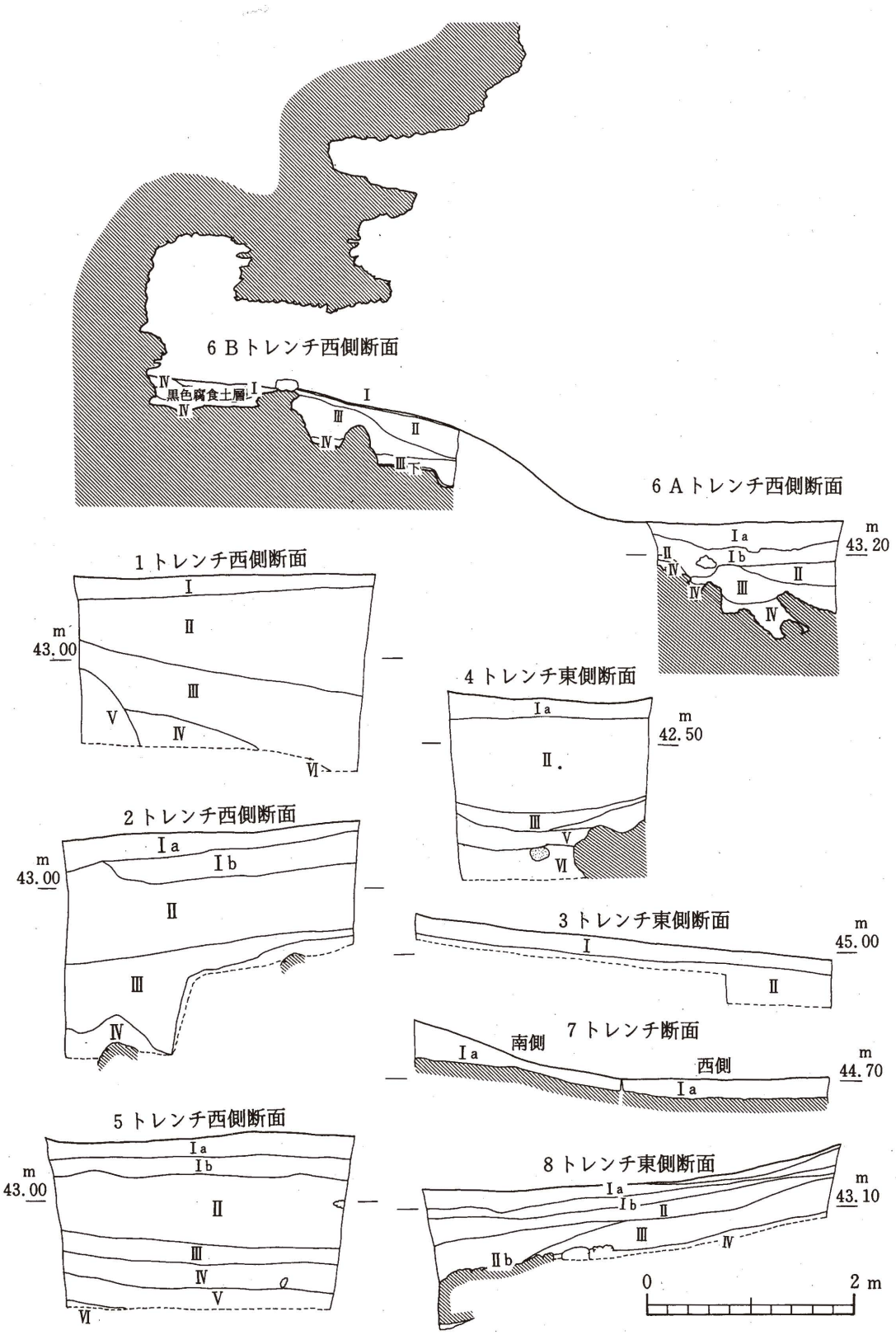
Ⅴ　層　暗褐色土層。粘質は強く硬い。土器細片及び炭化物を含む。

Ⅳ　層　暗茶褐色土層。粘質は強く硬い。石灰岩粒子及び粘板岩粒子と遺物が混在する。

各土層はトレンチ調査のため接続せず，また火山灰等の明瞭な鍵層も存在しないため対比は困難であった。畑地部分は土層の堆積が水成作用によるものと思われ，土層はレンズ状に堆積しており，比較が困難であったが一応の比較を試みた。

6Aトレンチと8トレンチの各層はほぼ対応するようである。これと6Bの土層との関係は不明である。2トレンチのⅢ層と4・5トレンチのⅢ層は対応する。

キビ畑部分は水成作用によって形成されたようである。それは3トレンチⅡ層及び2・4・5トレンチⅢ層の砂層によって理解される。また，4・5の各トレンチのⅣ層から須恵器片が出土したことからも理解できよう。


6Bトレンチ西側断面
黒色腐食土層
6Aトレンチ西側断面
m
43.20
1トレンチ西側断面
m
43.00
4トレンチ東側断面
m
42.50
2トレンチ西側断面
m
43.00
3トレンチ東側断面
m
45.00
7トレンチ断面
南側
西側
m
44.70
5トレンチ西側断面
m
43.00
8トレンチ東側断面
m
43.10
0
2 m

第3図　土　層　図

第４章　遺　物

第１節　土　器　（第４～13図，図版８～15）

Ⅰａ類　（１～９）

Ⅰａ類は面縄西洞式系統の土器片である。１が第１トレンチ，２・３が第４トレンチ，４が第６－Ａトレンチ，他が第６－Ｂトレンチから出土した。口縁近くとその下位に刻み突帯を付し，その間に斜位の沈線（１・３・６・７）・鋸歯文（４）等を施す。５・８は半載竹管文を利用したものである。胎土はサンゴ粉を含み，１・３・５・８は精製土を用い，５は雲母片を含む。他は細砂粒を含んでおり，色調は茶褐色を呈するものが多く，７は暗茶褐色を呈する。

Ⅰｂ類　（10～21）

Ⅰｂ類は，突帯ないしは突帯状の部分に連点文（16～17・19～21）を，その間に鋸歯文（10・11・13～15・21），連点文（12・19）を施すものである。10～14が表採，15～18が第６－Ｂトレンチ，19～21が第８トレンチから出土した。面縄西洞式系統の土器片である。

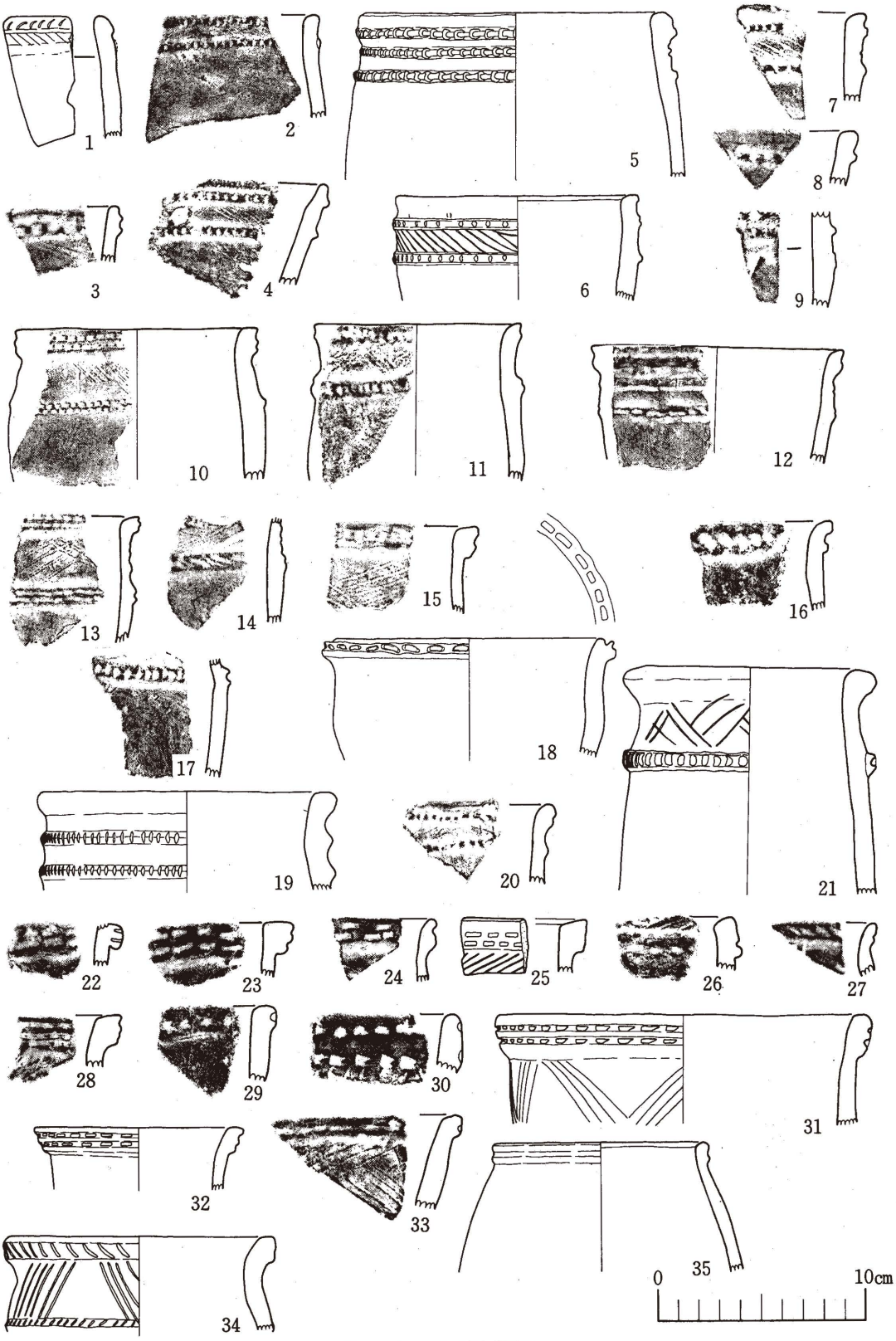
連点文は，半裁竹管を利用したもの（10・11・13・15・20），押し引き状の連点文（12），斜位の連点文（14・16），刺突連点文（17・18・21），刻みによる連点文（19）等の多くの方法を用いて施文している。器面調整は，なで仕上げが多いが，12では貝殻腹縁を利用した条痕が一部みられる。胎土はサンゴ粉や花岡岩砂を含んでおり，18・21はやや多く含む。焼成は11・21がやや悪く他は良い。色調は茶褐色を呈するものがほとんどであるが，10の口縁部近くと21の突帯以下は黒褐色，12が茶褐色を呈する。

Ⅱａ類　（22～41）

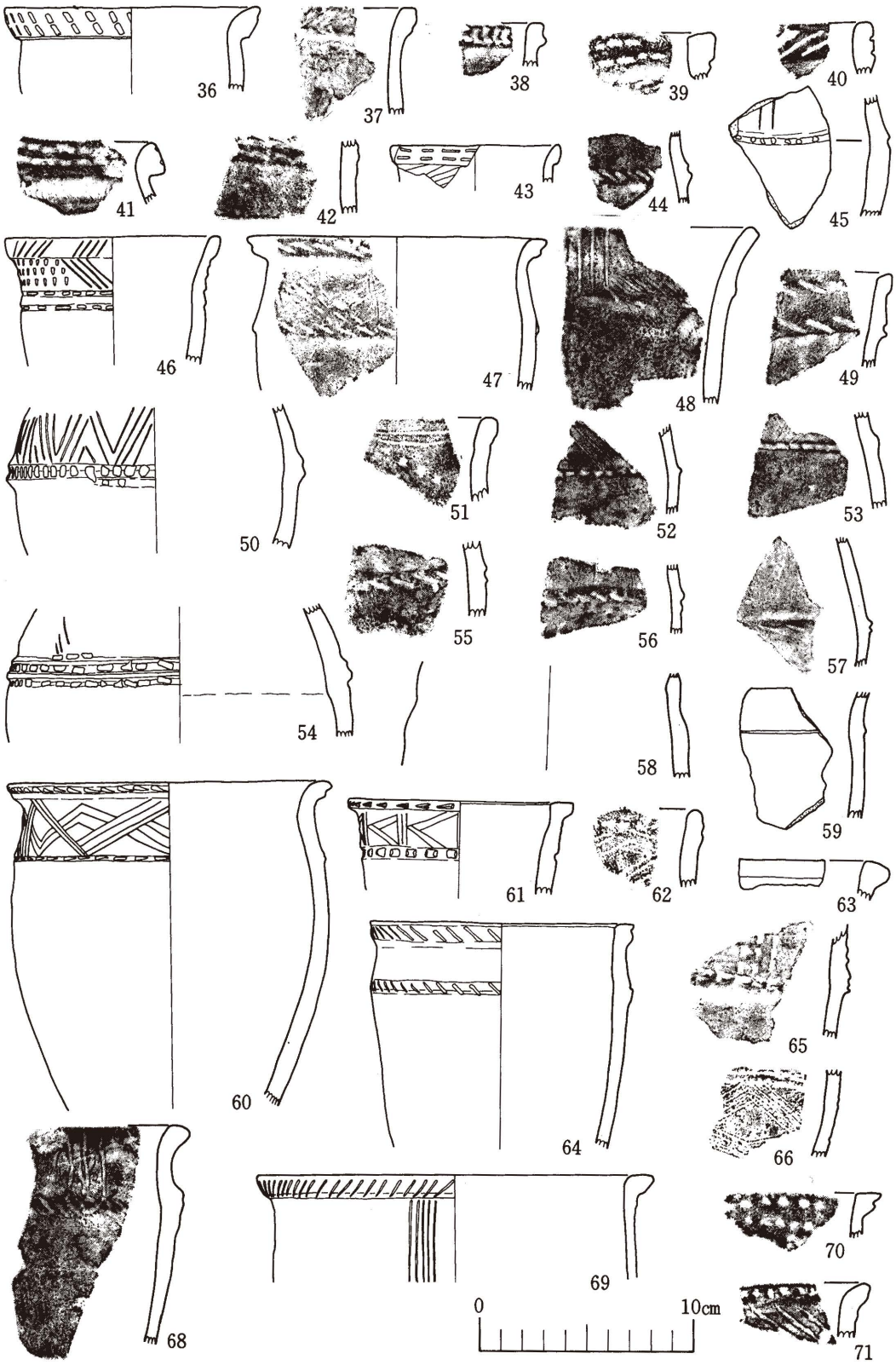
Ⅱａ類は，口縁部を肥厚させて連点文を施し，頸部に鋸歯文等を施すものであり，Ⅰ類に近い形態をもつものである。22～24が表採，25・26が第１トレンチ，27・35が第６－Ａトレンチ，36～40が第６－Ｂトレンチ，41が第８トレンチより出土した。連点文は半裁竹管を利用したもの（38），押し引き状に施したもの（25・28・31～33・35・39・41），二又状工具で施したもの（30），斜位に施すもの（27・36・40）等の種類がある。31・32は二又状工具で押し引き状に連点文を施しており，25・28も同様である。22は鋭利なもので施文している。胎土にサンゴ粉や花崗岩砂を含んでいる。焼成は32がやや悪いが他は良い。色調は茶褐色を呈するものがほとんどであるが，25・36・38は暗茶褐色，27は黒褐色を呈する。

Ⅱｂ類　（42～71）

Ⅱｂ類は，Ⅱａ・Ⅱｂ類と文様構成が類似するものの口縁部を肥厚させない点，突帯を付さない点から区別した。外反する口縁部をもち，肩部は輪積部を突帯状に張り出して連点文を施して，頸部に鋸歯文や幾何学文を施すものである。42は表採，43～45が第１トレンチ，46～59が第６－Ａトレンチ，60～67が第６－Ｂトレンチ，68が第８トレンチ，69～72はⅡｂ類に含めることにやや疑問が残るが一応この頃に含めたものである。69～70では口縁が三角に肥厚している。69～71が第６－Ａトレンチ，72が第６－Ｂトレンチからの出土である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

第４図　土器実測図１


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
68
69
70
71
0
10cm

第５図　土器実測図２

46は連点文と斜位の沈線文とを組み合せ,53・60・66は鋸歯文ないしは鋸歯文の組み合せを，48・68は縦位の沈線，61は縦位の沈線と鋸歯状文との組み合せ等文様にバラエティーがみられる。58・59・63は無文であるが，59は沈線状のものをもつ。50・54は二条の連点文を施すことにより間が突帯状となるものである。胎土にサンゴ粉・花崗岩砂を含む。46・50・51・68はやや砂分を多く含み，焼成もやや悪い。64・69は微細砂を含み，焼成は非常に良い。調整は一般的になで調整であるが，64ではヘラ状工具による縦位の調整がみられる。色調は茶褐色を呈するものがほとんどである。48・52・57・54・60・69が暗茶褐色，55・58・66は黒褐色を呈している。

Ⅱc類　(73～78)

Ⅱc類は，Ⅱb類の器形をもち，琉球系の伊波・萩堂式の連点文が影響したものと考えられるものである。連点文を数条施したり，鋸歯状に二条に施したりする。77・78はやや押し引き状に近い。73が第4トレンチ，74～78が第6－Bトレンチから出土した。胎土にサンゴ砂，花崗岩砂を含み，74～76はやや砂分を多く含む。73が暗茶褐色を他は茶褐色を呈し，焼成は良い。

Ⅱd類　(79～97)

Ⅱd類は，器形・胎土等からⅡ類の一群としてとられる無文の土器片である。口縁部を肥厚させる円筒形状の甕形土器片である。93は口縁部で横位・胴部は縦位のヘラみがきを行っており，研磨土器としてとらえられるもので，茶褐色を呈し，焼成は非常に良い。86～88・90・95～97は口唇部で平坦なものであり，Ⅱa類に近いものである。茶褐色を呈し，焼成は良い。胎土にサンゴ砂・花崗岩砂を含むのは，Ⅱ類全体の特徴と同じである。79～83は第1トレンチ，84が第4トレンチ，85.86 が第6－Aトレンチ，87～94が第6－Bトレンチ，95～97が第8トレンチから出土した。

Ⅲa類　(98・99)

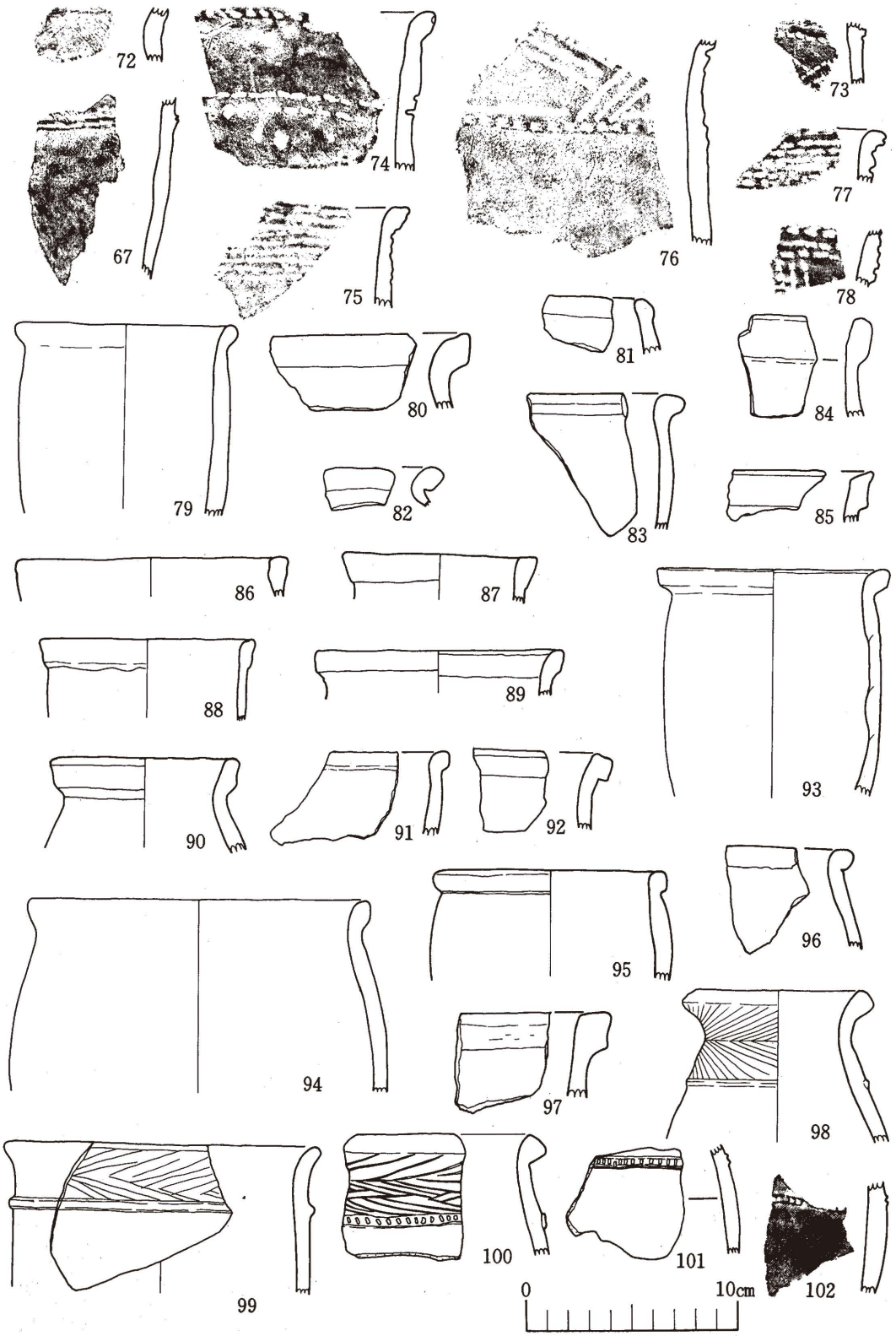
Ⅲa類は，肩部に無文の突帯を付し，頸部に鋭いヘラ状工具による細い沈線で羽状に施すものである。98は頸部がしまり，99はやや円筒状を呈する。98は，褐色を呈し，焼成は良い。胎土にサンゴ粉・花崗岩砂を含む。99は，褐色を呈し，胎土・焼成は98と同様である。両者とも第8トレンチ出土のものである。

Ⅲb類　(100～103)

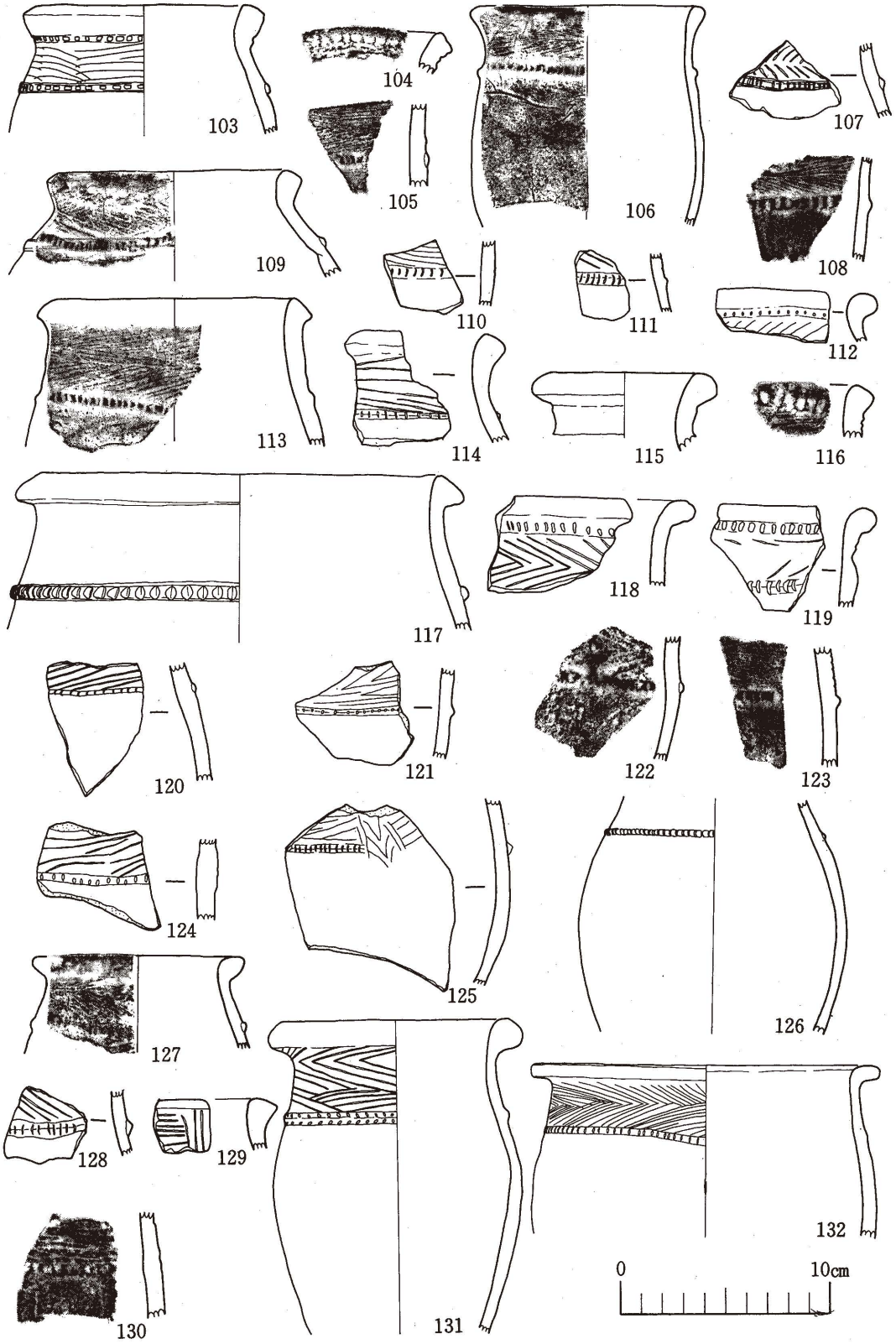
Ⅲb類は，Ⅲa類と同様の器形を有するが，突帯に連点文を施すものである。頸部には100がやや雑な羽状文・103が波文状の文様を施す。101・102は突帯以下の胴部片である。100・101が第1トレンチ，102が第6－Aトレンチ，103が第8トレンチより出土した。胎土にサンゴ粉・砂粒を含み，焼成は良い。色調は茶褐色を呈する。

Ⅲc類　(104～126)

Ⅲc類もⅢa・Ⅲb類と同様の器形・文様構成であるが，刻み突帯を付す点から細分した。甕形を呈すもの（106・113等），壺形に近い器形のもの（115・125・126等）等があるが，口縁部がやや内傾して外反して，胴部がやや張る器形である。104が表採，105～111が第1トレンチ，


72
73
74
67
76
77
75
78
79
80
81
84
82
83
85
86
87
88
89
93
90
91
92
94
95
96
97
98
99
100
101
102
0
10cm

第６図　土器実測図３


103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
0
10cm

第７図　土器実測図４

112が第4トレンチ，113～126が第8トレンチ出土のものである。

突帯は刻みを施すことは全体に共通することであるが，頸部の文様は種々みられる。104～106・109・113では密な羽状文を，107・110～112，114・118～124は粗な羽状文を施し，125では縦位の羽状文と横位の羽状文を組合せており，115・117・126では無文となっている。112・114・115・119は口唇部を丸く，113・117では口唇部が断面三面形を呈している。117は黒褐色を呈し，他は茶褐色ないし暗茶褐色に近い色調を呈する。胎土にサンゴ砂・砂粒を多く含み，焼成は良い。

Ⅲｄ類　(127～137)

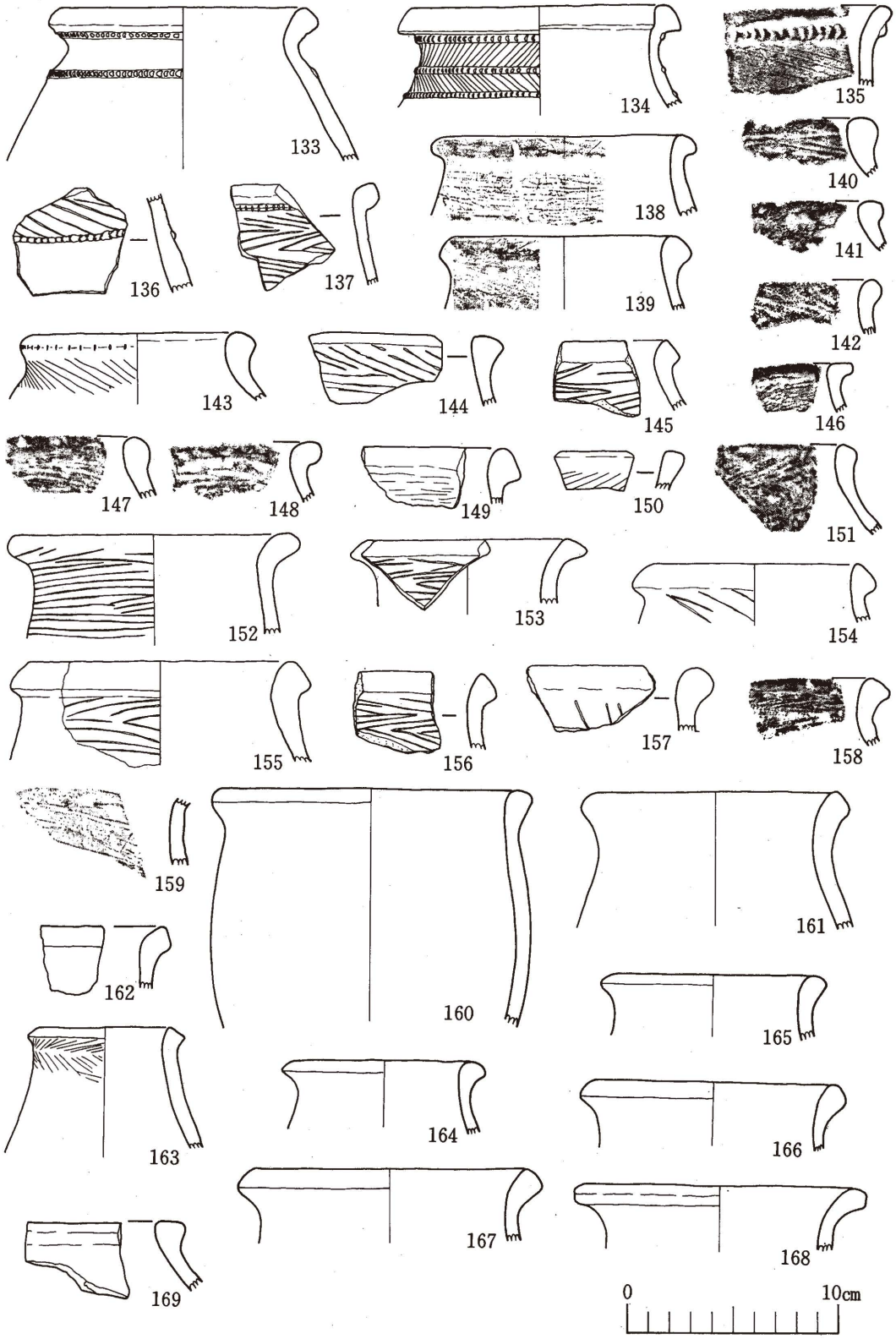
Ⅲｄ類は，Ⅲｃ類に含められるものであるが，突帯の刻みが二又状工具ないしは半裁竹管状の工具により施されているものである。131が刻みが二系の連点状にみえるものである。頸部に羽状文を鋭利なヘラ状工具で施してある。口縁より胴部の方が径が大になる。133は頸部は無文で，134では頸部に刻み突帯を付す。127～129が第1トレンチ，130は第4トレンチ，131～137が第8トレンチから出土した。胎土にサンゴ粉・砂粒を含み，色調は暗茶褐色を呈す。焼成は良い。

Ⅲｅ類　(138～160)，Ⅲｆ類　(161～169)

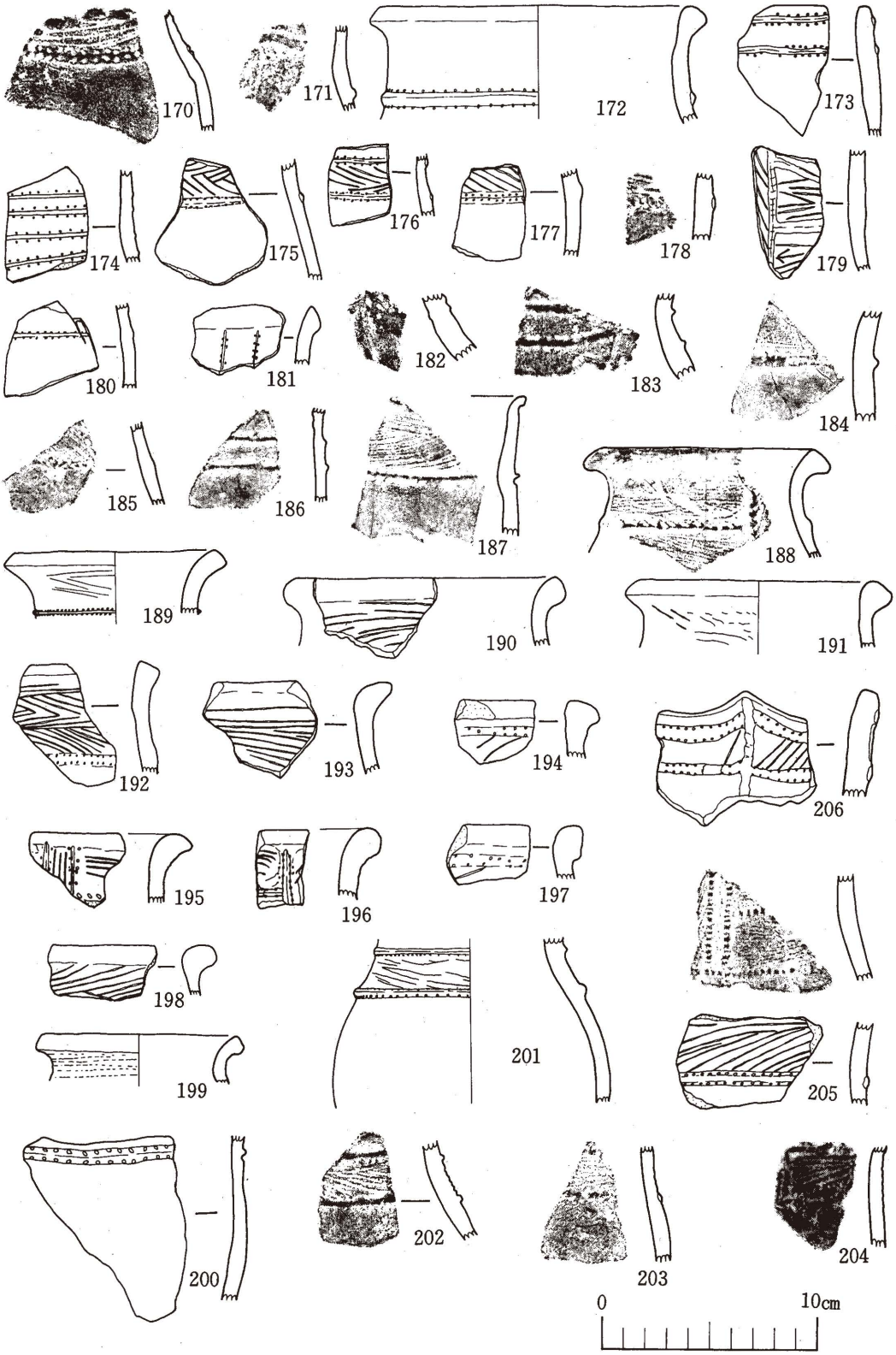
Ⅲｅ類・Ⅲｆ類はⅢ類としてとらえれるものの一群であり，Ⅲｅ類は羽状文を有する口縁部片，Ⅲｆ類は無文の口縁部片である。口縁部には陵を明瞭にもつものと，やや丸味を帯びるものとがある。Ⅲｅ類での頸部の羽状文は密なもの（138・139・158）や，粗なもの（155～156・153），横位の沈線だけ（152・149），斜位の沈線（143・150・154）等がある。無文のものは，甕形状のもの（161），壺形状に頸部がしまり，口縁が外反するもの（162・168）等がある。色調は茶褐色ないしは暗茶褐色を呈し，胎土にサンゴ粉・砂粒を含む。焼成は良い。138～151，161が第1トレンチ，152～160・164～169が第8トレンチ，162が第4トレンチ，163が第6－Ｂトレンチから出土した。

Ⅳ類　(170～204)

Ⅳ類は，伊仙町喜念貝塚出土の土器を標式とする喜念Ⅰ式に比定できるものである。器形は甕形（172・173・187等）・壺形（188・189・201等）を呈するものがあり，口縁が波状を呈するもの（207）もある。頸部に細いヘラ状工具により横位，斜位の沈線文や羽状文を描き，頸部や肩部に突帯を付してその両側に細かな連点文を施すものである。突帯も横位のものが中心であるが，縦位に付すもの（179・195・196・206・207）もある。胎土は精製に近い土を使用しているが，サンゴ粉・花崗砂を含むことは他の類のものと同様である。焼成はおおむね良い。色調は173・174・176・179・181～183・185～187・189・190・194～196・206・205が茶褐色を，他は暗茶褐色を呈する。170・171が表採，172～179が第1トレンチ，180・181が第2トレンチ，182が第4トレンチ，183・184が第6－Ａトレンチ，185～187が第6－Ｂトレンチ，188～207が第8トレンチより出土した。


133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
0
10cm

第８図　土器実測図５


170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
206
195
196
197
198
199
201
205
200
202
203
204
0
10cm

第９図　土器実測図６

Ⅴ類　(208～265)

Ⅴ類は宇宿上層式に比定できるものである。器形は甕形土器（234・242・248～257等）と壺形土器との２種（208・216～222・237他等）がある。口縁部は肥厚し，その断面形は多くの形態がみられる。器面に文様を施すものはなく，宇宿上層ａ式に比定できるものである。胎土は精製された細砂を含む粘土を使用しているが，サンゴ粉・花崗岩砂を混入している。中でも214・218・224・227・230・232・233・236・237・242・244・247・263・265は砂分がやや表面がザラザラした感じである。色調は216・225・231・235・237・238・240・242・245・247・248・253・261が暗茶褐色を，他は茶褐色を呈するものである。焼成は良いが，磨耗のはげしいものもある。208～227が第１トレンチ，228・229が第２トレンチ，230～232が第４トレンチ，233～234が第６－Ａトレンチ，235が第６－Ｂトレンチ，236～265が第８トレンチからそれぞれ出土した。

Ⅵ類　(266～299)

Ⅵ類は，やや特殊な土器群であるが，271～281がⅤ類に，266がⅡ類に，286～292がⅠ～Ⅲ類のいずれかに含めることも可能である。271～273は口唇部が平坦で，Ⅱｂ類の86～89と形態を一にするものの胎土がやや異なり砂粒を多く含んでいる点が異なる。266は今回の調査での唯一の完形品で小形の甕形土器である。胎土・焼成はⅡ類に似る。267は台付浅鉢形土器の口縁部と考えられる。波状口縁を呈し、口唇近くと肩部に羽状文を施す。268・269・は胴部片で横位の沈線の両側に羽状の文様を施している。第６－Ａトレンチから270～272，275・276が，第６－Ｂトレンチから267・268・273・277・278が，第８トレンチから266・274・279～281が出土した。280が黒褐色を呈し，他は茶褐色を呈する。胎土にサンゴ粉・花崗岩砂含み，焼成は良い。267は外面にハケ目調整，内面はナデ調整され，焼成は非常に良い。278断面が三角形を呈する口唇部をもち，内外横位のナデ調整が行なわれている。

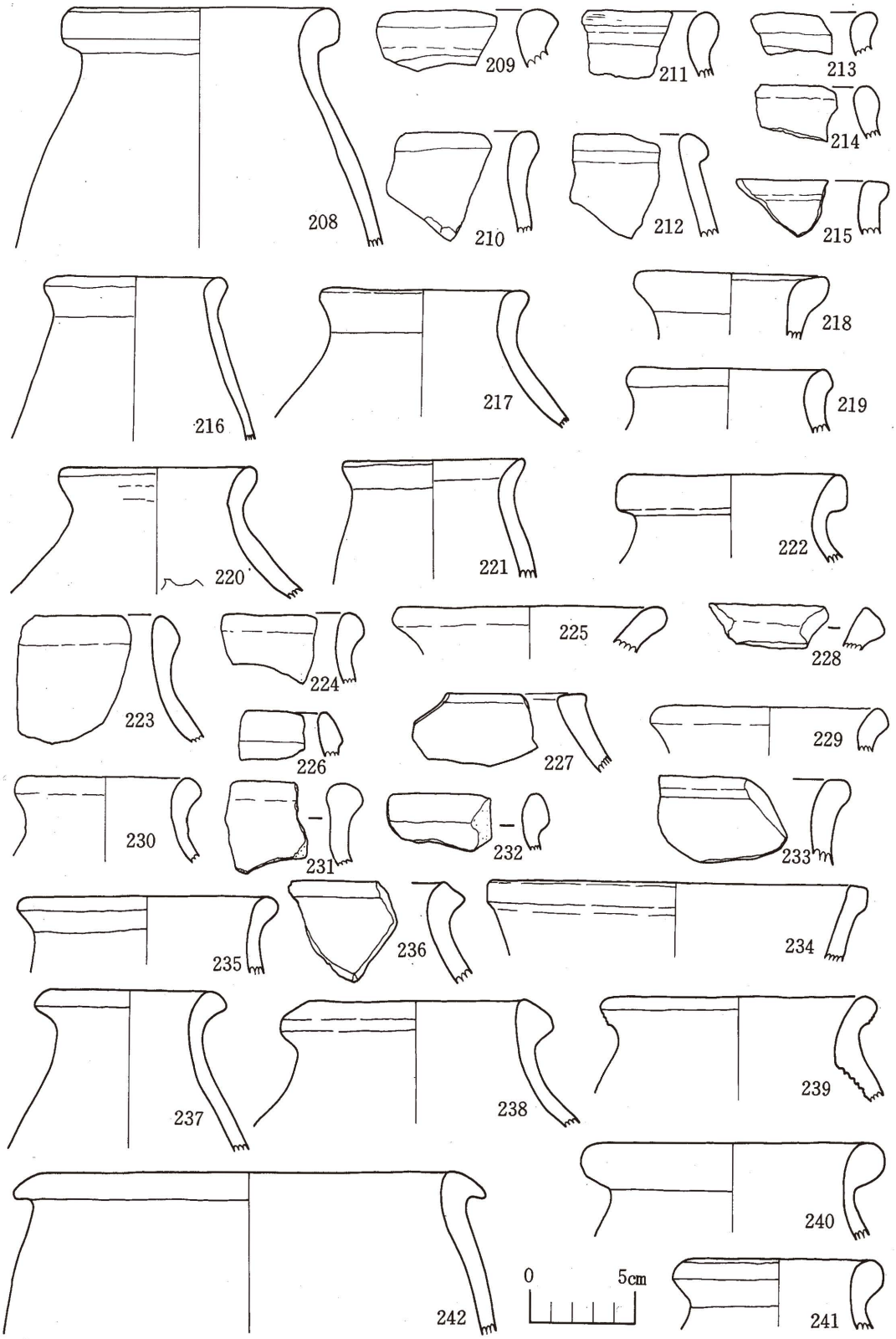
282・283は第８トレンチ出土のもので，コブ状突起を有するもので同一個体と考えられるものである。口縁部はやや内傾し，口唇部は水平である。茶褐色を呈し，胎土は精製土を使用し，焼成は良い。

284・285は補修孔をもつもので，284が第６－Ａトレンチから285が第６－Ａトレンチから出土した。284には外にまっすぐ開く口縁部片で，口縁近くに刻み突帯付し，橋状の把手があったと考えられるものである。284の補修孔は内外から，285は一方からのみ穿孔し，内側からのものは外側にまで達していない。胎土はやや土師質で，茶褐色を呈し，焼成は良い。

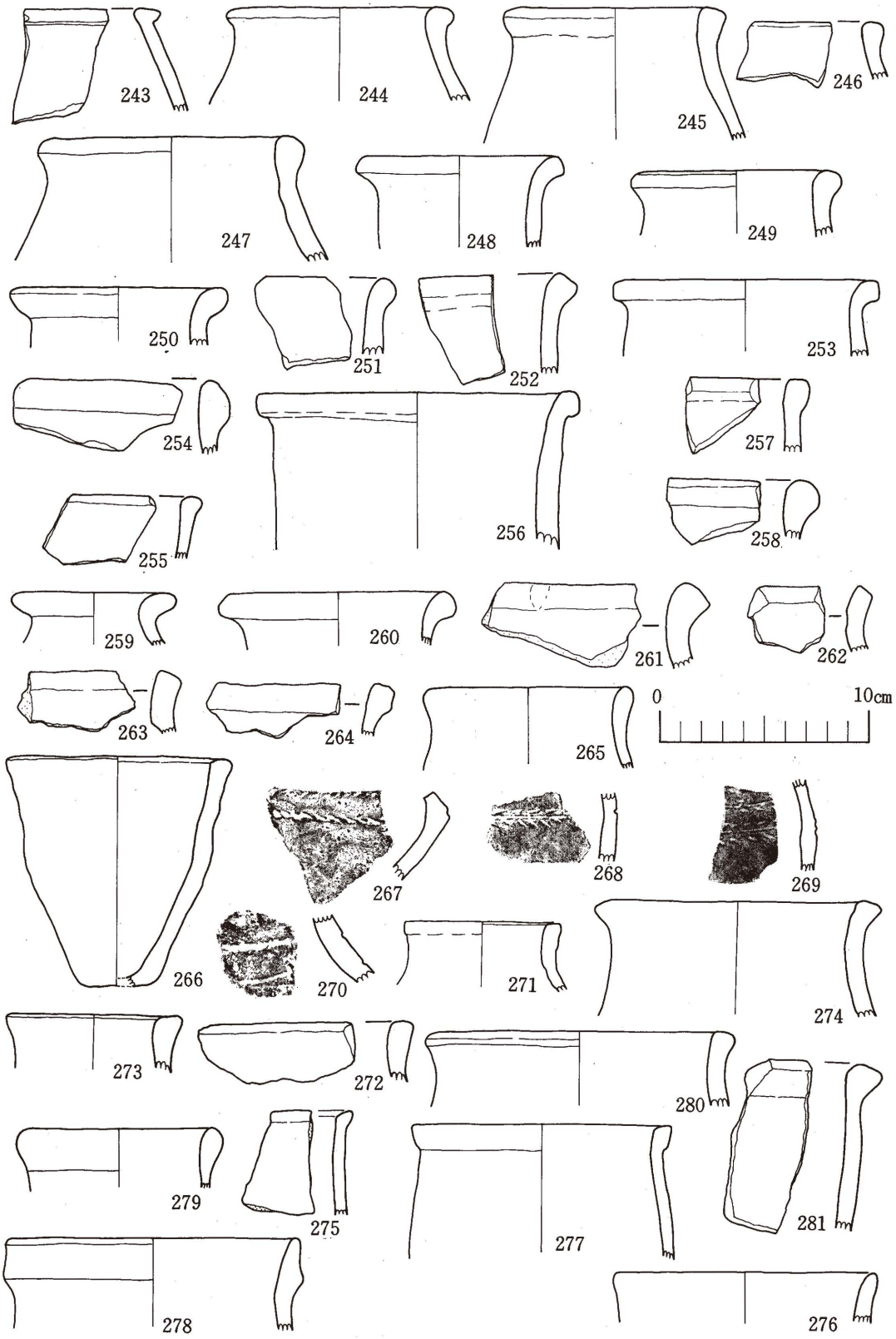
286は，第６－Ｂトレンチから出土し，Ⅱ類に含められると考えられるほぼ円筒形の胴部に板状の突帯を貼り付けたものである。内外面の表面はやや粗い調整である。色調は暗褐色を呈し，胎土に砂粒を多く含み，焼成は良い。

287は鉢形を呈するもので第８トレンチから出土した。ゆるやかに内湾する口縁部に平底をもつものである。口唇部は丸くつくられている。胎土は土師質で，暗茶褐色呈し，焼成は良い。

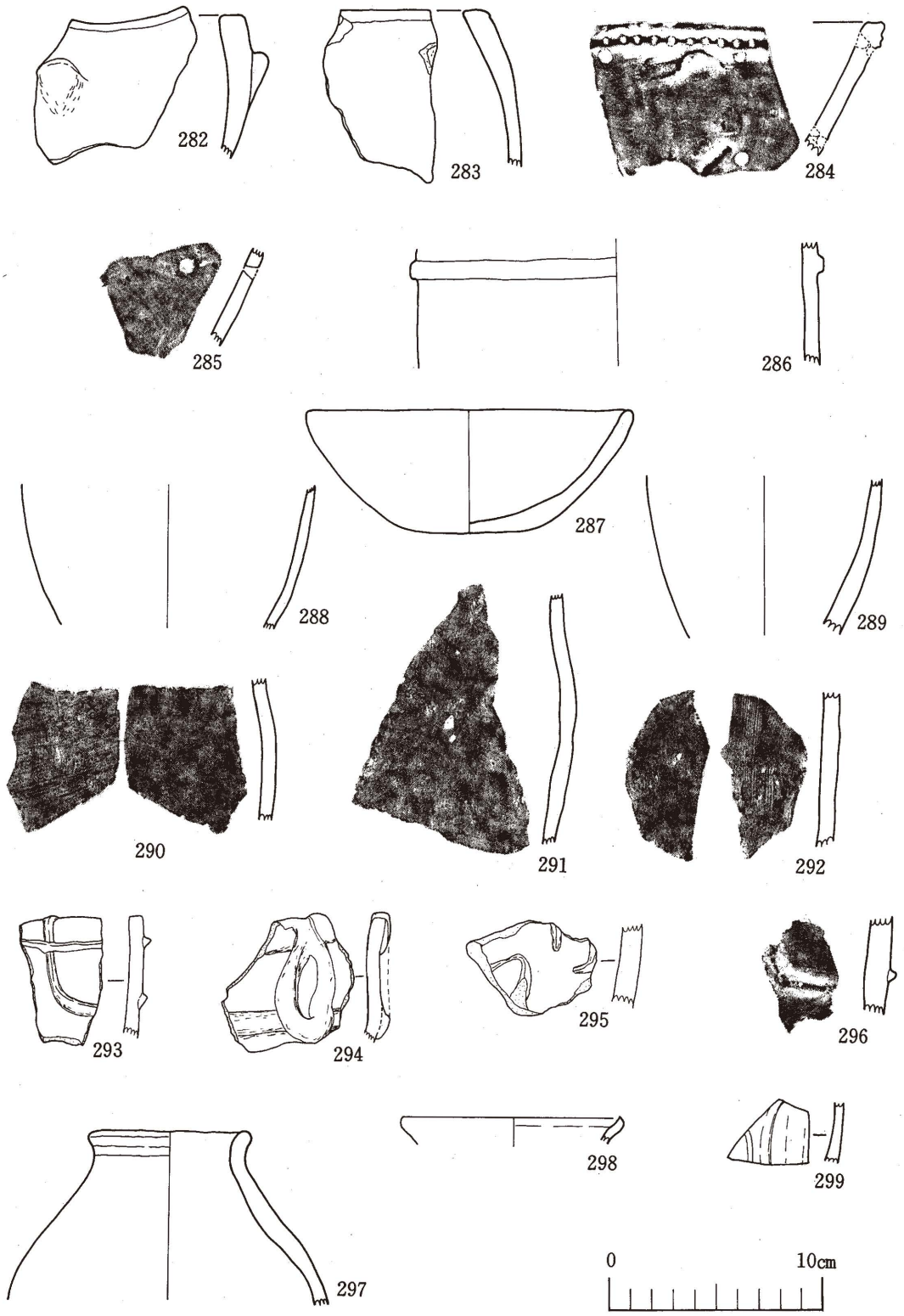
288～292は，胴部片である。288が第８トレンチ，289が第６－Ａトレンチ，290～292が第６


208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
0
5cm

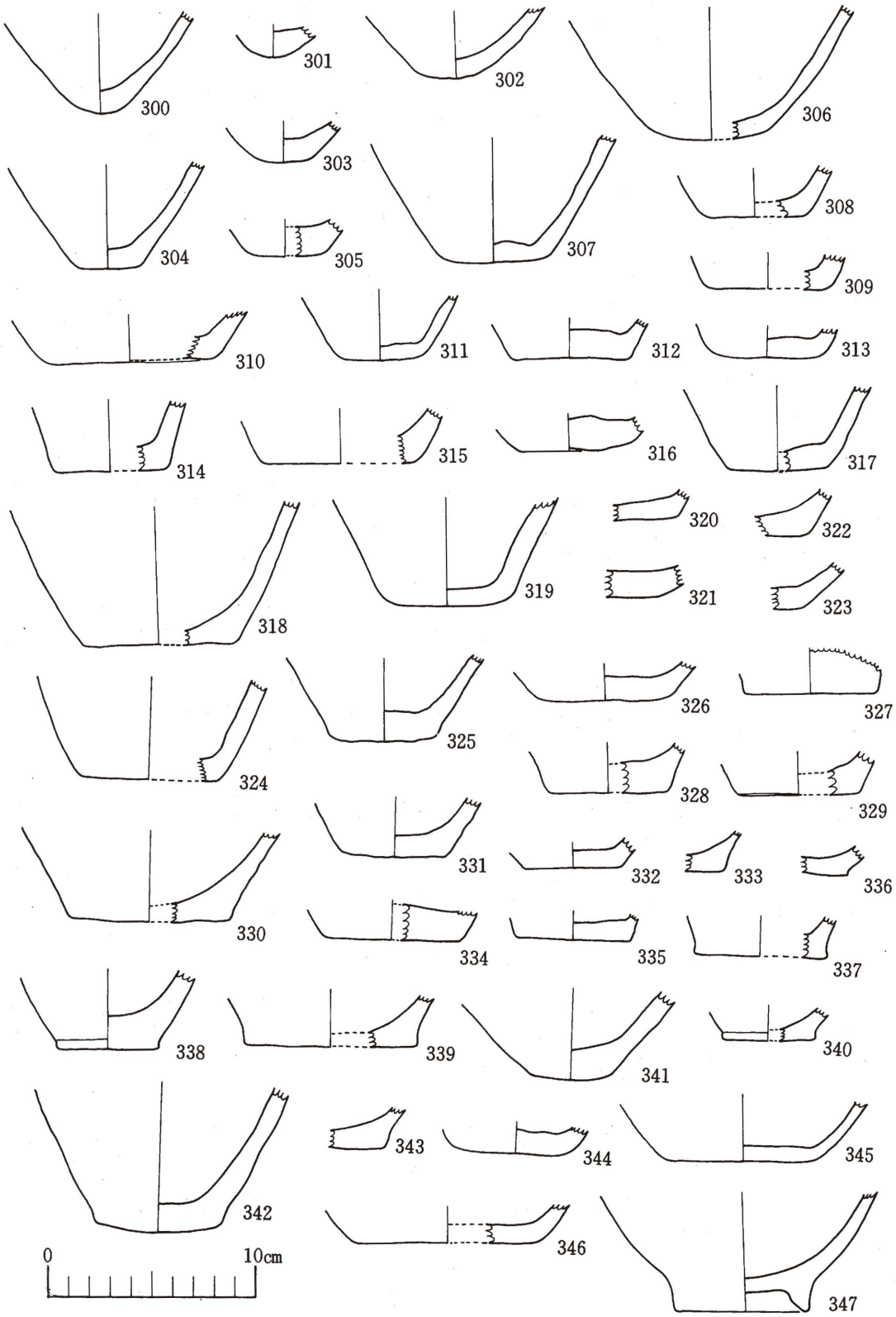
第10図　土器実測図７


243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
0
10cm
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281

第11図　土器実測図８


282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
0
10cm

第12図　土器実測図９



第13図　土器実測図10

－Ｂトレンチから出土した。甕形を呈する土器片でありⅡ類に含まれるものである。288がナデ調整，289は縦位のハケ目調整，290は斜位のハケ目調整，291は外面がナデ調整，内面は輪積みの際の指の圧痕がみられる。291は外面がナデ，内面は板ないし小形の貝によると考えられる縦位の条痕がみられる。胎土にサンゴ粉，花崗岩の微細砂粒を含み，焼成は良い。

293～296は兼久系統の土器片である。293～296が第６－Ｂトレンチ出土のものである。293は「ｔ」字状に，294は２本の突帯に惰円形の，296は「Ｌ」形に粘土を貼り付けたものである。293・294の外面は黒褐色，内面と他は茶褐色を呈している。

297は口縁径が小さく，外反するものである。胎土にサンゴ粉，花崗岩砂を含み，焼成は良い。色調は茶褐色を呈する。

298は須恵器の壺の口縁部片である。胎土にサンゴ粉を多く含む。第４トレンチ出土である。

299は黄褐色を呈する青磁片である。外面に蓮葉文を陰刻する。

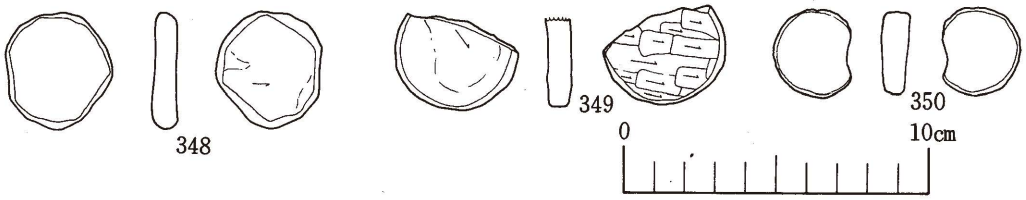
底部　(300～347)

底部片はその器形から尖底状のもの(300～302)，丸に近い平底(303～306)，小形の平底(307～313)，平底（314～337)，張り出しをもつ平底（338・339)，丸底（341～343)，土師質の胎土をもつ平底（344～346)，高台をもつもの（347）とに分類できる。胎土にサンゴ砂・花崗岩砂を含むのは，口縁及胴部の破片と同様である。焼成は全体として良い。色調は茶褐色ないし暗茶褐色を呈している。344～346は土師質の精製土を使用しており，淡茶褐色を呈し，焼成は良い。301・310・315・324・346が表採）304・305・307・312・319・327が第１トレンチ，326が第２トレンチ，317・320・321・328・329・333・334・336・338・340が第６－Ａトレンチ，311・313・318・322・330・339・344・345が第６－Ｂトレンチ，他は第８トレンチからの出土である。

第２節　土製品　(348～350)

土器の破片を利用して，円形に加工したものである。径は2.8～4.0cmの小形のものである。

348は第１トレンチ，349は表採，350は第８トレンチから出土した。349の裏面にはヘラ状工具によるナデがみられる。胎土にサンゴ粉，花崗岩砂を含み，焼成は良い。色調は茶褐色を呈する。



第14図　土製品実測図

第２表　出土土器トレンチ及層位対照表(1)

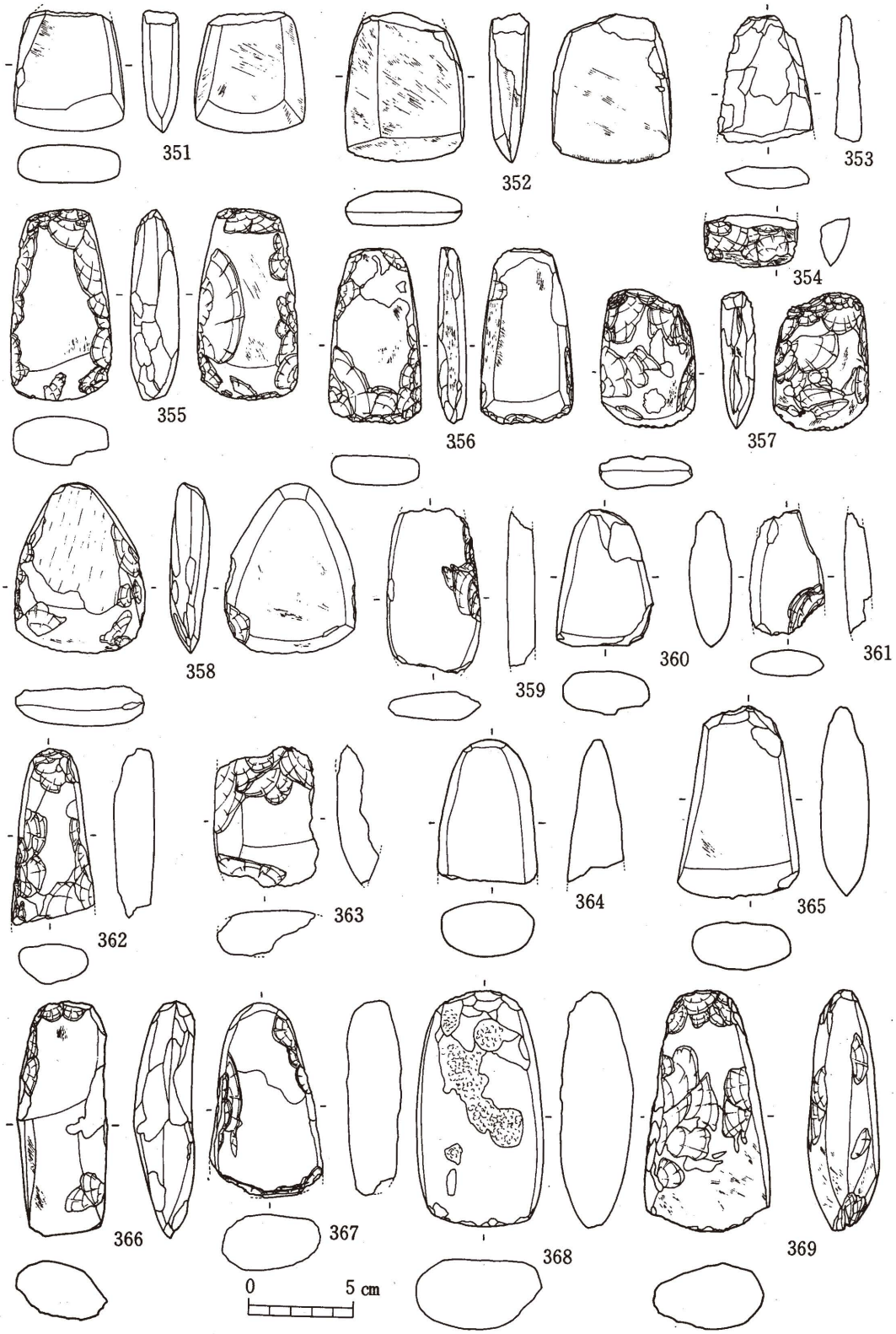
No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層
1	Ⅰ	1	Ⅲ	34	Ⅱa	6A	Ⅲ	67	Ⅱb	6B	Ⅲ	100	〃	1	Ⅳ
2	〃	6A	Ⅲ	35	〃	6A	Ⅲ	68	〃	8	Ⅱ	101	Ⅲb	1	Ⅳ
3	〃	4	Ⅲ	36	〃	6B	Ⅲ	69	〃	6A	Ⅲ	102	〃	6A	Ⅲ
4	〃	6A	Ⅰc	37	〃	6B	Ⅱ	70	〃	6A	Ⅲ	103	〃	8	Ⅲ
5	〃	6B	Ⅲ	38	〃	6B	Ⅲ	71	〃	6A	Ⅰ	104	Ⅲc		表
6	〃	6B	Ⅲ	39	〃	6B	Ⅲ	72	〃	6B	Ⅰ	105	〃	1	Ⅲ-Ⅳ
7	〃	6B	Ⅲ	40	〃	6B	Ⅲ	73	Ⅱc	4	Ⅱ	106	〃	1	Ⅳ
8	〃	6B	Ⅱ	41	〃	8	Ⅲ	74	〃	6B	Ⅲ	107	〃	1	Ⅳ
9	〃	6B	Ⅲ	42	Ⅱb		表	75	〃	6B	Ⅱ	108	〃	1	Ⅲ
10	Ⅰb		表	43	〃	1	Ⅲ	76	〃	6B	Ⅱ	109	〃	1	Ⅳ
11	〃		表	44	〃	1	Ⅲ	77	〃	6B	Ⅲ	110	〃	1	Ⅲ
12	〃		表	45	〃	1	Ⅱ	78	〃	6B	Ⅲ	111	〃	1	Ⅳ
13	〃		表	46	〃	6A	Ⅲ	79	Ⅱd	6B	表	112	〃	4	Ⅱ
14	〃		表	47	〃	6A	Ⅲ	80	〃	1	Ⅳ	113	〃	8	Ⅱ
15	〃	6B	Ⅲ	48	〃	6A	Ⅱ	81	〃	1	Ⅲ	114	〃	8	Ⅱ
16	〃	6B	Ⅲ下	49	〃	6A	Ⅲ	82	〃	1	Ⅲ	115	〃	8	Ⅱb
17	〃	6B	Ⅲ	50	〃	6A	Ⅲ	83	〃	1	Ⅳ	116	〃	8	表
18	〃	6B	Ⅲ	51	〃	6A	Ⅲ	84	〃	4	Ⅶ	117	〃	8	Ⅱ
19	〃	8	Ⅱ	52	〃	6A	Ⅲ	85	〃	6A	Ⅲ	118	〃	8	Ⅲ
20	〃	8	Ⅱ	53	〃	6A	Ⅲ	86	〃	6A	Ⅲ下	119	〃	8	Ⅰ下
21	〃	8	Ⅲ	54	〃	6A	Ⅲ	87	〃	6B	Ⅲ	120	〃	8	Ⅲ
22	Ⅱa		表	55	〃	6A	Ⅲ下	88	〃	6B	表	121	〃	8	Ⅱ
23	〃		表	56	〃	6A	Ⅲ	89	〃	6B	Ⅱ	122	〃	8	Ⅱ
24	〃		表	57	〃	6A	Ⅲ	90	〃	6B	Ⅱ	123	〃	8	Ⅲ
25	〃	1	Ⅳ	58	〃	6A	Ⅲ	91	〃	6B	Ⅱ	124	〃	8	Ⅱ
26	〃	1	Ⅲ	59	〃	6A	Ⅱ	92	〃	6B	Ⅲ	125	〃	8	Ⅱ
27	〃	6A	Ⅱ	60	〃	6B	Ⅲ	93	〃	6B	Ⅱ	126	〃	8	Ⅱb
28	〃	6A	Ⅰc	61	〃	6B	Ⅱ	94	〃	6B	表	127	Ⅲd	1	表
29	〃	6A	Ⅱ	62	〃	6B	Ⅲ	95	〃	8	Ⅱ	128	〃	1	Ⅳ
30	〃	6A	Ⅱ	63	〃	6B	Ⅲ	96	〃	8	Ⅲ	129	〃	1	Ⅳ
31	〃	6A	Ⅲ	64	〃	6B	Ⅲ	97	〃	8	Ⅲ	130	〃	4	Ⅶ
32	〃	6A	Ⅲ	65	〃	6B	Ⅱ	98	Ⅲa	8	Ⅱ	131	〃	8	Ⅱ
33	〃	6A	Ⅲ	66	〃	6B	Ⅱ	99	〃	8	Ⅱ	132	〃	8	Ⅱ

第３表　出土土器トレンチ及層位対照表(2)

No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層
133	Ⅲd	8	Ⅲ	166	Ⅲf	8	Ⅱ	199	Ⅳ	8	Ⅱ	232	Ⅴ	4	Ⅶ
134	〃	8	Ⅲ	167	〃	8	Ⅱb	200	〃	8	Ⅱ	233	〃	6A	Ⅲ
135	〃	8	Ⅲ	168	〃	8	Ⅱb	201	〃	8	表	234	〃	6B	Ⅰ
136	〃	8	Ⅲ	169	〃	8	Ⅱ	202	〃	8	Ⅱb	235	〃	6A	Ⅱ
137	〃	8	Ⅱ	170	Ⅳ	8	表	203	〃	8	Ⅱ	236	〃	8	Ⅱ
138	Ⅲe	1	Ⅲ	171	〃	8	表	204	〃	8	Ⅱ	237	〃	8	Ⅱ
139	〃	1	Ⅲ	172	〃	1	Ⅳ	205	〃	8	Ⅱ	238	〃	8	Ⅱ
140	〃	1	Ⅲ	173	〃	1	Ⅲ	206	〃	8	Ⅱ	239	〃	8	Ⅱ
141	〃	1	Ⅲ	174	〃	1	Ⅳ	207	〃	8	Ⅱ	240	〃	8	Ⅱ
142	〃	1	Ⅱ	175	〃	1	Ⅳ-Ⅴ	208	Ⅴ	1	Ⅳ	241	〃	8	Ⅱ
143	〃	1	Ⅲ	176	〃	1	Ⅳ	209	〃	1	Ⅲ	242	〃	8	Ⅱ
144	〃	1	Ⅲ	177	〃	1	Ⅳ	210	〃	1	Ⅲ	243	〃	8	Ⅱ
145	〃	1	Ⅳ-Ⅴ	178	〃	1	Ⅲ	211	〃	1	Ⅲ	244	〃	8	Ⅲ
146	〃	1	Ⅲ	179	〃	1	Ⅳ	212	〃	1	Ⅲ	245	〃	8	Ⅱb
147	〃	1	Ⅲ	180	〃	8	表	213	〃	1	Ⅲ	246	〃	8	Ⅱ
148	〃	1	Ⅲ	181	〃	8	表	214	〃	1	Ⅲ	247	〃	8	Ⅱ
149	〃	1	Ⅲ	182	〃	4	Ⅶ	215	〃	1	Ⅳ	248	〃	8	Ⅱ
150	〃	1	Ⅲ	183	〃	6B	Ⅰ	216	〃	1	Ⅳ	249	〃	8	Ⅱ
151	〃	1	Ⅲ	184	〃	6B	Ⅱ	217	〃	1	Ⅳ	250	〃	8	Ⅱ
152	〃	8	Ⅱ	185	〃	6B	Ⅱ	218	〃	1	Ⅳ	251	〃	8	Ⅲ
153	〃	8	Ⅱ	186	〃	6B	Ⅲ	219	〃	1	Ⅳ	252	〃	1	表
154	〃	8	Ⅱ	187	〃	6B	Ⅱ	220	〃	1	Ⅳ	253	〃	8	Ⅲ
155	〃	8	Ⅱ	188	〃	6B	Ⅱ	221	〃	1	Ⅳ	254	〃	1	表
156	〃	8	Ⅱ	189	〃	8	Ⅱb	222	〃	1	Ⅳ	255	〃	8	Ⅲ
157	〃	8	Ⅱ	190	〃	8	Ⅱ	223	〃	1	Ⅲ	256	Ⅵ	8	Ⅱ
158	〃	1	表	191	〃	8	Ⅱ	224	〃	1	Ⅲ	257	〃	8	Ⅱ
159	〃	8	Ⅱ	192	〃	8	Ⅱ	225	〃	1	Ⅲ	258	〃	8	Ⅱ
160	〃	8	Ⅱb	193	〃	8	Ⅱ	226	〃	1	Ⅲ	259	〃		表
161	Ⅲf	4	Ⅲ	194	〃	8	Ⅱ	227	〃	1	Ⅱ	260	〃		表
162	〃	6B	Ⅲ	195	〃	8	Ⅱb	228	〃	8	表	261	〃		表
163	〃	8	Ⅱ	196	〃	8	Ⅱ	229	〃	8	表	262	〃		表
164	〃	8	Ⅱ	197	〃	8	Ⅱ	230	〃	4	表	263	〃		表
165	〃	8	Ⅱ	198	〃	8	Ⅱ	231	〃	4	表	264	〃		表

第４表　出土土器トレンチ及層位対照表(3)

No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層	No	類	トレンチ	層
265	Ⅵ		表	286	〃	6B	Ⅱ	307	底部	1	表	328	底部	1	Ⅳ
266	〃	8	Ⅲ	287	〃	8	Ⅱ	308	〃	8	Ⅲ	329	〃	6A	Ⅲ上
267	〃	6B	表	288	〃	8	Ⅲ	309	〃	8	表	330	〃	6B	Ⅲ
268	〃	6B	表	289	〃	6A	Ⅲ	310	〃		表	331	〃	8	Ⅱ
269	〃	6B	表	290	〃	6B	Ⅲ	311	〃	8	Ⅱ	332	〃	8	Ⅱ
270	〃	6A	Ⅰ	291	〃	6B	Ⅲ	312	〃	1	Ⅳ	333	〃	6A	Ⅲ下
271	〃	6A	Ⅱ	292	〃	6B	Ⅲ	313	〃	6B	Ⅱ	334	〃	8	Ⅱ
272	〃	6A	Ⅲ	293	〃	6B	表	314	〃	8	Ⅱ	335	〃	8	Ⅲ
273	〃	6B	Ⅱ	294	〃	6B	表	315	〃		表	336	〃	6A	Ⅲ上
274	〃	8	Ⅱb	295	〃	6B	表	316	〃	8	Ⅲ	337	〃	8	Ⅱ
275	〃	6A	Ⅰ	296	〃	6B	Ⅲ	317	〃	6B	Ⅲ	338	〃	6A	Ⅲ
276	〃	6A	Ⅰ	297	〃	6B	表	318	〃	6B	Ⅲ	339	〃	8	Ⅲ
277	〃	6A	Ⅰ	298	〃	4	Ⅳ	319	〃	1	表	340	〃	6A	Ⅲ下
278	〃	6B	表	299	〃	4	Ⅳ	320	〃	6A	Ⅲ	341	〃	8	Ⅲ
279	〃	6B	表	300	底部	8	Ⅱ	321	〃	6A	Ⅲ下	342	〃	8	Ⅲ
280	〃	8	Ⅱ	301	〃		表	322	〃	6B	Ⅲ	343	〃	8	Ⅱ
281	〃	8	Ⅲ	302	〃	8	Ⅱ	323	〃	8	Ⅱ	344	〃	6B	Ⅲ
282	〃	8	Ⅲ	303	〃	8	Ⅱ	324	〃		表	345	〃	8	Ⅱ
283	〃	8	Ⅲ	304	〃	1	Ⅳ	325	〃	8	Ⅱ	346	〃		表
284	〃	6B	Ⅲ	305	〃	1	Ⅳ	326	〃	8	Ⅱ	347	〃	8	Ⅱ
285	〃	6A	Ⅲ	306	〃	8	Ⅲ	327	〃	1	Ⅱ				

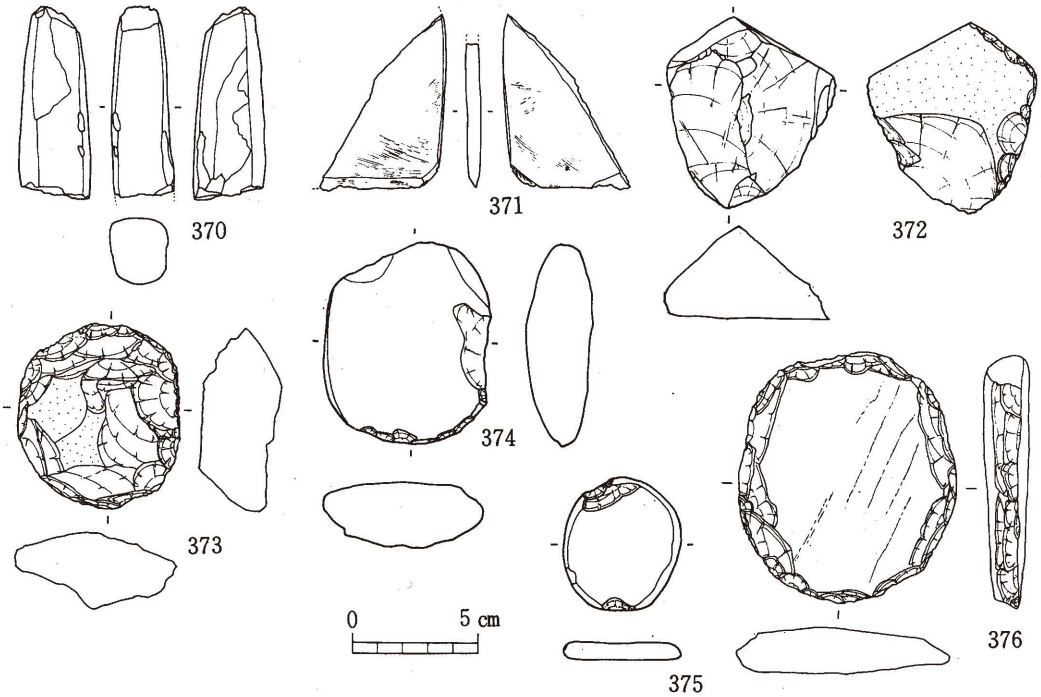


第15図　石器実測図（石斧）

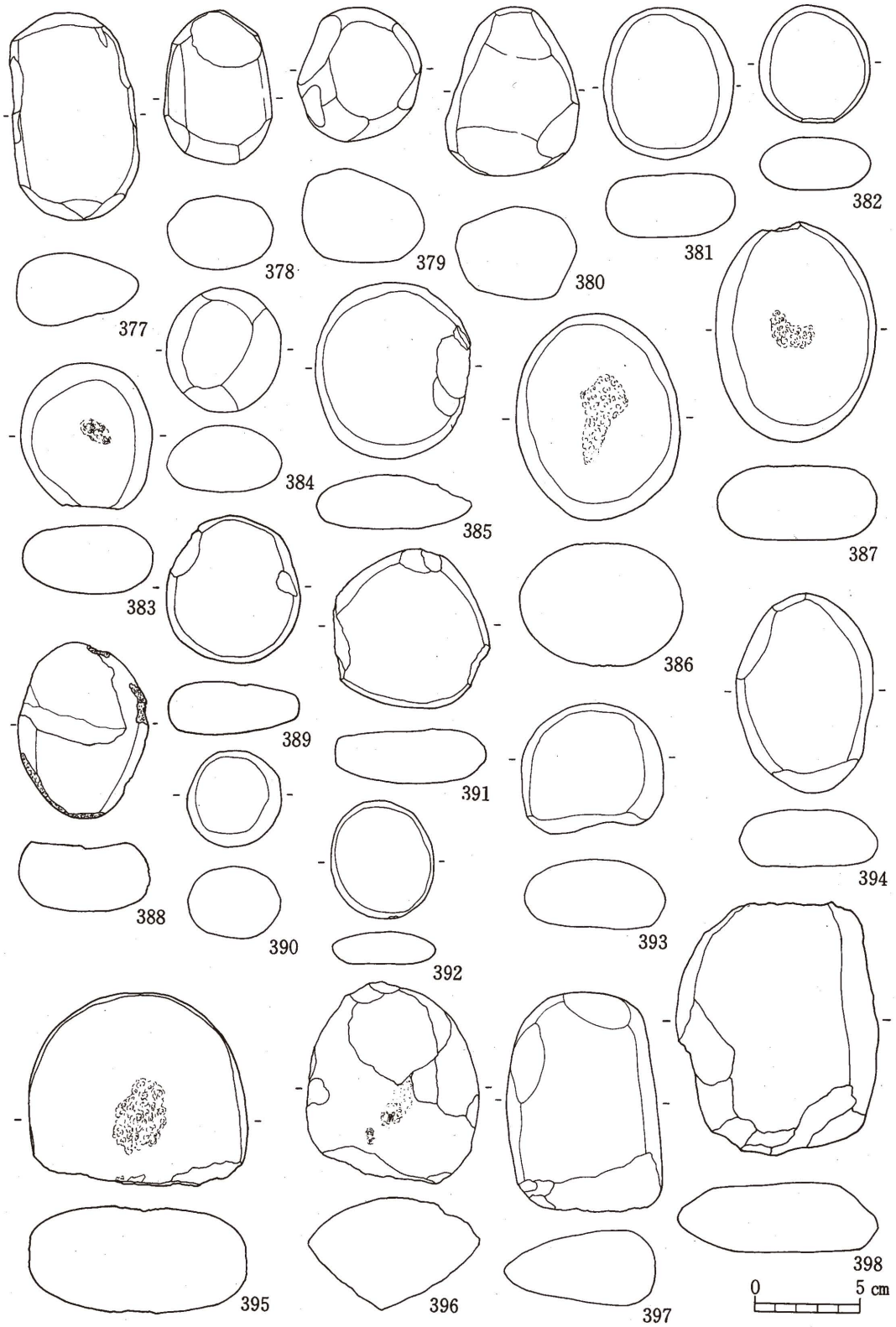
第３節　石　器　（第15～19図．図版15～17）

石器には磨製石斧・打製石器・磨石・敲石・凹石・石皿等が検出された。各石器の出土トレンチ・出土層位及び重量は第５表にまとめた。

351～370は磨製石斧である。351は入念な研磨を施し，片側縁辺を平担に，他方は丸く仕上げている。刃部は両面より磨かれる。基部を欠損する。352は表裏面とも平担に近く，側縁は丸く，片刃の刃部を有する。ていねいな研磨が施され，基部を欠損している。353は表裏とも破損の目だつ石斧の破片である。側縁の片側に平担な研磨面が残っている。354は刃部部分の破片である。平担な両側縁をもつ。破損した後に再加工の剝離が施されている。355は表裏面及び側縁を平担に研磨しているが，あらい剝離面が残っている。刃部は鋭利な部分だけではなく一部は平坦状になる。356は表裏とも平担で，また両側縁とも平担に研磨されたものであり，刃部は剝落して使用の痕跡が残る。357は剝離面が残存し，表裏面と刃部を局部的に研磨したものである。側縁も平担に磨いてある。358は円礫に近いものを荒割りし，礫の表皮面はそのままで刃部のみ研磨したものである。359は刃部及び基部を欠損している。360は風化が著しい。361は359と同様破損品である。362は表裏を局部的に研磨している。刃部を欠損する。363は全体入念な研磨が施されていたと思われるが，破損が著しい。364は基部の部分である。365は表面の風化が著しい。366は刃部近くを局部的に研磨したもので，基部は敲打による整形が施されている。破損による刃部の剝離は片面のみに集中しており，使用方法の一端が考えさせられる。367は刃部が欠損したものである。しかしながら，破損部分が磨耗しており，敲打器的なものとして再利用されたと思われる。368は約380ｇと最も重量があり，刃部はつぶれている。



第16図　石器実測図（石斧等）



第17図　石器実測図（磨石・敲石等）

また反対側の基部端も磨石的な，あるいは敲打器的な用途に使用されていると考えられる。369は刃部のみ入念に研磨したものであり，他は敲打によってあらく仕上げている。370は基部と刃部を欠損しているが，残存部は角柱状の形態であり，平担かつていねいに研磨した一面を有し，他はあらく仕上げてある。石材は安山岩を中心に砂岩・粘板岩・泥岩等を使用している。

磨製石斧は形態等によって5類に分けることができる。

1類　片刃の刃部をもつもの　352

2類　刃部に直行する両側縁を平担にしたもの　351・353・354・355・356・357

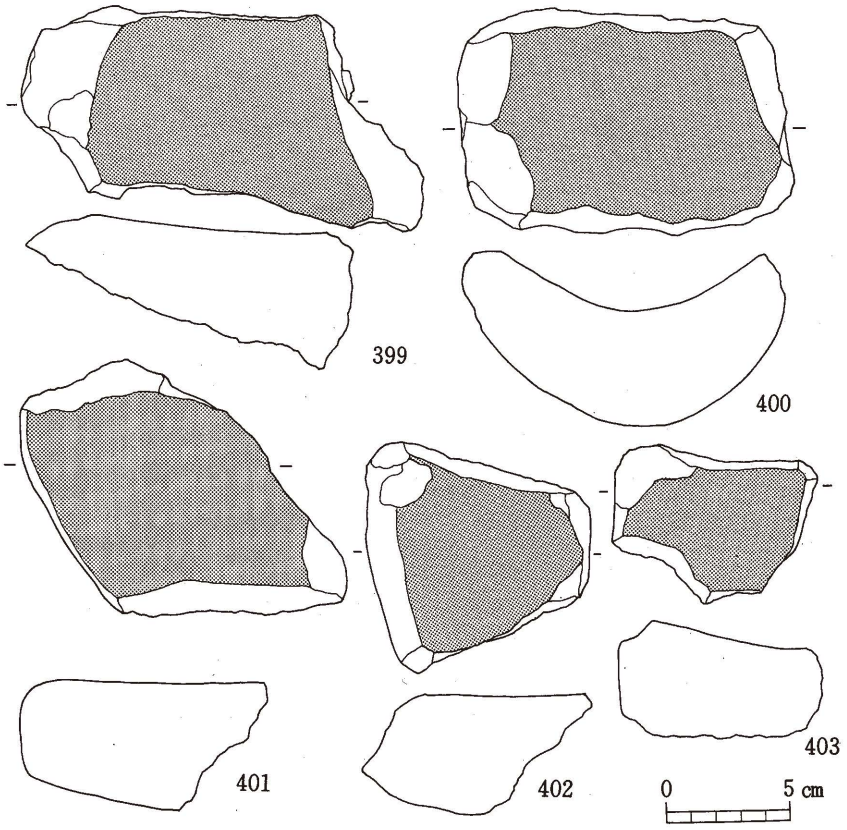
3類　中心部の断面が卵状で，重量の重いもの　364・365・366・367・368・369

4類　角柱状のもの　370

5類　その他のもの　358・359・360・361・362・363

調査面積の割に磨製石斧の多さには目をみはるものがある。

371は扁平な粘板岩を利用したもので，直線状の刃部をもつ。側縁も磨いて整形している。372は頁岩を使用した石器である。373は周囲が刃部となっている。チャート製である。374は砂岩製で，簡単に刃部のみつくっている。375は扁平な粘板岩を利用したもので石錘の可能性がある。376は円板形石器である。左右と下部の縁辺を刃部としている。

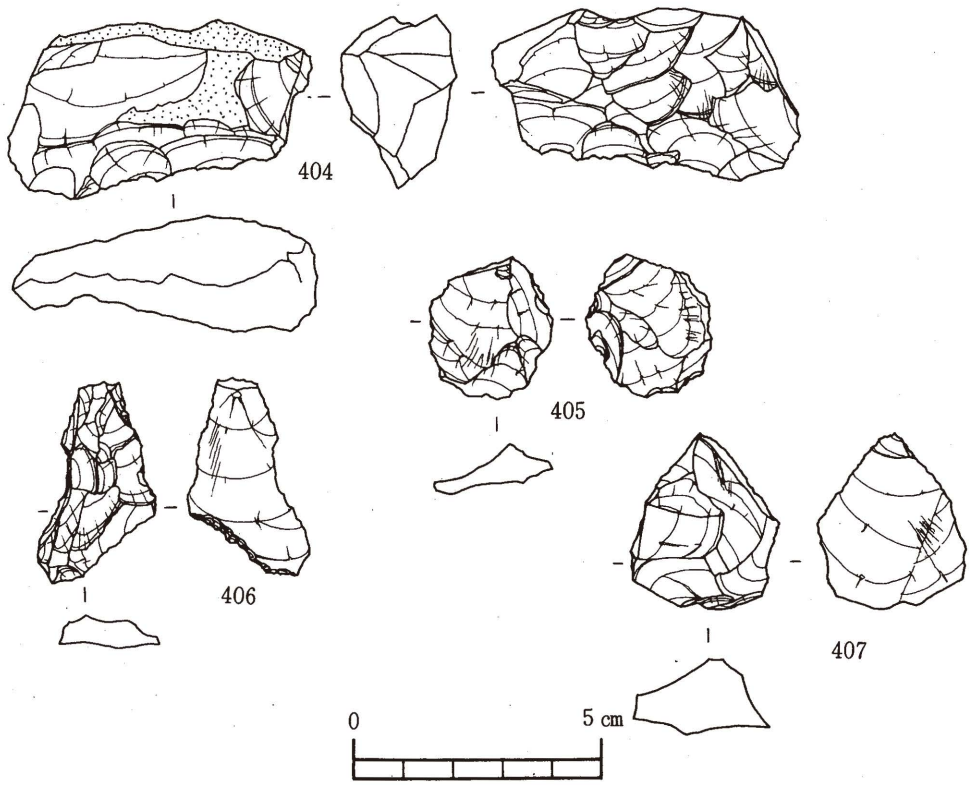


第18図　石皿実測図

第17図377～395は磨石及び敲石である。377～380は円礫の長端に両方とも，また側縁部にも面状の磨面が残っているものである。386・387・395は凹石としても利用されており，中央部に敲打痕が残っている。393・394はサンゴの扁平に近い円礫を利用したものである。磨石は一部敲石的な用途にも利用されたと考えられ，敲打痕が残っているものもある。磨石と敲石の明確な区別はできない。388はチャート製で，他は砂岩の円礫を使用している。396・397・398は敲打器と考えられる礫器である。397・398は砂岩を利用している。399～403は石皿である。全て破損品であり，全体の形状は不明でる。

第19図の404～407は剝片の原材がチャートである。404は石核である。平坦な面を打面として，表裏両面から剝片を剝ぎ取っている。小形の剝片が得られたものと思われる。405は剝片であり，使用痕等は認められない。406は縦長の剝片を利用し，剝片端部に小剝離による刃部を施したもので，また片側縁辺にも刃部が認められる。スクレイパーと思われる。チャートのなかでも良質なものである。407は淡緑色のチャート剝片である。

チャートの剝片は総計12点確認されたが，石器として認められるものは406のみであった。他は全て剝ぎ取られた状態そのままであり，刃部形成の押圧剝離及び整形のための剝離は言うに及ばず，使用痕も認められなかった。



第19図　チャート片実測図

磨製石斧

番 号	出土トレンチ	出土層位	重 量(g)
351	8	Ⅲ	(95.8)
352	8	Ⅱ	(117.35)
353	6 A	Ⅲ	(42.3)
354	8	Ⅱb	(19.65)
355	1	Ⅲ	169.9
356	6 A	Ⅲ下	88.25
357	4	表	73
358	1	Ⅲ	125.35
359	1	Ⅳ	(71.1)
360	8	Ⅲ	62.15
361	6 A	Ⅱ	(28.2)
362	6 B	表	(87.3)
363	1	Ⅲ	(79.3)
364	1	Ⅲ	(113.9)
365	8	Ⅱ	150.25
366	6 A	表	208.5
367	1	Ⅲ	(196.9)
368	6 B	表	378.9
369	6 A	表	325.8
370	8	Ⅱ	(89.25)

打製石器

371	8	Ⅱb	(17.4)
372	5	Ⅳ	165.75
373	8	Ⅱ	169
374	6 B	Ⅲ下	199.25
375	8	Ⅱ	30
376	5	Ⅴ	222.5

磨石，敲石，敲打器等

377	6 A	表	376.15
378	6 A	表	202.25
379	8	Ⅲ	241.05
380	8	Ⅲ	309.3

番 号	出土トレンチ	出土層位	重 量(g)
381	1	Ⅲ	219
382	1	Ⅲ	111.75
383	1	Ⅲ	335.8
384	1	Ⅳ	143.25
385	5	Ⅳ	229.65
386	5	Ⅱ	622.7
387	6 A	表	444.8
388	8	Ⅱ	213.15
389	1	Ⅳ	150.3
390	8	Ⅲ下	87
391	1	Ⅱ	198.8
392	8	Ⅱ	63.75
393	表採		130.15
394	8	Ⅱ	155.65
395	5	Ⅳ	790
396	8	Ⅱ	453.2
397	8	Ⅱ	379.5
398	表採		561.65

石 皿

399	6 B	Ⅲ下	(698.8)
400	8	Ⅲ	(817.8)
401	5	Ⅳ	(775)
402	4	Ⅱ	(405.35)
403	1	Ⅱ	(245.3)

チャート製品

404	表採		42
405	6 A	表	4
406	表採		5.7
507	6 B	Ⅲ下	14

第 5 表　　石器計測表

第４節　貝製刃器　　（第20図・図版18）

貝に刃部を施したものには，貝刃・螺貝製貝斧・スイジガイ製利器が認められた。

408～416は二枚貝の腹縁に刃部を付けた貝刃である。408はサメザラガイを，他は南島特有のシレナシジミを利用している。刃部は裏面よりの小剝離によって形成される。小型の貝は刃部が後背縁にまで及ぶ。409・410・411・415・416は刃部の一部が破損している。416は外面も剝落している。

417～422はヤコウガイの蓋に付刃した螺蓋製貝斧である。蓋の厚い部分を残し，刃部は縁辺の半円以上に施されている。使用頻度は多かったと思われ，残存刃部の形態は後退して、ほとんど原形から遠くなり四角に近い形状を呈している。417のみ刃部の剝離が平担面に平行に近く施されており，面縄第１貝塚出土等のものに類似する。また，これは破損品であるが，刃部の位置より，刃部は半円以下に施されていたと思われる。

423・424はスイジガイ製利器である。両方ともスイジガイの管状突起の先端に研磨による刃部を施したものである。423は直線に近い刃部が両面から入念に作られ，研磨痕及び使用痕が明瞭に認められる。424は管状突起部分のみ折れている。先端部分は最小限の研磨により付刃している。

貝刃及び螺貝製貝斧は，ともにスクレイパー的な用途が考えられ，スイジガイ製利器はノミ状の用途が想定される。

第５節　貝製刺突具　　（第21図・図版18）

貝製刺突具には管状突起を利用したものと，前管が長い巻貝の螺軸を利用したものがある。

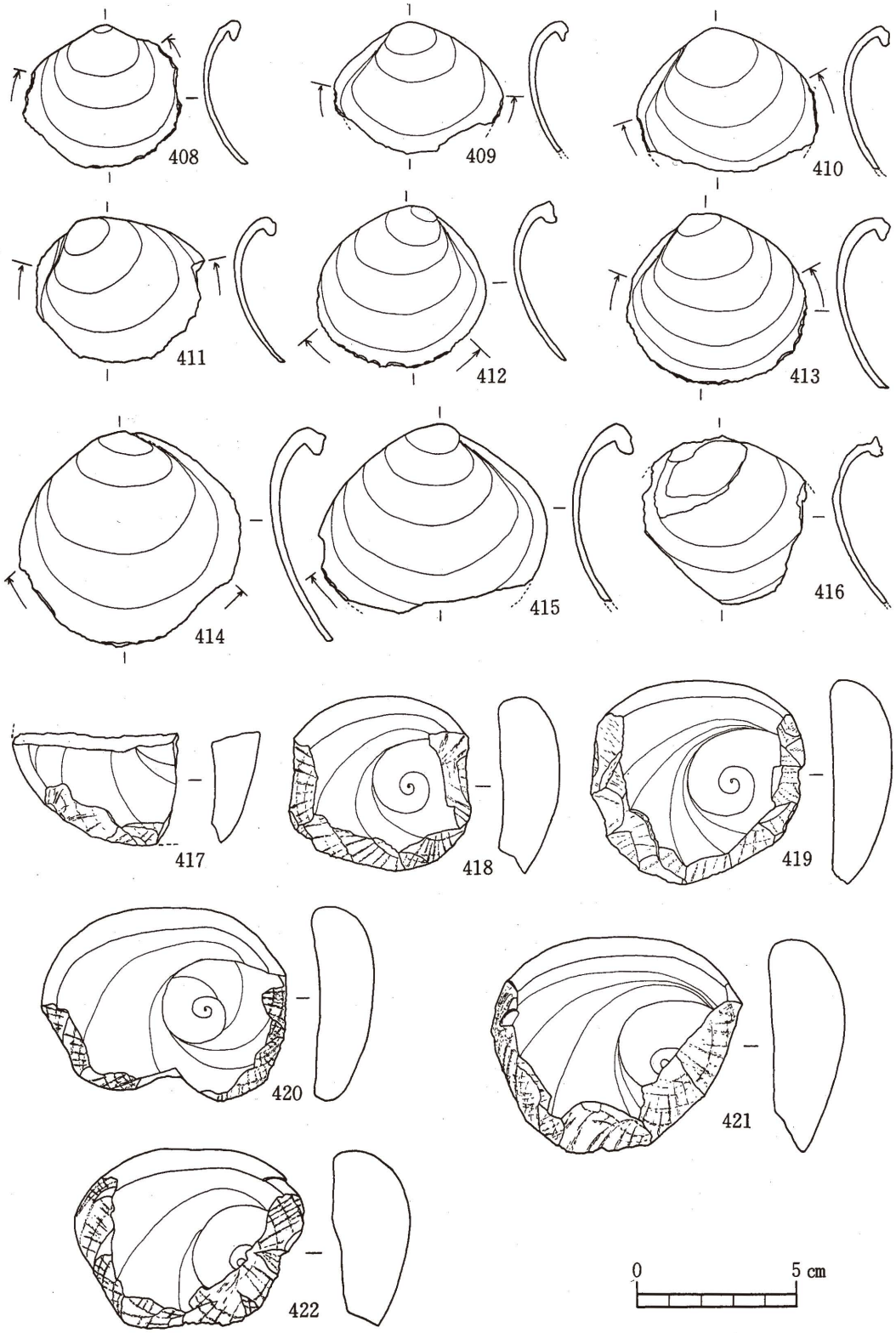
425はクモガイの管状突起を利用したものである。先端部に近い部位は研磨によって調整され，突端部は磨耗している。426はイトマキボラの螺軸を利用したものである。おそらく中味を取るためと考えられる孔が対角線上にある。殻口の部分は入念に除却され，軸の先端は磨耗している。427はチトセボラの螺軸を利用したものである。先端に近い部分は研磨により整形され，突端は磨耗している。

428～430はヤコウガイの殻を利用したもので貝鏃と思われる。３点とも基部近くに穿孔が行なわれている。428は先端を欠損する。また428・429は片面が剝落している。430は完形品である。両側縁は，両面から研磨が施され鋭利になり，基部は平担に磨いてある。穿孔は両面から行なわれている。

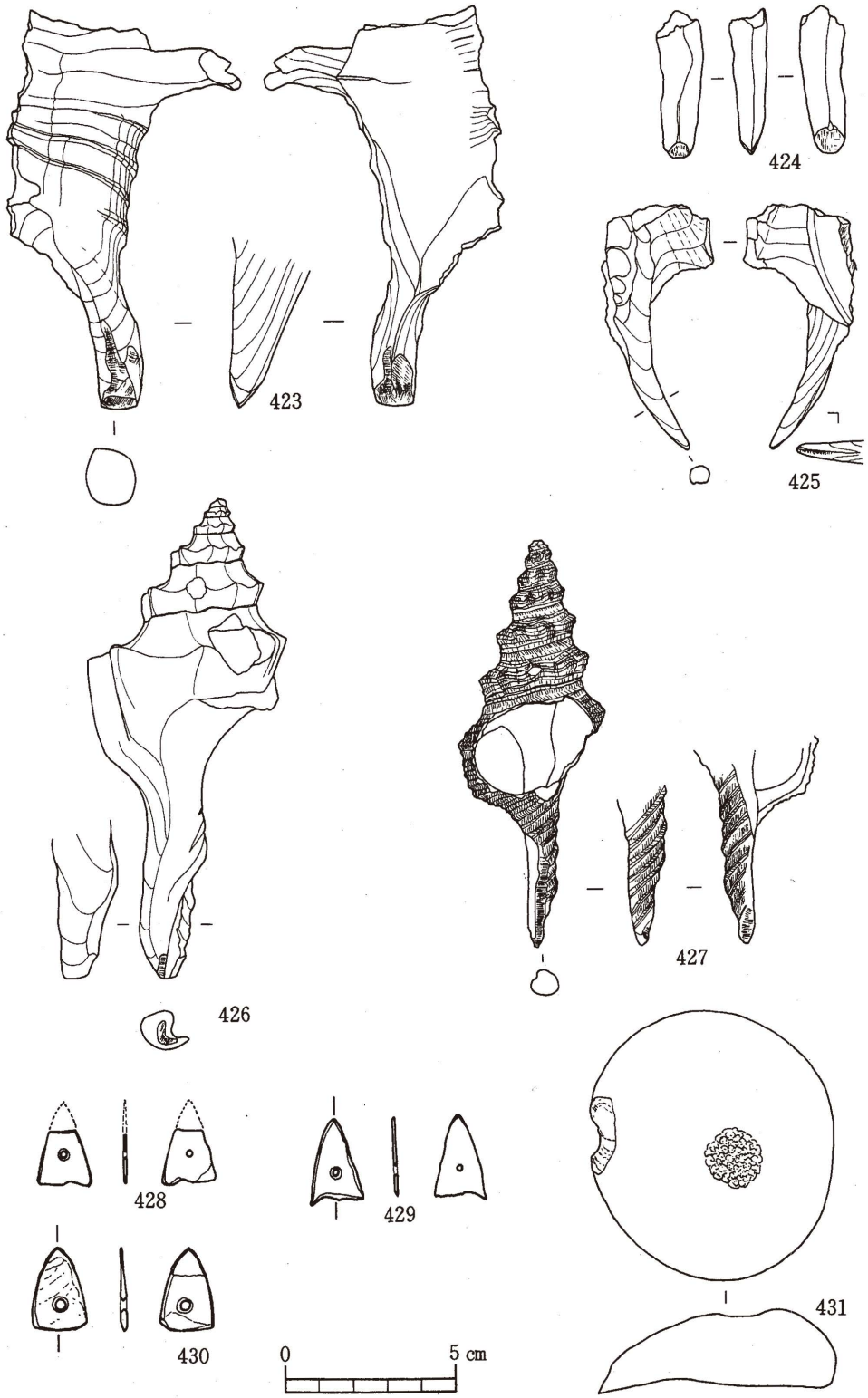
第６節　貝製道具　　（第22図・図版19）

ここでは刃器及び刺突具の部類に入らない生活道具を一括した。

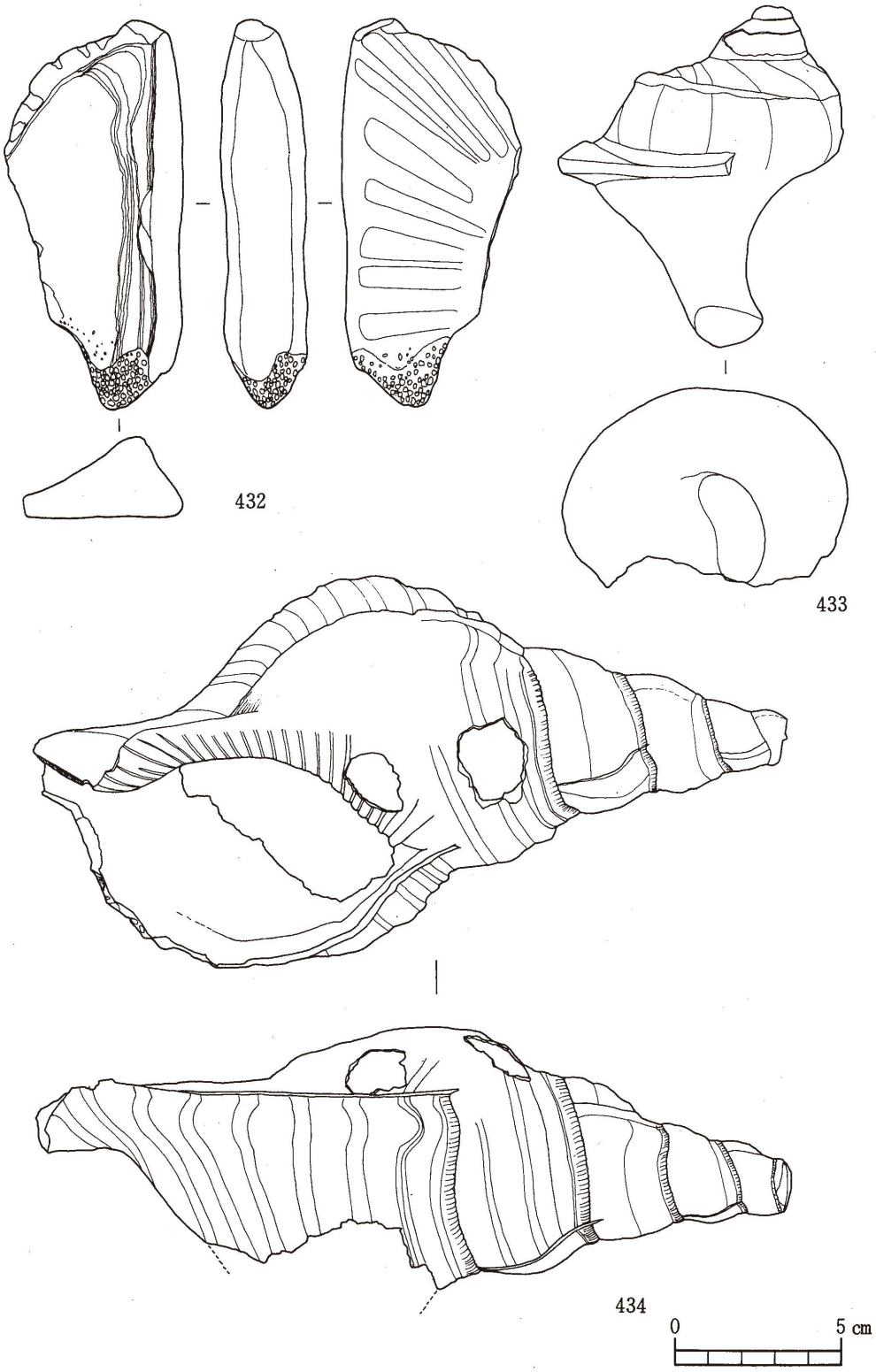
431はヤコウガイの蓋であり，丸味を帯びた表面の中央部に円形の敲打痕が残り，凹状になっている。裏面は平担ですわりも良く，石器のなかの凹石に相当するものと思われる。縁辺の剝離は自然剝落と思われる。432はゴホウラ貝の肥厚した外唇部を切り取ったもので，両突端を敲打あるいは磨石的に利用したものと思われる。磨痕が残る。433はヤコウガイの螺軸を利用したものであり，磨石的な用途が考えられる。丸味を帯びた軸の突端に磨痕が認められる。



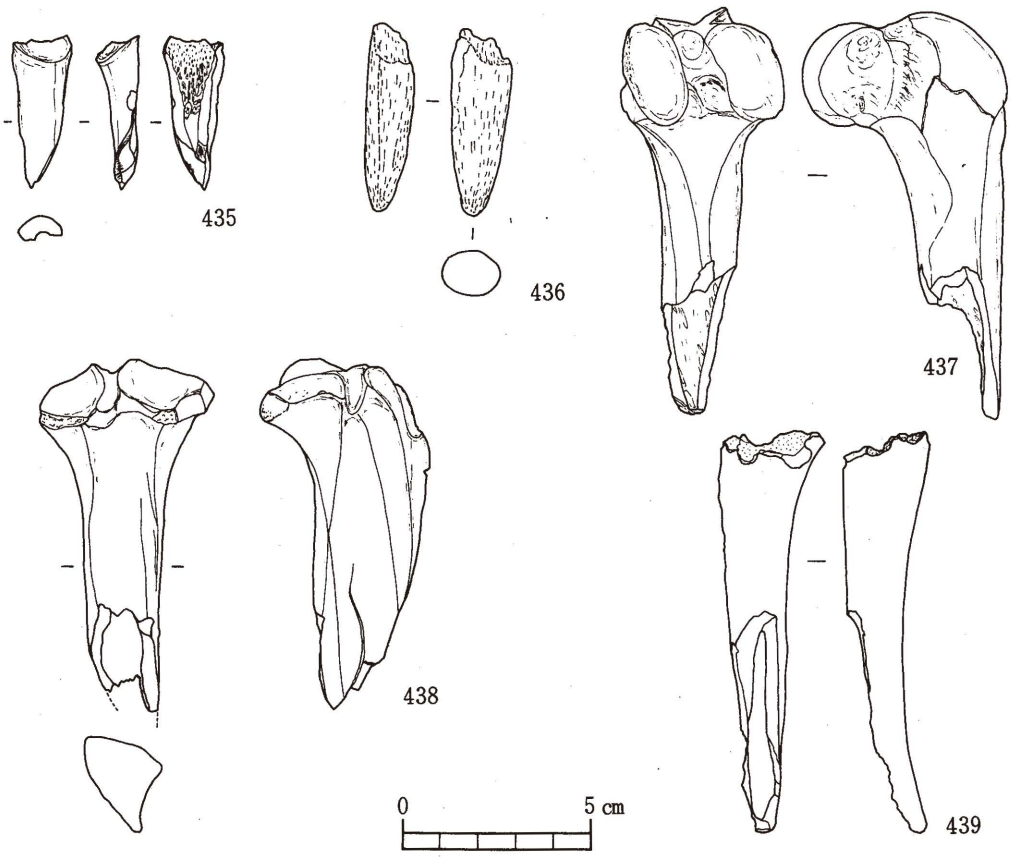
第20図　貝製刃器実測図



第21図　貝製刺突具・貝鏃他実測図



第22図　貝製道具実測図



第23図　骨製利器実測図

434はホラガイを利用した容器と考えられる。外唇部の縁辺及び前溝部の縁辺に入念な研磨を施し，平担状に調整している。また，水管の先端も垂直に整形されている。殻口の近くには，円形に近い粗末な２つ穿孔が行なわれている。孔の他孔に近い部位は，局部的に磨耗している。２孔は，釣り下げる手段である取手等の接着のため穿孔されたものと思われる。また図示していないが，図版21下はシヤコ貝製品と考えられる。長さ21cm・重量1027ｇを測る。腹縁は平担状になり，切断除却している可能性があるが，類似品の出土を待ちたい。

第７節　骨製利器　　(第23図・図版19)

骨製利器と思われるものは５点出土した。いずれも割れ面を利用している。

435は猪の橈骨を利用したもので，半割したものの先端部に研磨を施し，刃部としている。436はカメの骨と思われるものに，先端を穂先状に加工したと考えられるものである。437は猪の脛骨を利用したものである。割られた先端部が磨耗している。438も猪の脛骨を利用しており，突端を破損しているが，残存部の割れ面に研磨痕が残っている。439は猪の大腿骨を使用したもので，割れ面の突端が磨耗している。骨製利器は，割れ口がそのまま利器として使用することが可能であると思われるが，ここでは磨痕等が認められたものに限定した。

番号	器　種	材	出土トレンチ	出土層位	重　量
408	貝　刃	サメザラガイ	表　採		11　g
409	貝　刃	シレナシジミ	8T	Ⅱ～Ⅲ	11.25g
410	貝　刃	シレナシジミ	8T	Ⅱ	13.5 g
411	貝　刃	シレナシジミ	6BT	Ⅲ	16.75g
422	貝　刃	シレナシジミ	8T	Ⅱ～Ⅲ	16　g
413	貝　刃	シレナシジミ	8T	Ⅱ	20　g
414	貝　刃	シレナシジミ	6BT	Ⅲ下	31.5 g
415	貝　刃	シレナシジミ	8T	Ⅱ	29.3　g
426	貝　刃	シレナシジミ	6BT	Ⅱ	17.25 g
417	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ蓋	6AT	Ⅲ下	34.4 g
418	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ蓋	8T	Ⅲ	84.4 g
419	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ蓋	8T	Ⅴ	107.3 g
420	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ蓋	8T	Ⅱ	132.25g
421	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ蓋	8T	Ⅲ	174　g
422	螺蓋製貝斧	ヤコウガイ蓋	1T	Ⅲ	125.9 g
423	スイジガイ製利器	スイジガイ	8T	Ⅱ	83　g
424	スイジガイ製利器	スイジガイ	8T	Ⅱ	7.5 g
425	管状突起製刺突貝	クモガイ	8T	Ⅱ	21.6 g
426	螺軸製刺突貝	イトマキボラ	8T	Ⅱ	120.6 g
427	螺軸製刺突貝	チトセボラ	8T	Ⅱb	35.6 g
428	貝　鏃	ヤコウガイ殻	6AT	表　層	0.4 g
429	貝　鏃	ヤコウガイ殻	表　採		0.6 g
430	貝　鏃	ヤコウガイ殻	8T	Ⅱb	1　g
431	貝製凹石	ヤコウガイ殻	6BT	Ⅲ下	160　g
432	貝製磨具	ゴホウラ	6AT	Ⅲ	164.3 g
433	貝製磨具	ヤコウガイ殻	表　採		198.65g
434	貝製容器	ホラガイ	8T	Ⅱ	264.25g
435	骨製利器	猪橈骨	6BT	Ⅲ	3.2 g
436	骨製利器	カメ骨	4T	表　層	6.4 g
437	骨製利器	猪脛骨	6BT	表　層	49.75g
438	骨製利器	猪脛骨	6BT	Ⅲ	42.85g
439	骨製利器	猪大腿骨	8T	Ⅱ下	22.9 g

第 6 表　貝・骨器 計測表

第8節　貝　匙　等　　（第24～25図，図版20・21）

440～481が貝匙としてまとめたものである。440～478はヤコウガイ製で真珠層のみ残したもの（440～460），外皮を残し，縁辺に丸味をもつもの（461～472），加工のあとが観察できないもの(473～478)とに分類でき，形態上では把手状加工のあるもの(440・441・444・461・463・473・477等）とないもの（445・446・他）とに分類できる。

441は440と同様の形を呈していたものと考えられる。把手状の加工を施してあり，「和服」を広げた形状に加工し，441では中央に「V」字形の抉りを施したものである。440は内外面に擦痕が観察される。色調は真珠色を呈する。

442～444はクツベラ状の形を呈しているものである。444で頭部では2段の抉りを入れており，先端部は442・443で“片刃状”となっている。結節部は一条を使用し，内外共に磨かれている。

445～449は把手状加工を施さないもので，445は楕円，446～449は五角形を呈するものである。445・448は結節を2条・他は1条利している。内外面及び縁辺部共磨いているが，447は両側に1ケ所ずつ抉りを入れたものと考えられる。色は真珠色を呈する。

450～453・445・456は頭部を手に持ちやすいように一部加工してあるもののようであるが，破損による結果か疑問の残るところである。先端部（下部）の形状は451・456で「V」状となっているが，他は破損のため不明であるが同様の形状を呈していたと考えられる。

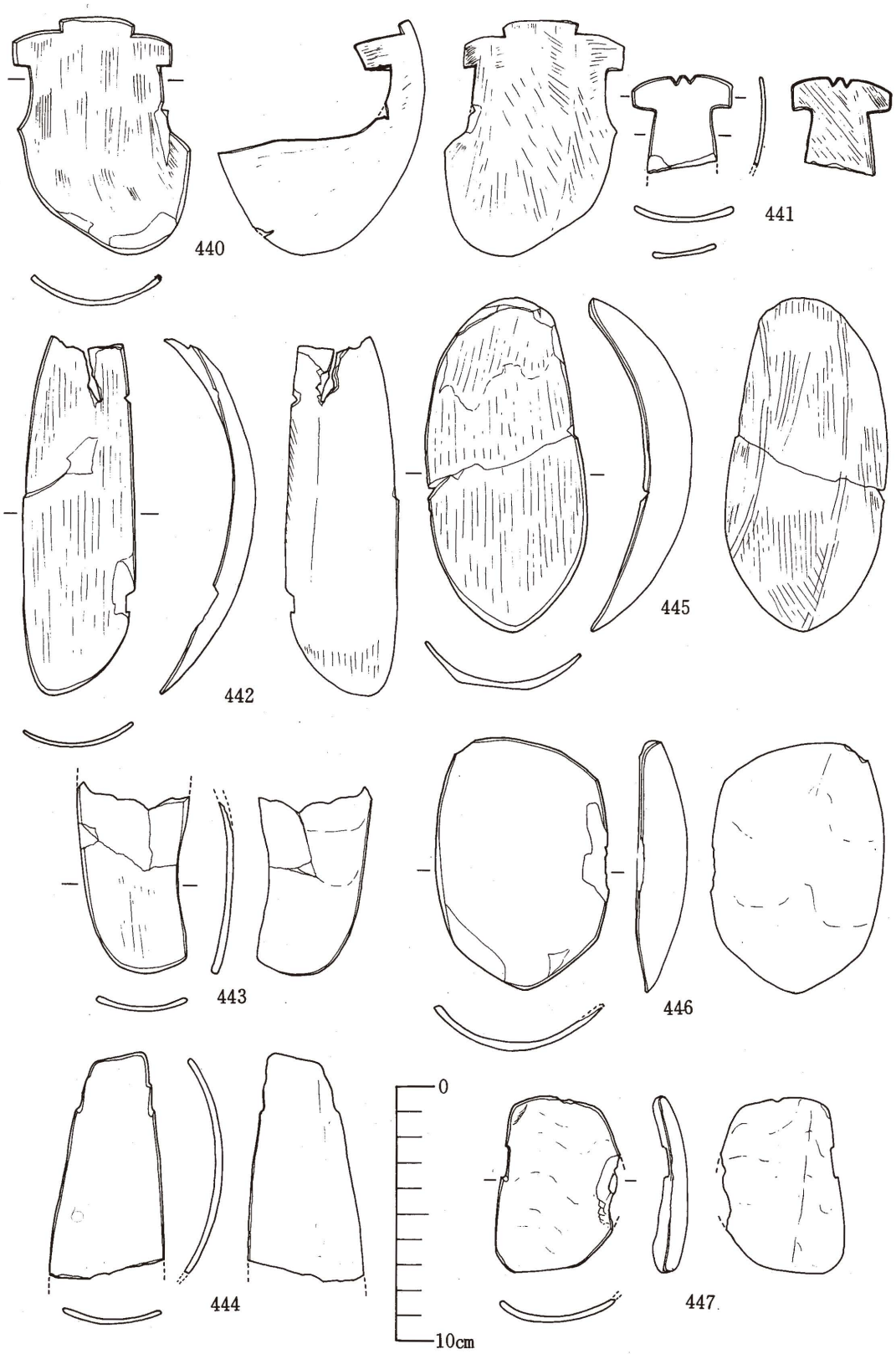
454は，小形のものであり，貝匙としての性格を付すことはやや無理があり，貝札様の性格を有するとも考えられる。小形のうえに非常に薄く仕上げられている。

457～460は，外皮を剝離したままのもので，縁辺部を磨いたものである。457・458は頭部に小形の把手状加工がみられるものの，これらが完成品であるか，未製品であるかは不明であるが，縁辺部の状況からするとより完成品に近いものと考えられる。

461～472は結節部の高い所のみ打ち欠いて縁辺部を磨いて使用したものである。これらも前述の真珠層のみ利用したものと同様把手状加工を施したものと，そうでないものとに分けられる。461は把手状加工を有するもので，高い結節部を打ち欠いて丸味をもたせている。462は結節部を2条そのまま残し，縁辺部のみ磨いたものである。463は一部外皮が剝離しているが462と同様のものである。465～470も同様の製作課程を示すものである。471は先端部の外皮側を一部研磨している。464・472は小形のもので貝匙というより貝札状のものであろうか。外皮を有し，縁辺部は丁寧に磨かれている。内面は真珠色を呈し，外面は淡褐色を呈す。

473～478は未製品と考えられるもので，縁辺部は打ち欠いたままの状態である。外皮を残したまま使用するのか，磨いて真珠層のみにして使用するかは不明である。473は結節部を一部打ち欠いたものである。477はヤコウガイの縫合の最先端部（後溝部）を打ち欠いたものである。内面は真珠色を呈し，外面は淡褐色を呈す。

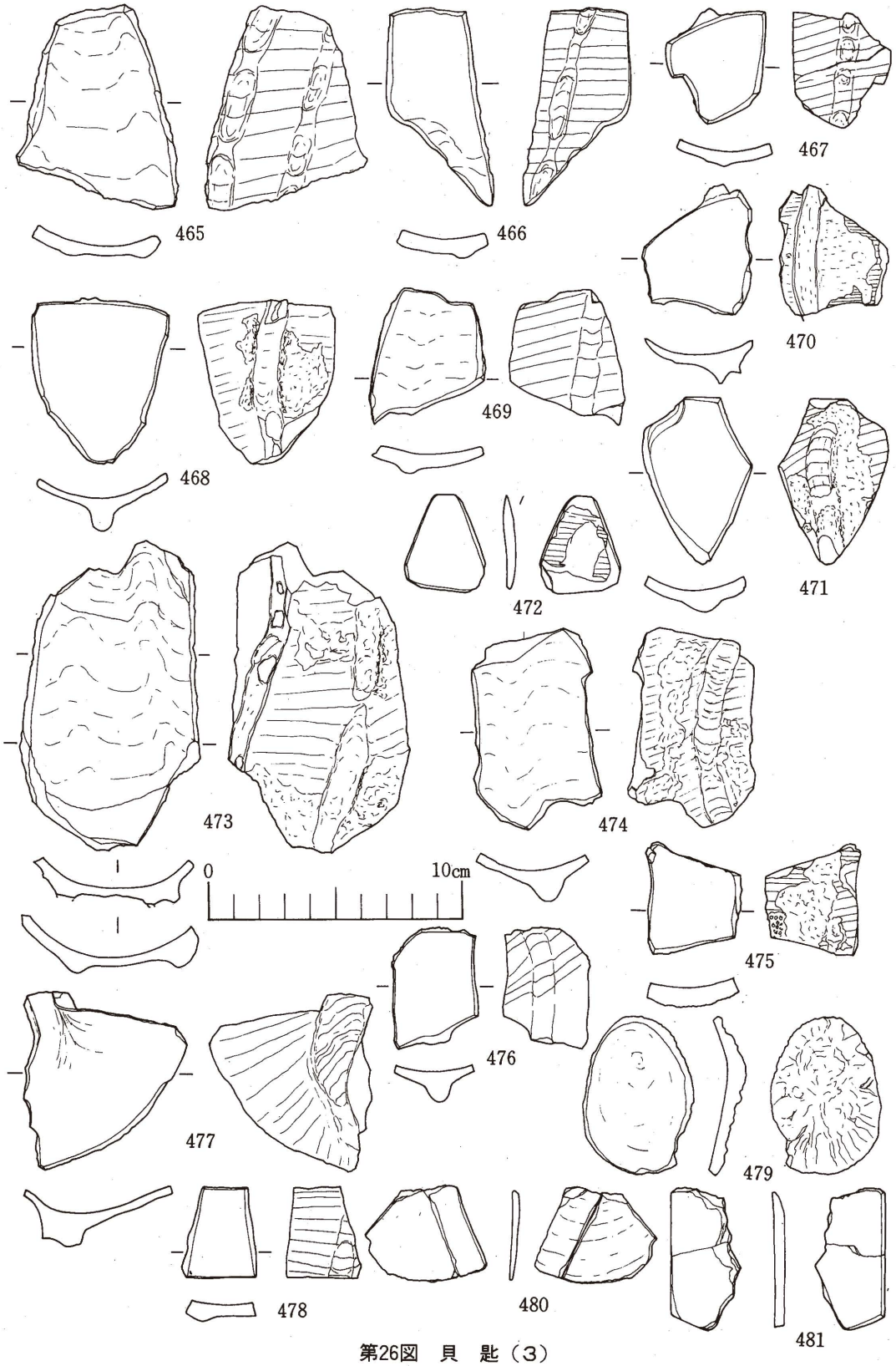
479～481は貝種不明のものである。479はカサ状のもので周辺を打ち欠き，一部磨いたものである。480・481は二枚貝と考えられるものであり，同種のものであろう。周辺部を磨ったものであるが性格は不明であるが，479皿状容器としての利用が考えられる。



第24図　貝　匙（1）

448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
0
10cm

第25図　貝　匙（2）


465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
0
10cm

第26図　貝　匙（3）

第9節　貝　輪　（第27図・図版21）

482～496が貝輪である。482～493がオオベッコウガサガイを，.494がオオッタノハガイを利用したもので，495・496はゴホウラガイを利用したと考えられるものである。

482・483・488・～493が小形の，484～487がやや大形のものであり，482が長径6.1cm，短径5.1cm，483が長径6.6cm，短径5.1cmを測るものである。大形のものは復元径で484が長径約9cm，短径7.3cmを測る。色調は大形のものが退色のためか黄茶褐色を呈するが，小形のものはあまり退色はみられず，紅褐色の班点状のものが散在し，べっ甲状を呈する。

これらはベッコウガサガイの殻頂部を打ち欠いて，外縁部を使用したもので内外を磨いて丸味をもつ。

494はオオツタノハガイを利用したもので，殻頂部を打ち欠いて放射肋を磨いて凹凸なくしたものであり，破片である。

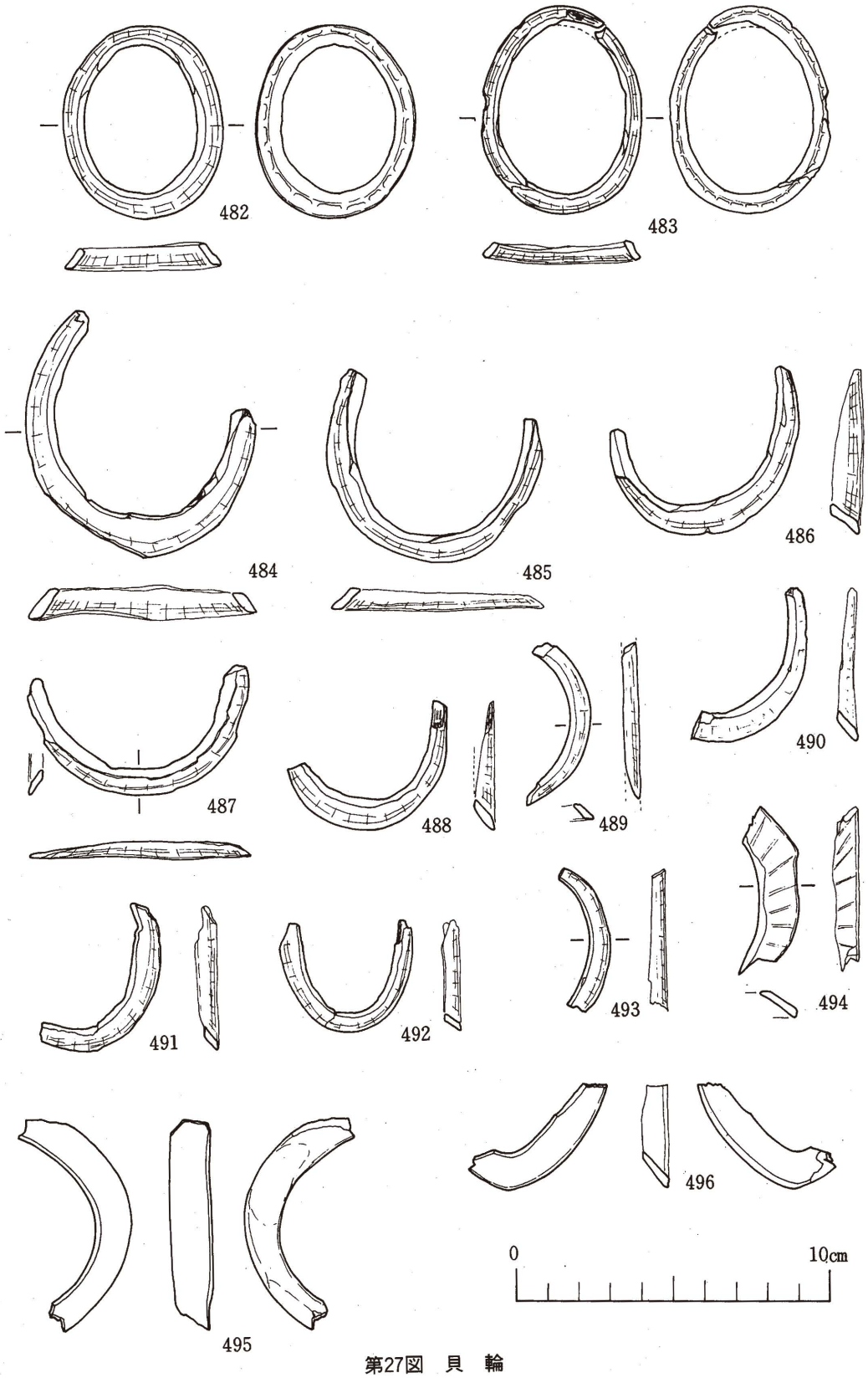
495・496はゴホウラ製と考えられるが確証がない。496は火を受けたためか灰褐色を呈し，495は白色を呈する。破片であるため分割して使用したのか否かは断定できない。

第10節　垂飾品　（第28～29図，図版22）

~~479~~497～519が垂飾品であるが，497～512が貝製品，513が石製品，514・515が鹿角製品・516・517が猪牙製品，518・519は不明である。

497はヤコウガイ製のもので略方形を呈していたと考えられる。縦6.9cm，横5.1cmを測るもので，径2mmの穴を外皮の方から穿孔したもので，2個あったものと考えられる。498はクロチョウガイ製のもので，5.9cm×4.9cmの略長方形を呈する。穿孔は内外から行なっており，径3mm，4mmの穴を2個縦に配する。内面は真珠色，外面は暗紫色を呈しており，縁辺部は研磨されている。499はヤコウガイ製の小形のもので，3.3cm×1.5cmを測る。穴は4個径1mm～4mmの小さいもので内外から穿しており，内3ケ所はひもずれ状のものが観察される。未穿孔様の凹みがあるが，穿孔途中のものかどうかは不明である。500・501はイモガイ製のもので殻頂部のみを研磨して穿孔したものである。径は500が2.4cm，501が2.2cmを測り，穴の径は500が2mm，501が2.5mmを測り，断面は「く」字状を呈する。502もイモガイの殻頂部を利用したものである。研磨されているが，穿孔は見られない。未製品なのか完成品かは不明である。火を受けたためか灰褐色を呈する。

503はマクラガイ製，504はフデガイ製のものである。殻頂部を打ち欠いて研磨したもので，研磨は，唇部と殻頂部にも及んでいる。504は破片であるが，火を受けて灰褐色を呈している。505はマクラガイ製のもので，殻頂部を打ち欠いて研磨しており，研磨は，唇部側辺全体に及び，穿孔を1ヶ所施している。穴は径は1.5mmを測る。506は小形のイモガイ製で殻頂に径2mmの穴を穿孔したものである。全体が研磨されている。507は内径8mmのヘビガイの一部を打ち取って断面を磨いて丸味をつけたものである。508はタルダカラガイの背部に1個穿孔したものであるが，穴は丸味をもたず，打ち欠いただけのものである。殻長6mmのやや大形のタカラガイで，色も退色がみられず光沢をもつ。


482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
0
10cm

第27図　貝　輪

509～512はオキニシの螺塔部を打ち欠いて，殻口部を利用したものである。前溝端と後溝端との長さは3.2～4.6cmを測る。打ち欠いたあとは丁寧に研磨を行っている。

513は縦3.8cm，横2.6cm，厚さ4mmの楕円形の扁平な石に径2mmの穿孔を両面から行っているものである。

514・515は鹿角製の垂飾品である。514はシカの角座骨・基又角をもち角坐から5cmの角幹部を利用し，二又状となっている。基又角は短く，枝角度は約65度である。角座骨と角幹部の切断面とを丁寧に研磨し，角坐の一部も研磨している。穿孔は角坐近くに径6mmの穴を両側から行っている。515は技角部を利用したと考えられるものである。穿孔は3ケ所あるが，破損後に2個行っており，破損部は丁寧に研磨されている。切断部は研磨されている。全長7.3cmを測り，孔は2.5・3.5mmを両側から穿孔している。

516・517は猪牙製の垂飾品である。516が下顎右側犬歯を利用したものである。基部に径2mmの穴が1個ある。又先端部に半円の孔をもっていたと考えられるものがある。基部の周囲は角の部位に抉りを施してある。517は上顎左側犬歯を利用したものある。基部に2個，先端部に1個穿孔している。

518・519は何を利用して作ったものか不明である。518は断面が五角形で「三日月」状を呈するもので長さを5.9cmを測る。側面に一部乳白色の自然面を残すが他は丁寧な研磨が施されている。両端に1個ずつ両側から穿孔しており，内1個は側面に近い所に穿孔している。

519は下部が破損しているもので，穿孔を施している頭部は四角形につくり出され，片面には3本の沈線が刻まれている。長さ10.6cm，穴の径3.5mmを測るものである。組み合せ式の大形鈎針の可能性も考えられるものである。

第11節　簪　（第29図，図版22）

520・521はイノシシの腓骨を利用し，他方をとがらし簪としたものである。520は長さ10.4cmを測るもので，基部は一部研磨を行っている。521は長さ11.4cmを測るものである。

第12節　耳栓　（第29図，図版22）

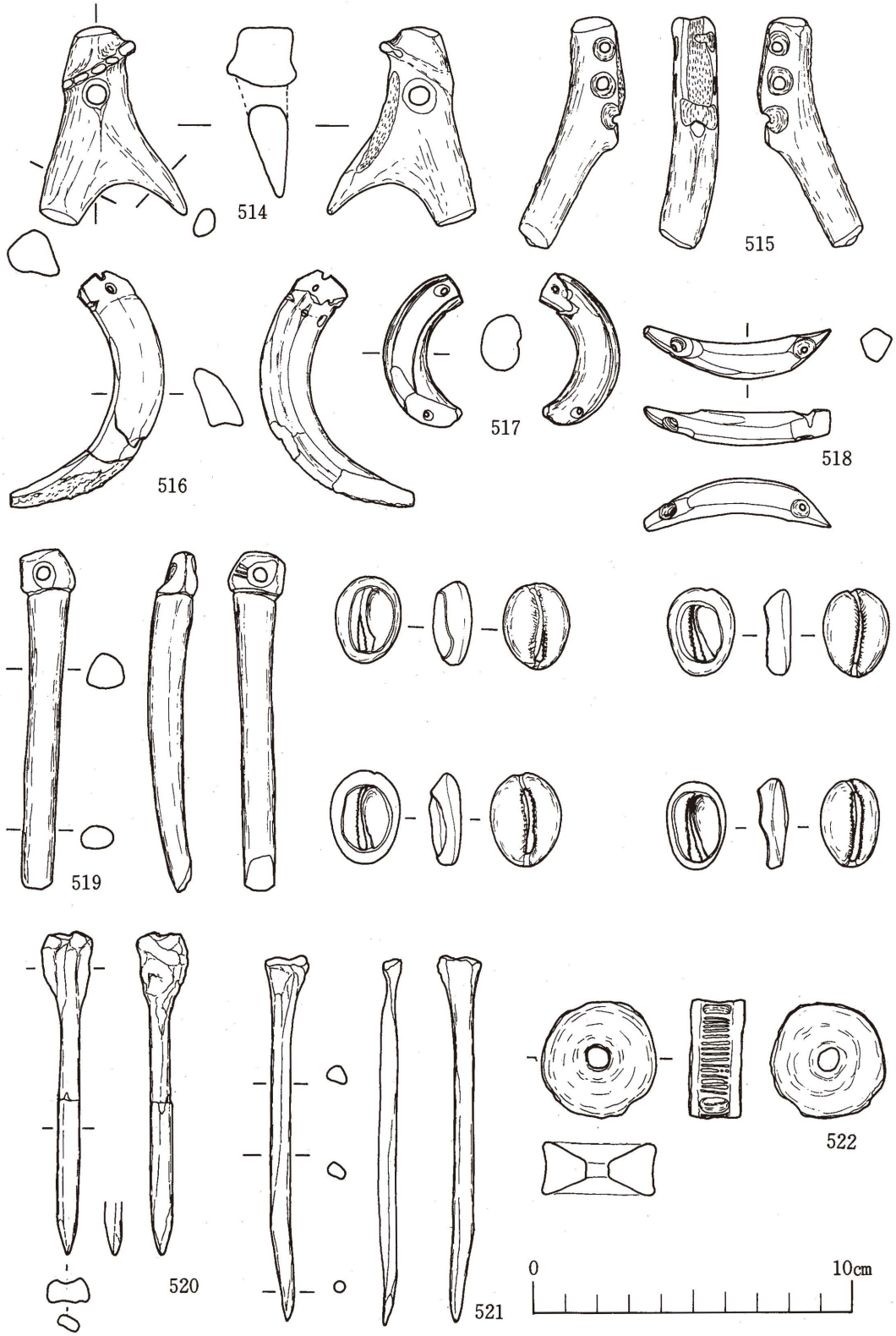
522はサメの椎骨を利用した耳栓である。径3.6cm，厚さ1.6cm，径6mmを測るもので，周囲の縁辺部は研磨されている。

第13節　貝錘　（第29図，図版22）

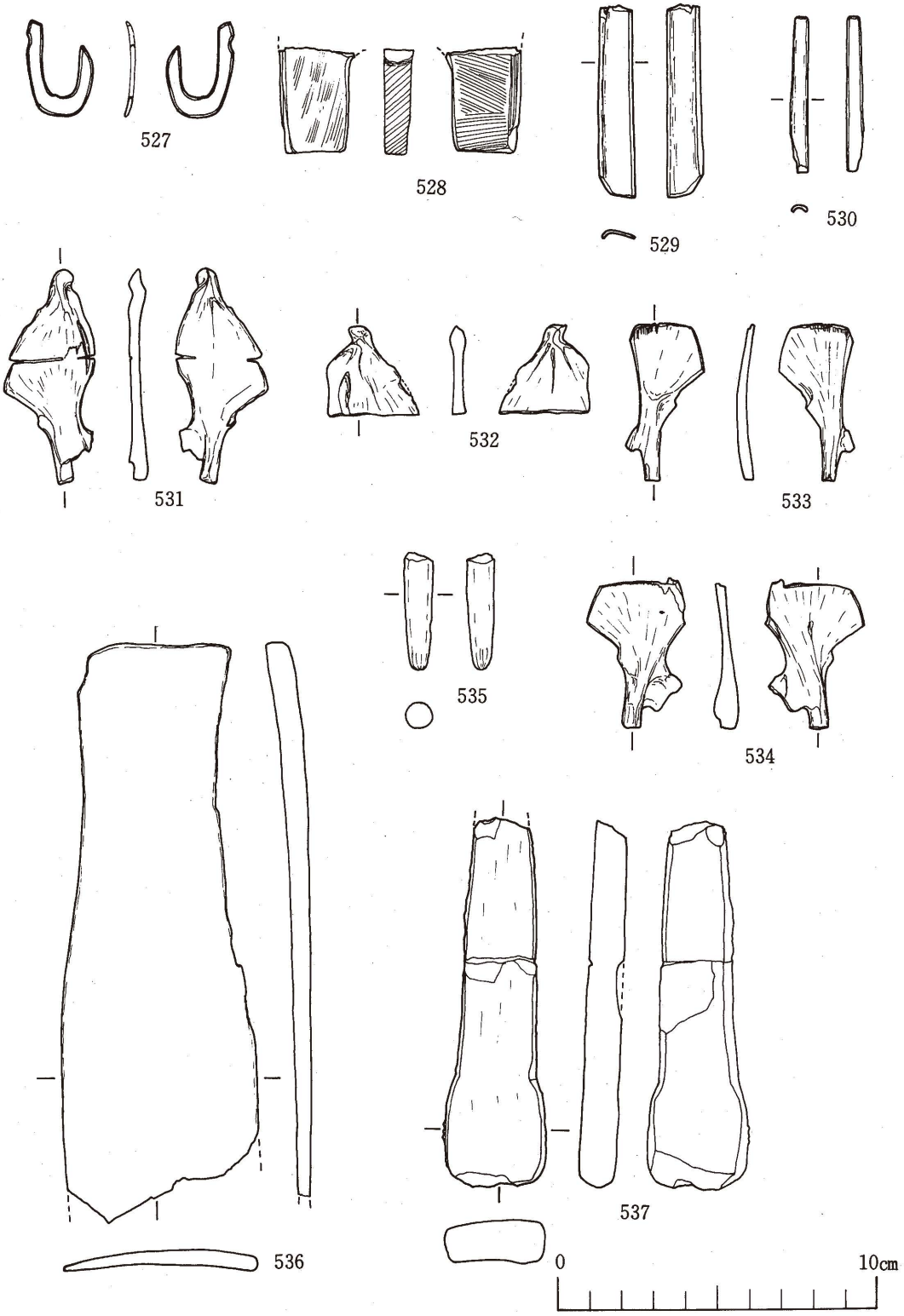
523～524はハナマルユキダカラガイの背部を打ち欠いて研磨しているもので，貝錘と考えられるものである。長さ2.6～2.9cmを測るものである。

497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
0
10cm

第28図　垂飾品（1）



第29図　垂飾品（2）



第30図　鈎針・その他

第14節　釣針・その他　　（第30図，図版23）

527はヤコウガイ製の釣針である。軸部長３㎝，最大幅2.1㎝，先端部長2.3㎝，厚さ1.5㎜を測る。軸頭に浅い抉りを施しているもので形態的には軸部が直線的で，Ｕ字形を呈し，逆棘はない。

528は，2.2㎝×3.2㎝，厚さ８ｍの全体が研磨されたもので，破片であるため用途等については不明であり，材質も不明である。

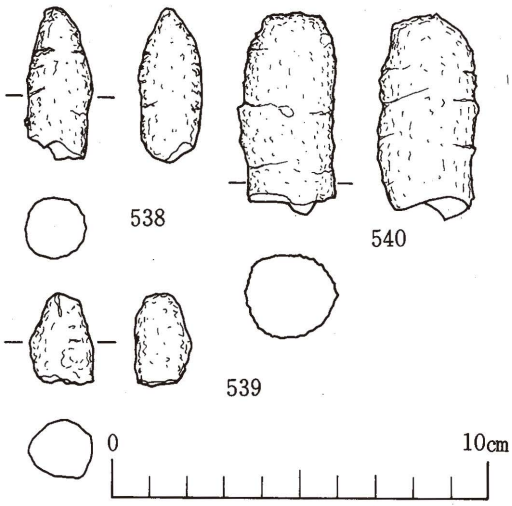
529・530は鳥骨製のもので，529が長骨，530が下腿骨を縦に割断して縁辺を丁寧に研磨している。長さは529が６㎝，530が4.9㎝を測る。用途はヘラ状としての利用が考えられるものの確証はない。

531～534は魚骨製のものである。531舌顎骨と考えられるものを切断しようとしているものであり，532～534が切断されたものである。用途は不明である。535は径９㎜，長さ3.7㎝の破片である。牙製品と考えられるが，用途は不明である。

536は板状のもので，クジラの骨を素材としたものであり先端部は欠損している。側縁及び表裏面が研磨されたもので，ヘラ状工具的な用途が考えられる。

537もクジラの骨を利用したもので，柄部が欠損している。先端部は四角形につくり出していて，表裏及び側辺を研磨しているものである。長さ11.5㎝，柄部幅約2.3㎝，先端幅3.2㎝，厚さ1.2㎝を測る。用途は不明であるが，ヘラ状工具としての性格が考えられる。

第15節　糞　石　　（第31図，図版23）



第31図　糞石実測図

538～540が糞石と考えられるもので，３個確認できた。539・540は頭部がやや鋭角をなし，540は丸味をもつものである。径は538が1.6㎝，539が1.7㎝，540が2.5㎝を測る。

鳥獣のものか，人間のものかは分析を行っていないため判断することはできない。

断面を観察すると，未消化の魚骨らしきものが確認できるが速断できない。

第７表　貝匙・貝輪・垂飾品等重量計測表

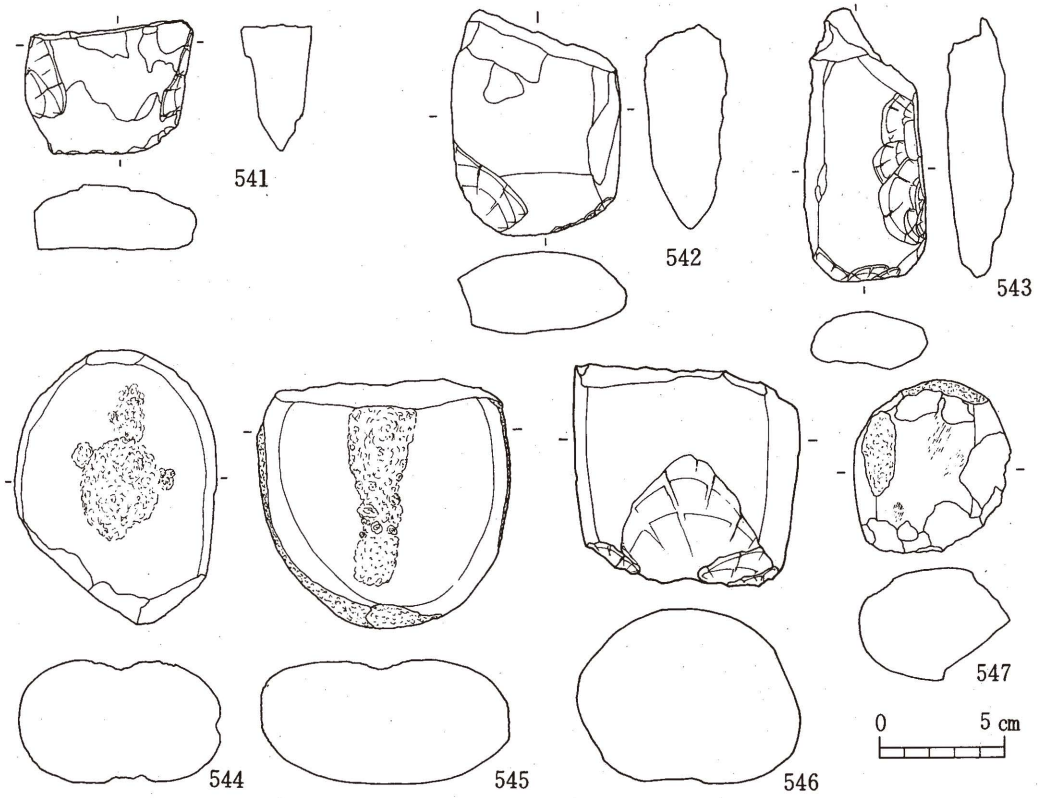
計測値は残存部で計測

No	遺物名	出土トレンチ層	重量(g)	No	遺物名	出土トレンチ層	重量(g)	No	遺物名	出土トレンチ層	重量(g)
440	貝匙(Ⅰ類)	8-Ⅱ	44.5	474	貝匙(Ⅲ類)	6A-Ⅲ	42.0	508	貝製垂飾品	6A-Ⅱ	18.3
441	〃	8-Ⅱ	5.0	475	〃	8-Ⅲ下	19.2	509	〃	6B-Ⅲ	14.3
442	〃	8-Ⅱ	26.0	476	〃	表採	19.0	510	〃	6B-Ⅲ	10.1
443	〃	6B-Ⅲ	13.0	477	〃	6B-Ⅲ	42.5	511	〃	6B-Ⅲ下	13.1
444	〃	8-Ⅲ	14.2	478	〃	8-Ⅱ	27.5	512	〃	8-Ⅱ	16.3
445	〃	6B-Ⅲ	50.0	479	貝匙(その他)	6B-Ⅱ	11.0	513	石製垂飾品	8-Ⅱ	5.5
446	〃	8-Ⅱ	41.0	480	〃	6A-Ⅲ	6.5	514	鹿角製垂飾品	6A-Ⅱ	22.2
447	〃	8-Ⅱ	15.5	481	〃	6A-Ⅱ	10.8	515	〃	6A-Ⅱ	19.0
448	〃	6B-Ⅲ下	13.0	482	貝輪	8-Ⅱ	8.8	516	猪牙製垂飾品	6A-Ⅲ	17.95
449	〃	8-Ⅱ	8.5	483	〃	8-Ⅱ	6.2	517	〃	6B-Ⅲ	9.6
450	〃	1-Ⅳ	2.5	484	〃	6A-Ⅱ	13.25	518	骨角製垂飾品	8-Ⅲ	5.3
451	〃	8-Ⅱ	10.75	585	〃	8-Ⅲ	6.5	519	〃	6B-Ⅲ	14.8
552	〃	6B-Ⅱ	22.0	486	〃	6B-Ⅲ	7.0	520	簪	8-Ⅱ	3.9
453	〃	8-Ⅱ	12.0	487	〃	1-Ⅳ	4.5	521	〃	8-Ⅱb	4.5
454	〃	6B-Ⅲ	1.8	488	〃	6B-Ⅲ下	3.8	522	耳栓	6A-Ⅱ	15.7
455	〃	8-Ⅱ	7.0	489	〃	6B-Ⅲ	2.5	523	貝錘	8-Ⅱ	3.8
456	〃	6B-Ⅲ	9.5	490	〃	6B-Ⅲ	3.0	524	〃	8-Ⅱ	4.5
457	貝匙(Ⅱ類)	6B-Ⅲ	8.0	491	〃	8-Ⅱ	3.0	525	〃	8-Ⅱ	4.8
458	〃	8-Ⅱ	18.6	492	〃	8-Ⅱ	2.7	526	〃	6B-Ⅲ下	2.2
459	〃	6A-Ⅲ	7.1	493	〃	8-Ⅱ	1.5	527	貝製釣針	8-Ⅱ	1.25
460	〃	8-Ⅱ	13.0	494	〃	6B-Ⅲ	4.8	528	その他の製品	4-Ⅱ	8.4
461	〃	6B-Ⅲ	62.0	495	〃	8-Ⅱ	12.3	529	鳥骨勢品	8-Ⅲ下	1.2
462	〃	6B-Ⅲ	37.0	496	〃		4.3	530	〃	6B-Ⅲ	0.4
463	〃	8-Ⅲ	17.7	497	貝製垂飾品	8-Ⅱ	15.5	531	魚骨製品	8-Ⅱb	3.0
464	〃	6B-Ⅲ	5.0	498	〃	8-Ⅲ	12.5	532	〃	1-Ⅳ	1.7
565	〃	8-Ⅰ下	46.4	499	〃	6B-Ⅲ下	1.5	533	〃	6B-Ⅱ	2.2
466	〃	6A-Ⅲ	29.2	500	〃	6A-Ⅱ	5.8	534	〃	6A-Ⅲ	3.2
467	〃	8-Ⅱ	13.7	501	〃	8-Ⅱ	1.5	535	その他の製品	6A-Ⅲ	
468	〃	8-Ⅱb	37.3	502	〃	8-Ⅱ	1.6	536	〃		
469	〃	8-Ⅱ	21.0	503	〃	8-Ⅱ	5.5	537	〃	8-Ⅱ	
470	〃	6B-Ⅲ	22.3	504	〃	8-Ⅱ	3.1	538	糞石	8-Ⅱ	9.0
471	〃	8-Ⅱb	26.1	505	〃	8-Ⅲ下	6.0	539	〃	8-Ⅰ下	26.5
472	〃	8-Ⅲ	6.75	506	〃	6B-Ⅲ下	2.5	540	〃	1-Ⅳ	3.8
473	貝匙(Ⅲ類)	8-Ⅱ	85.7	507	〃	6B-Ⅲ下	3.2				

第16節　岩陰上部平坦地採集の遺物　　（第32・33図，図版24）

調査中，岩陰上部に位置し，灌木等の自生する平坦地から石器等の遺物が多く採集された。第32図の541・542は磨製石斧である。粘板岩を利用したものであり，４類に分類されよう。543は打製石斧である。544及び545は凹石であり，両方とも砂岩製である。544は表裏両面とも中央部が凹み，円形の敲打痕が残っている。545は側縁に磨面があり，磨石として利用されている。546は砂岩製の敲打器である。基部を欠損しているが，重量のある円礫を利用したものと思われる。先端は使用により剝落している。547は敲石である。長軸の両端を使用しているが，片側は破損している。第33図の548はクガニイシと呼ばれる石器である。一部を欠損している。大型の重量のある円礫を使用し，敲打が溝状に二条施され，その中間が凸形になる。それは一つでなく，裏の部分にも同様のものが認められ，二つの突起部が作られている。また長軸の残存部である端部にも敲打痕が残っている。他の面は光沢があり，ていねいに磨かれた可能性も考えられる。549もクガニイシの破損品である。敲打が溝状に二条施され，その中間が突起状になっている。

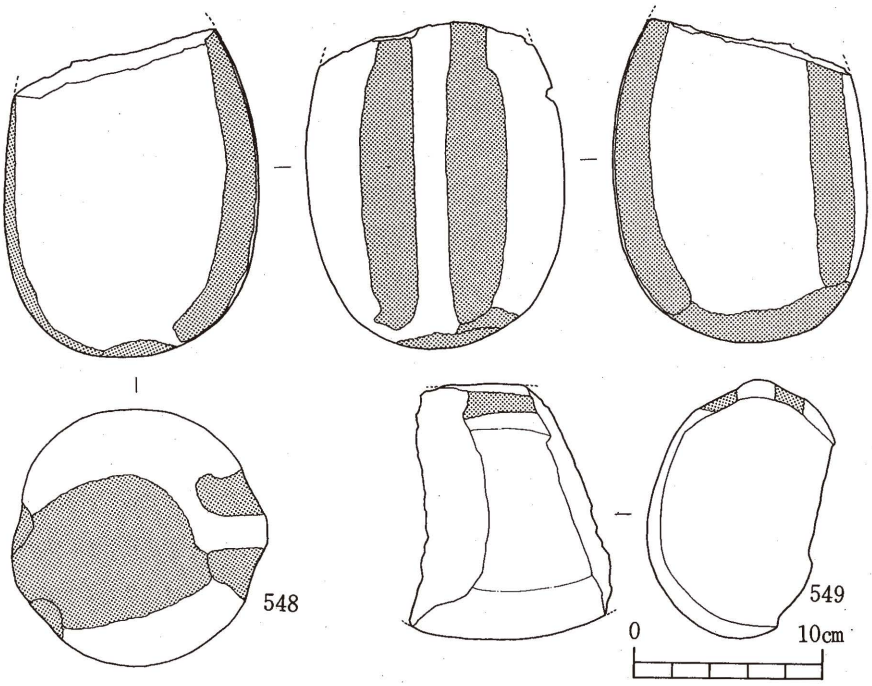
これらの遺物は表採品であり，どの時期に属するかは明確でない。



第32図　岩陰上部平坦地表採石器（１）

第８表　岩陰上部平坦地採集石器計測表

番　号	器　　種	重　　量	番　号	器　　種	重　　量	番　号	器　　種	重　　量
541	磨製石斧	147.1g	544	凹　　石	624g	547	敲　　石	273,75g
542	磨製石斧	288g	545	凹　　石	764.5g	548	クガニイシ	4,300g
543	打製石斧	163.8g	546	敲 打 器	847g	549	クガニイシ	1,470g



第33図　岩陰上部平坦地表採石器（２）

第５章　まとめ

今回の調査の結果，岩陰部及び前庭部において保存良好な遺物包含層を確認することができ，小面積のトレンチ調査にもかかわらず多種・多様な遺物・資料を得ることができた。

以下，出土した遺物等について若干の考察を行ってまとめとしたい。

１　土器について

Ⅰ類，面縄第４貝塚[1]出土の土器を標式とした面縄西洞式に文様構成が類似するものであるが，突帯の細さ，連点文の小さいことなどから，面縄西洞式系統のものとしてとらえられ，一時期下るものではなかろうか。Ⅱｃ類は琉球系の伊波・荻堂式系統のものである。Ⅳ類は喜念貝塚[2]出土の土器を標式とする喜念Ⅰ式に比定できる。Ⅴ類は河口貞徳氏のいう宇宿上層ａ式に比定できる。Ⅱ類・Ⅲ類は特定の形式名を付すことのできないものであるが，器形や文様のうえから観察すれば，Ⅱ類は文様構成においてより面縄西洞式の系統を色濃く残すものである。Ⅲ類は，頸部の文様はより喜念Ⅰ式に近いもので，器形にも甕形土器，壺形土器とがみられる。確認調査の中で包含層を有した第６―Ａトレンチ，第６―Ｂトレンチ，第８トレンチにおいて，各層における出土頻度傾向を調べてみると下表のようになる。

第６―Ａトレンチ

層＼類	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	Ⅲd	Ⅲe	Ⅲf	Ⅳ	Ⅴ
1	1		1	1										
2			3	2		2								1
3	1		5	14				1						1

第６―Ｂトレンチ

層＼類	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	Ⅲd	Ⅲe	Ⅲf	Ⅳ	Ⅴ
1													1	1
2	1		1	3	2	4							4	
3	4	4	4	5	3	2						1	1	

第８―トレンチ

層＼類	Ⅰa	Ⅰb	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅲa	Ⅲb	Ⅲc	Ⅲd	Ⅲe	Ⅲf	Ⅳ	Ⅴ
1													5	2
2		2		1		1	2		7	3	7	5	15	13
2ｂ									2		1	2	3	1
3		1				2		1	3	4				4

※個数は図化したものを用いた。

図化できなかったものも含めて総合的にとらえるならば，Ⅱ・Ⅲ類はⅣ・Ⅴ類よりも下位に出土する傾向のあることがつかめる。

これらのことや，文様構成等により前後関係をとらえようとすれば，Ⅰ→Ⅱ→Ⅲ→Ⅳといった推移をたどることが可能であろう。

Ⅲ類土器については，すでに白木原氏により，宇宿貝塚下層の終末近くから上層にかけての時期にあたるとの報告[3]もあり，今後の研究によりさらに解明されていくことが期待される。

２　石器・貝器・骨器について

各種の生活道具としての利器が検出された。石器には石斧・敲石・磨石・石皿等があり，そ

のなかで磨製石斧の多さは注目される。またチャートの剝片は確認されたが，量的に少なく，スクレイパーが１点認められたのみで，明確な石器等はなかった。しかしながら，貝器等は多く出土しており，道具のなかで小型石器の機能は貝器に求められる。

貝器には貝刃，螺蓋製貝斧，管状突起製ヘラ状利器・刺突貝，螺軸製刺突貝・貝鏃等が検出された。貝刃は現在徳之島には生息していないシレナシジミを主として利用している。これは遺跡近辺の当時の環境が，現在と異なり生息条件下にあった場合と，あるいは持ち込みの場合が考えられる。螺蓋製貝斧は残存形態が「コの字状」を呈し，使用によると思われる消耗度が著しい。数値では次のようになる。刃部を下にして，蓋の平担面にある渦巻文様の中心を通る線を，上下縁辺と平行に引いた場合，自然のものは上より下の方が長く，下は上の1.23値を測るが，今回出土したものは平均0.82を測る。このような消耗度及び残存形態は他では見られず犬田市貝塚の特徴であり，地域性と考えられる。貝刃はスクレイパー的な用途が考えられる。螺蓋製貝斧は残存形態より敲打による折断具の可能性も考えられる。

刺突具には管状突器を利用したものと，螺軸を利用したものがあり，いずれも突端が小円形であり，穿孔に利用されたと思われる使用痕等が認められる。

ホラガイ製の二孔を有する湯沸具と思われるものは，沖縄県古座間味貝塚[4]で類例が二例出土している。また穿孔が一つのものは長浜金久遺跡[5]で出土しており，民俗例でも知られているがこれとの関係は地域性によるのか，時期差によるのか，類例の増加を待ちたい。

犬田市貝塚では，九州本土で黒曜石等の石材で得られる機能が，貝器によってまかなわれていたと思われる。

3　貝匙等について

ヤコウガイの殻口近くの体層部を打ち欠いてつくられたものが中心である。これらは宇宿貝塚[6]・高又遺跡[7]・サウチ遺跡[8]・面縄第１[9]・第４貝塚[10]等鹿児島県のみでなく，沖縄県を含めた南西諸島全域において出土するものである。外面の表層や結節を全て磨りおとしたもの（ａ類），結節のみ打ち欠いたもの（ｂ類），表層及び結節を残したもの（ｃ類）に分けられるが，このうちｃ類は周縁部もなめらかでなく，打ち欠いただけのものも多く未製品とみることができよう。又把手状につくり出したものもみられ，細分までには至らなかったが，木下尚子氏は，「貝製容器小考[11]」の中で，匙状貝製容器（明瞭な把手をもつもの），ヒシャク状貝製容器（瓢形に似るもの），皿状貝製容器とに分類を行っている。

又，真珠層のみを残して他を磨りおとしたもの（ａ類）の中でも小形のものについては，実用品としてのみでなく，その光沢よりくる強い美意識のもとに作られたものとするならば，呪符的な性格を考えることも必要だと思われるが，今後の課題である。

4　装身具について

装身具には，貝輪・垂飾品・簪・耳栓等が出土した。

貝輪はそのほとんどがベッコウガサガイを素材としたものが中心であるが，表面採集によるものの中[12]には，オオツタノハ・ゴホウラ等によるものもある。素材としては弱いものであるが，その模様がベッ甲様を呈するもので色彩的なものを考えての製作も考えられる。

垂飾品では，素材が貝・鹿角・猪牙・石等と多種にわたっている。これらの中には単独で使用したと考えられるものや，イモガイ製の貝小玉状のもののように複数で利用されたのではないかと考えられるものもある。猪牙製のものは，両顎犬歯とも利用されており，下顎犬歯は一端にのみ加工，上顎犬歯は両端に加工がみられ，素材による加工法の差異かは不明である。又鹿角製の垂飾品が出土したことは特筆すべきものである。これまで徳之島における鹿の生息は確認されていず，又鹿をさす言葉（方言）はないとのこと[13]である。大塚氏[14]によれば本土系のシカに類似しているということであり，本土からの移入であれば交流のあったことを裏づける資料となるであろう。

簪は，猪骨を利用したもので，やや粗製のものであり，黒川洞穴出土[15]のものに類似しているが，先端が鋭利になっている点は異なる。

耳栓は各遺跡でもみられるが，やや大形のものである。

5　漁撈具について

タカラガイ製の背面を打ち欠いただけのものは多数みられたが，これは貝肉を取り出す時の損傷であるが，明らかに二次加工ないしは使用による磨耗と考えられるものがあった。これらは名瀬市根瀬部にシモアサミの沈子とした民俗例[16]もあり，貝錘としてとらえたが今後検討する必要があろう。鈎針はヤコウガイ製のもので単式の無逆棘の，頭軸に抉りを有する小形のものである。又垂飾品のうち519も組合せ式の大形鈎針ではないかとの教示[17]を受けた。自然遺物の中でも魚骨は約1割[18]を占め，網漁ないしは釣漁等漁撈活動の盛んであったことを裏づけるものである。

6　糞石について

糞石と考えられるものが3点出土している。未消化物と考えられるものを含んでいるが，野犬糞中にトゲネズミの骨が混入してた例[19]も確認されており，小動物の糞の可能性を含んでいるものの分析を行っていないため断定することはさけておきたい。

7　カーボン測定結果について

なお、採集したカーボンについて測定を依頼したところ下表の結果を得た。

第9表　カーボン測定結果

No	トレンチ	層	材　料	炭素使用量	測定時間	測定年代	備考
1	第6－Aトレンチ	3	木　炭	0.938g	1,000分	3,170±200B.P.	KSU-756
2	第8トレンチ	2	焼けた貝	0.920g	1,000分	1,610±170B.P.	KSU-755
3	第8トレンチ	3	木　炭	1.77g	1,100分	2,820±110B.P.	KSU-754

測定機関　京都産業大学理学部
測定者　山田　治・小橋川　明

このように，犬田布貝塚は多くの情報を与えてくれた。又今回調査した部分のみでなく，旧河川の上・下流にも小規模な貝層の存在や，岩陰上部の平担地にも遺物が散布しており，相当の広がりが予想され，今後の調査・研究によって，さらに徳之島南西地区の先史文化を究明していかねばならないであろう。又そのためにも保存措置が講じられる必要があろう。

(1) 河口貞徳・国分直一・野口義麿・原口正三
徳之島の先史遺跡調査報告　人類科学第11集　1958

(2) (1)に同じ

(3) 白木原和美　徳之島の先史学的所見　南日本文化第３号
鹿児島短期大学南日本文化研究所　1970

(4) 沖縄県教育委員会　沖縄県文化財調査報告書第43集「古座間味貝塚」　1982

(5) 鹿児島県教育委員会が昭和58年度に調査　1984年３月に概報刊行予定

(6) 笠利町教育委員会　「宇宿貝塚」　1979

(7) 同上　「笠利町高又遺跡」　1978

(8) 同上　「サウチ遺跡」　1978

(9) (1)及び伊仙町教育委員会　「面縄第１・第２貝塚」　1983・３

(10) (1)に同じ

(11) 木下尚子　「貝製容器小考」　南島考古No. 7　沖縄考古学会　1981・12

(12) 伊仙町歴史民俗資料館に採集品を展示している。

(13) 伊仙町文化財保護審議会委員　義　憲和氏教示

(14) 「犬田布貝塚出土の動物骨について」西中川駿　参照

(15) 河口貞徳　「黒川洞穴発掘報告」　鹿児島県考古学会紀要　第２号　1952　他

(16) 鹿児島県歴史資料センター黎明館　「鹿児島の歴史と文化・
部門別展示図録」　1983・10

(17) 国分直一氏教示

(18) 自然遺物総重量（35,295ｇ）のうち獣骨8,273.9ｇ，鳥骨10.9ｇ，は虫類240.4ｇ，魚類2,918.0ｇ，甲殻類176.5ｇ，貝類22,944.8ｇによる。

(19) 鹿児島県教育委員会　「特別天然記念物　アマミノクロウサギの実態調査
―天然記念物緊急調査報告書」　1977.3

犬田布貝塚出土の貝について

植之原　道　義

出土貝殻は長年月を経ていながら意外に新鮮さを保ったものも少くない。しかし微細な特徴の消失したものもあるので種名までの同定困難なものもある。

現生貝に見られぬものは，バテイラとシレナシジミである。バテイラは1個体でもっと貝そのものの検討も必要だしこれをもってバテイラが生息していたとみるのは早計である。

シレナシジミについては興味ある考察がなされる。出土殻は相当磨耗しているので同定ミスもあると思うが奄美に現生する貝では外形，厚さなど（殻皮は完全にない）からしてこの殻に該当するものは見当らず，シレナシジミとするが相当である。

出土数は8個で3か所から採取されている。考古関係者ではほう丁のような物を切る道具に使用したのではないかとも思われるが，その用にはたつようである。

シレナシジミは熱帯マングローブ地帯に生息し当県では現在住用村の役勝川口一帯が唯一の生息地である。ハマグリにて美味であり，付近の人は採取食用にしていて絶滅が心配される。

徳之島には，マングローブ地帯なく，したがって現生しない。当時の海岸線の状態が現在と違いマングローブ地帯があったとすれば生息は可能である。そうであるなら食用とされ殻も多く見つかってよいはずである。出土個数が少なく，しかも道具として使用されたような形態が見られるところから，大島本島産か沖縄産がそのために交易されたのではなかろうか。カタツムリ類の陸貝が個数として多くみられる。当然食用であろう。寄生虫の危険を考える余裕のある食料事情ではなかったろうから。ただ小型のヒルグチギセルなどは後から生貝が侵入したものと思われる。

殻口の狭小な巻貝は肉を抜くのには当然殻を割らねば不可能なはずなのに，現形のままの貝が多いのはどうしたことだろうか，他の用途があったのか，手遊びの用に供せられたのか。加工されたものはその用途は別である。

第10表　犬田布貝塚出土貝類一覧1

科名		6トレンチ	8トレンチ	科名		6トレンチ	8トレンチ
和名	学名	A3	A3下 B3 2層 3層	和名	学名	A3	A3下 B3 2層 3層
腹足綱(巻貝類) Class GASTROPODA				腹足綱(巻貝類) Class GASTROPODA			
チュウガサガイ科	Fam. ACMAEIDAE			ツタノハガイ	Penepatella stellaeformis	○	○○○○
リュウキュウアオガイ	Chiazacmea striata		○○	オオツタノハガイ	P. optima		○
カモガイ	Collisella dorsuosa		○○	ヨメガカサガイ	Cellana toreuma	○	○○○○
コガモガイ	C. heroldi		○	ベツコウザラガイ(ベツコウガサ)	C. grata	○	○
オオカサガイ科	Fam. PATELLIDAE			オオベツコウガサ	C. testudinaria	○○	○○

第11表　犬田布貝塚出土貝類一覧２

科名		6トレンチ		8トレンチ			
和名	学名	A3	A3下	B3	2層	3層	
腹足綱(巻貝類)	Class GASTROPODA						
クルマガサガイ	C. rota				○		
ミミガイ科	Fam. HALIOTIIDAE						
イボアナゴ	Sanhaliotis varia	○	○	○	○	○	
ヒラアナゴ	S. planata	○		○	○		
ニシキウズ科	Fam. TROCHIDAE						
イシダタミ	Monodonta labio confusa				○		
ニシキウズ	trochus maculatus				○		
ムラサキウズ	T. stellatus				○		
ギンダカハマガイ	Teotus pyramis				○	○	
サラサバテイガイ	T. n. maximus				○		
バテイラ	Omphalius pfeifferi					○	
リュウテンサザエ科	Fam. TURBINIDAE						
チョウセンサザエ	Marmorostoma argyrostoma	○	○	○	○	○	
コシダカサザエ	M. stenogyrum				○		
ヤコウガイ	Lunatica marmorata	○		○	○	○	
リュウテンサザエのふた	Turbo petholatus				○		
アマオブネガイ科	Fam. NERITIDAE						
イシダタミアマオブネガイ	Ritena laev, labris			○	○	○	○
キバアマガイ	R. plicatu				○		
アマオブネガイ	Theliostyla olhicilla				○	○	
リュウキュウアマガイ	Amphinerita insculpta					○	
ニシキアマオブネガイ	A. poslita			○	○	○	
イシマキガイ(淡水)	Clithon retropictus				○		
ヤマタニシ科(陸産)	Fam. CYCLOPHORIDAE						
オキナワヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	○	○	○	○	○	
タマキビガイ科	Fam. LITTORINIDAE						
コウダカタマキビガイ	Littoraria pintada				○		
コンペイトウガイ	Echininus cumingii luhuanus				○		
ムカデガイ科	Fam. VERMETIDAE						
オオヘビガイ	Serpulorbis imbricatus				○		
ヘビガイの一種	S. SP	○			○		

科名		6トレンチ		8トレンチ			
和名	学名	A3	A3下	B3	2層	3層	
腹足綱(巻貝類)	Class GASTROPODA						
トウガタカワニナ科(淡水)	Fam. THIARIDAE						
トウガタカワニナの一種		○	○		○		
スイシヨウガイ科	Fam. STROMBIDAE						
ラクダガイ	Lambis truncata sebae				○		
タカラガイ科	Fam. CYPRAEIDAE						
キイロダカラガイ	Monetaria moneta	○		○	○		
ハナマルユキガイ	Ravitrona caputser pentis	○		○			
ハチジウョウダカラガイ	Mauritia mauritiana	○		○			
アミメダカラガイ	Mauritia scurra					○	
ヤクシマダカラガイ	M. arabica	○	○	○	○	○	
ヒメヤクシマダカラガイ	M. depressa						○
ホシキヌタガイ	Ponda vitellus			○	○		
ヒメホシダカラガイ	Lyncina vanelli					○	
フジツガイ科	Fam. CYMATIIDAE						
ミツカドボラ	Cymatriton nicobaricus					○	
ホラガイ	Charonia tritonis	○			○	○	
オキニシ科	Fam. BURSIDAE						
オキニシ	Bursa dunkeri			○	○	○	○
アクキガイ科	Fam. MURICIDAE						
ムラサキイガレイシガイ	Drupa morum					○	○
アカイガレイシガイ	D. clathrata	○			○	○	
ヒロクチイガレイシガイ	D. rubusidaeus	○	○	○	○	○	
ホソスジテツボラ	Purpura persica					○	
テツボラ	P. rudolphi				○	○	
シラクモガイ	Mancinella armigera	○	○	○	○	○	
テツレイシガイ	M. distinguenda					○	
コイボテツレイシガイ	M. intermedia	○	○		○		
エゾバイ科	Fam. BUCCINIDAE						
シマベツコウバイ	Japeuthria cingulata					○	
イトマキボラ科	Fam. FASCIOLARIIDAE						
イトマキボラ	Pleuroploca trapezium					○	

第12表　犬田布貝塚出土貝類一覧 3

科名		6トレンチ	8トレンチ			
和名	学名	A3	A3下	B3	2層	3層
腹足綱（巻貝類）						
リュウキュウツノマタガイ	Latirus polygonus	○		○		
フデガイ科	Fam. MITRIDAE					
フデガイの一種	Mitra sp.			○		
オニコブシガイ科	Fam. VASIDAE					
オニコブシガイ	Vasum ceramicum	○			○	○
コオニコブシガイ	V. turbinellum		○	○	○	○
イモガイ科	Fam. CONIDAE					
ハイイロミナシガイ（ムシロイモモドキ）	Rhizoconus rattus			○		
ヤナギシボリイモガイ	R. miles	○		○	○	
カバミナシガイ	R. vexillum			○	○	
サヤガタイモガイ	Virroconus fulgetrum	○			○	○
マダライモガイ	V. ebraeus					○
クロミナシガイ	Conus marmoratus			○		
クロフモドキガイ	Lithconus pardus			○		
イモガイの一種	Conus SP.	○		○		
タケノコガイ科	Fam. TEREBRIDAE					
ベニタケガイ	Subula dimidiata			○		
カラマツガイ科	Fam. SIPHONARIIDAE					
コウダカカラマツガイ	Siphonaria laciniosa	○		○	○	
キセルガイ科(陸貝)	Fam. CLAUSILIIDAE					
ヒルグチキセルガイ	Tyrannophaedusa nesiothauma			○		
ノミギセルの一種	Zaptyx sp			○		
ナンバンマイマイ科(陸貝)	Fam. CAMAENIDAE					
トクノシマヤマタカマイマイ	Satsama tokunoshimana			○		
チリメンオオシママイマイ	S. oshimae rugosa					○
オナジマイマイ科(陸貝)	Fam. BRADYBAENIDAE					
オキナワウスカワマイマイ	Fruticicola despecta			○	○	
25科74種						
斧足綱(二枚貝類)	Class PELECYPODA					
フネガイ科	Fam. ARCIDAE					

科名		6トレンチ	8トレンチ			
和名	学名	A3	A3下	B3	2層	3層
斧足綱(二枚貝類)	Class PELECYPODA					
エガイ	Barbatia lima	○		○	○	○
ベニエガイ	B. bicolorata	○	○	○	○	
イガイ科	Fam. MYTILIDAE					
クジヤクガイ	Septifer bilocolaris		○	○		
リュウキュウヒバリガイ	Modiolus plumescens	○		○	○	
マクガイ科	Fam. ISOGNOMONIDAE					
アオリガイ	Isogonum perna			○	○	○
シロアオリガイ	I. legumen			○		
ウグイスガイ科	Fam. PTERIIDAE					
クロチョウガイ	Pinctada margaritifera					○
ウミギクガイ科	Fam. SPONDYLIDAE					
ヤスリメンガイ	Spondylus candidus				○	
イタボガキ科	Fam. OSTREIDAE					
オハグロガキ	Saxostrea mordax	○		○	○	○
シジミガイ科	Fam. CORBICULIAE					
シレナシジミ	Geloina papua			○	○	○
キクザルガイ科	Fam. CHAMIDAE					
ケイトウガイ	Chama dunkeri			○		
キクザルガイ	C. reflexa				○	
シャコガイ科	Fam. TRIDACNIIDAE					
ヒメジャコガイ	Tridacna crocea	○		○	○	○
ヒレジャコガイ	T. squamosa	○				
シラナミガイ	T. noae	○		○	○	○
マルスダレガイ科	Fam. VENERIDAE					
アラヌノメガイ	Pteriglypta reticulata					○
チドリマスオガイ科	Fam. MESODESMATIDAE					
イソハマグリ	Atactodea striata			○	○	
シオサザナミガイ科	Fam. PSAMMOBIIDAE					
リュウキュウマスオガイ	Asaphis dichotoma	○		○	○	
ニッコウガイ科	Fam. TELLINIDAE					
サメザラガイ	Scutarcopagia scobinata				○	

第13表　犬田布貝塚出土貝類一覧 4

科名		6トレンチ	8トレンチ
和名	学名	A3 A3下	B32層3層
斧足綱（二枚貝類）			
13科19種			

科名		6トレンチ	8トレンチ
その他		A3 A3下	B32層3層
ウニ類			○○
パイプウニ		○	
フジツボ類		○○	○○
カニノハサミ		○	

※分類，学名は日本列島周辺海産貝類総目録と日本非海産貝類目録による。

第14表　出土貝類集計表１　※（完形に近いものを自然遺物として取り上げたものを集計した表である）　重量単位：g

トレンチ・層	6－A－Ⅱ				6－A－Ⅲ				6－A－Ⅲ下				6－B－Ⅱ				6－B－Ⅲ				8－Ⅲ			
貝名　項目	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量
リュウキュウアオイ	2			2.3																				
コガモガイ					2			0.9	4			1.5	3			0.8	7			2	11			3.4
ツタノハガイ	5			7	11			24.2	3			3.8					7			8.5	6			7.7
ヨメガカサ	10			8.2	25			13.5	11			7.3	10			8.1	18			10.3	9			7.9
オオベツコウ					1			2.5	1			1									1			2.9
イボアナゴ	2			4.5	1			2.5																
イシダタミアマオブネ	327			144					1191			352.5	75			73.8	401			163	389			135
キバアマガイ					4			3.7									1			1.5	1			3.8
アマオブネ					1			1.5																
ニシキアマオブネ	1			1																	1			1.9
イシマキガイ													1			1.8	1			2	1			0.9
ヤマタニシ	810			328	2083			523	1644			596	694			259.3	1984			699	1662			6932
コウダカタマキビ	21			10.5	42			19	42			11.9	13			6.3	27			11	42			14.3
コンペイトウガイ	11			5.3	31			16.2	16			8.2	17			7.3	30			14	50			15
カワニナ	21			11.8	50			26.8	46			27.5	23			18.2	37			28	56			32.7
キイロダカラガイ	3			12.4					2			5.1					1			2				
ハナマルユキダカラ	7			57.5	6			83	8			52.6	3			41.5	5			60.5	12			101.3
ムラサキイガレイシ																					1			16
アカイガレイシ	1			19.8																	1			25
ヒロクチガレイシ	3			27.4	1			8.6	1			18.3									3			29.3
テツレイシ																	1			1.5				
シロガレイシ	1			7																	1			5.5
コオニコブシ	1			12.8													3			10.5	1			23.2
マダライモ					1			3.9																
イモガイ類																	4			13.5				
コシダカラマツ					10			6.2	4			6.3	7			4	1			0.8	2			2

第15表　出土貝類集計表２

トレンチ・層	6－A－Ⅱ				6－A－Ⅲ				6－A－Ⅲ下				6－B－Ⅱ				6－B－Ⅲ				8－Ⅲ			
貝名　項目	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量
フトスジアマガイ					1			1.8																
ウスカワマイマイ(オキナワ)	45			15	66			21.6	75			28.9	93			295	331			102.8	38			44
ベニエガイ	2			5.4					1			2.9	1			3	1			2				
アカエガイ					2	2		3.5																
クジャクガイ	1			3																				
リュウキュウヒバリガイ	2	1	1	6	5	1	4	8.5					5	2	3	9.7	9	9		9.8	2		2	2.4
ヒメジヤコ	1			18																				
イソハマグリ									1			1.4	2	2		7.5	3			6.8	2			4.3
計　種				725.5				793.8				1153.0				478.8				1199.0				1174.2

小計　5524.3g

第16表　水洗出土貝類集計表１　（各トレンチ各層における排土を土のう袋１袋採集して水洗サンプリング化したものである）

トレンチ・層	6－A－Ⅲ				6－A－Ⅲ下				6－B－Ⅲ				6－B－Ⅲ下				8－Ⅱ				8－Ⅱb				8－Ⅲ			
貝名　項目	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量
カモガイ																	1			0.5								
コガモガイ									2			1.5	2			0.5												
ヒラカラマツ													1			1.3												
ツタノハガイ	10		2	17.3	1			2	5			12	7			10	1			3.3					1			3.5
オオツタノハガイ																	2			7								
ヨメガカサガイ	43			46.8	8	7	1	11.5	15	14	1	18.6	17			18.5	105			150	2			4.5	8			15.8
ベッコウガイ	8			9													17			30								
オオベッコウガサガイ	1			41	1			2.2									9			55.5					5			12.5
クルマガサガイ																	1			0.5								
イボアナゴ	13	7	3	61.3	9	7	2	54.3	7	6	1	54.5					30			15.1	2			8.5	7			37.5
ヒラアナゴ	1			2.2					1			4.8					2			3.3								
ニシキウズ																	1			45.8								
ムラサキウズ	2			38.2	1			18.8	2			22	1			15.1	10			67	2			38.5				
ギンタカハマ					1			35.5	1			6.7																
サラサバテイ																	1			7								
バテイラ																									1			55.5
チョウセンサザエ	1		2	6	9			406	5	2	3	205.5					14			296.8	3			28.2	6			25.7
チョウセンサザエの蓋	10			110.3					5	1		158					1			7					3			26.5
コシダカサザエ																	1			1.3								
ヤコウガイ	4			266.8					3			68					13			604.8					4			242
リュウテンの蓋																	3			22								
キバアマガイ																	2			6								
アマオブネ									2			9.8	2			4	3			8.8								
リュウキュウアマガイ																									1			1.2
ニシキアマオブネ									1			14.5					6			20.2					2			7
イシマキガイ																	1			0.6								

第17表　水洗出土貝類集計表２

トレンチ・層	6－A－Ⅲ				6－A－Ⅲ下				6－B－Ⅲ				6－B－Ⅲ下				8－Ⅱ				8－Ⅱb				8－Ⅲ			
貝名　項目	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量
フトスジアマガイ													1			2.7												7
ヤマタニシ	5			7.8	9			11.8	2			2.5	1588			675,5	25			13.5	2			2.2	15			
コウダカタマキビ									40			19.5	1			0.3												
コンペイトウガイ													20			8.5	8			4								
オオヘビガイ																	1			6.5								
ヘギガイ類	2			26													1			5.2								
カワニナ	1			1.2				2.3					40			31.6	6			6								
ラクダガイ													1		1	55												
キイロダカラ	1			5					1			4.5	3			8				12.3								
ハナマルユキダカラ	16	8	7	67.2	5			9.2	11	4	7	34.5	10			96	61			245.8					4			11
ハチジョウダカラ	2		2	15													2			28.1	1			4.2				
アミノメダカラ																	1			2.7								
ヤクシマダカラ	2		2	28.5	2		1	35.5	3	1	2	67.5					12			174.5								
ヒメヤクシマダカラ																									1			35.8
ホシキヌタダカラ									1		1	10.6					3			42.7								
ヒメオンダカラ																	2			3.6								
ミツカドボラ																	1			16								
ホラガイ	2			136													3			327.5	1			85.8	3			377.2
オキニシ					1			8.7	1		1	9.8					11			244.6					2			42
ムラサキイガレイシ																	3			31.5	1			14.5				
アカイガレイシ	1			19.5													6			120.5					1			11.5
ヒロクチイガレイシ	11	10	1	93	1			14	3	1	1	21.5					28			251					1			13.5
ホソスジテツボラ																	1			9								
テツボラ									1			12					1			28.5								
シラクモガイ	5			307.3					3	1	2	65					41			2229					5			250
テツレイシ	2			13.2													4			26.5								

第18表　水洗出土貝類集計表３

トレンチ・層	6－A－Ⅲ				6－A－Ⅲ下				6－B－Ⅲ				6－B－Ⅲ下				8－Ⅱ				8－Ⅱb				8－Ⅲ			
貝名　項目	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量
コイボテツレイシ	2			12.8	1			12									6			7.3								
イトマキボラ																	1			47.2								
リュウキュウツノマタ					1			15.5									5			220.7								
フデガイの類																	1			8.6								
オニコブシ	1			92.5													3			185	1			116.2	1			12.5
コオニコブシ									3	2		68.5					1			10					1			14.3
ハイイロミナシ																	2			19.6								
ヤナギシボリイモ	2			16.2					1		1	21.7					1			4.5								
カバミナシ									1			46.5					1			27.7								
サヤガタイモ	1			14.5													3			20.3					1			11
マダライモ																									1			16.8
クロミナシガイ																	1			28								
クロフモドキ																	1			6.5								
イモガイ類	3			3.2					5	1	4	41													2			51.5
ベニタケ																	1			17								
コシダカカラマツ	1			1.3					2			6.5	4			5.8	20			30.5								
ヒルグチギセル(陸貝)																	3			3.1								
キセルガイ一種																	3			2.5								
トクノシマヤマダカマイマイ																	1			1.6								
チリメンオオシママイマイ																									1			1
ウスカワマイマイ(オキナワ)													119			47.5	6			3.3	1			1.8	1			1.5
ウスカワマイマイの蓋													3			6.5												
エガイ	2			7					2	1	1	6.5					4			13,3					1			4
ベニエガイ	8			32.2	5	4	1	24	2			6.5	1			4.3	13			101								
クジャクガイ					1			3.2	1			4.5	1			4.7						1		2				
リュウキュウヒバリガイ	10	4	4	11.7					11	3	7	14.7	6		6	17.5	11			10.8								

第19表　水洗出土貝類集計表４

トレンチ・層	6－A－Ⅲ				6－A－Ⅲ下				6－B－Ⅲ				6－B－Ⅲ下				8－Ⅱ				8－Ⅱb				8－Ⅲ			
貝名　項目	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量	個数	左	右	重量
アオリガイ									1			6					1			10.8					1			12.2
シロアオリガイ									1			2.3																
クロチョウガイ																									1			21.5
ヤスリメンガイ																	2			44.6								
オハグロガキ	3			16.5					2			9.5					14			195.5	1			11	3			22.5
シレナシジミ									1	1		16					3			8.3					1			21
ケイトウガイ									1			15																
キクザルガイ																	3			29								
ヒメジヤコ	3	3		50.6	1	1		18.8	1			13.5					7			89.5	1			14				
ヒレシヤコ	1			5																								
シラナミ	4			150	4	2	2	80	4	3	1	78					15			242	3			24.8	3			26
アラヌノメガイ																									1			16.8
イソハマグリ									1	1		2					8			16.8								
リュウキュマスオガイ	1			3					1	1		16					31			121.2					1			2.7
サメザラガイ																	2			17								
ウニ類																									1			2
パイプウニ	1			2													3			6.2								
フジツボ				470				143				82.5								9075				9.3				69
カニノハサミ	1			8																								
計　種				1745.1				910.8				1317.5				1280.2				9922.9				419.0				1825

小計　17420.5ｇ

貝類総重量　22944.8ｇ

犬田布貝塚出土の動物骨について

鹿児島大学農学部　西中川　駿

1．はじめに

犬田布貝塚は，鹿児島県大島郡伊仙町犬田布字連木竿1,152番地にあり，昭和58年10～11月に，伊仙町教育委員会が，遺跡確認調査のために，鹿児島県文化課の吉永・宮田・戸崎の３氏の指導の下に発掘し，縄文晩期から弥生前期の人工遺物が出土した遺跡である。

今回調査した自然遺物は，縄文晩期から弥生前期のものがほとんどである。ここでは哺乳類の出土骨を中心に詳述する。なお，動物種名や学名は，今泉[2)]に従った。

2．出土動物種と出土骨量

本貝塚から出土した自然遺物（貝類を除く）は，総重量12,320.2ｇで，それらは哺乳類，8,243.9ｇ，鳥類10.9ｇ，爬虫類240.4ｇ，魚類2,918.0ｇ，甲殻類176.5ｇおよび動物種や骨の種類の不明なもの730.5ｇである。これらの区画別出土骨量は表１に示した。

表１．犬田布貝塚出土の動物別および区画別出土骨量

（ｇ）

区	層	哺乳類 イノシシ	哺乳類 シカ	哺乳類 イヌ	哺乳類 アマミノクロウサギ	哺乳類 ネズミ	哺乳類 クジラ	鳥類	爬虫類	魚類	甲殻類	不明骨	区画別出土骨量
1	Ⅱ	7.2 (2)											7.2
	Ⅲ	305.0 (49)		44.1 (5)				1.2 (1)	36.0	149.4		83.8	619.5
	Ⅳ	424.3 (41)					68.0 (1)		29.0	11.5		53.9	586.7
2	表層	20.0 (6)		8.3								28.2	56.5
4	表層	45.0 (11)		6.1 (1)						29.0		8.3	88.4
5	Ⅳ層	11.5 (4)										5.4	16.9
6	A Ⅱ	316.4 (15)	41.1 (2)							21.7			379.2
	B Ⅱ	59.0 (2)								816.6	64.7		940.3
	B Ⅲ	287.5 (34)		56.3 (4)	6.6 (2)	0.5 (1)		0.4 (1)	43.6	533.1	58.5	38.8	1025.3
8	Ⅰ	324.7 (29)		3.1 (1)				0.8 (1)	1.9	34.5	8.9	21.0	395.5
	Ⅱ	3951.2 (305)		191.8 (40)	14.5 (5)	2.0 (5)	39.1 (1)	7.6 (4)	92.3	720.0	23.1	356.9	5398.5
	Ⅱb	588.9 (55)		30.9 (6)					25.0	161.5	7.7	71.5	885.5
	Ⅲ	815.3 (76)		294.9 (43)				0.9 (1)	12.6	309.7	8.9	27.7	1470.0
表採		280.0 (31)								131.0	4.7	35.0	450.7
動物別出土骨量		7436.0 (660)	41.1 (2)	636.1 (102)	21.1 (7)	2.5 (6)	107.1 (2)	10.9 (8)	240.4	2918.0	176.5	730.5	12320.2
推定個体数		28	1	7	2	3	—	—	—	—	—	—	

（　　）は骨片数を示す。

まず，哺乳類について述べる。哺乳類は以下に記す5目6種である。

A．偶蹄目（Artiodactyla）

1）イノシシ（*Sus scrofa* LINNAEUS）

2）シカ（*Cervus nippon* TEMMINK）

B．食肉目（Carnivora）

3）イヌ（*Canis Familiaris* LINNAEUS）

C．兎目（Lagomorpha）

4）アマミノクロウサギ（*Pentalagus Furnessi* STONE）

D．齧歯目（Rodentia）

5）ネズミ類（*Muridae* sp.）

E．鯨目（Cetacea）

6）クジラ類（*cetacea fam.* indet.）

これらのうち，イノシシが7,436.0g（660骨片）で，全体の90％を占め，ついでイヌ8％で，他のものは少ない。以下各動物について述べる。

表2．犬田布貝塚出土の陸棲哺乳動物の骨格別出土骨片数

骨名		頭蓋				胴骨							前肢骨							後肢骨								動物骨片出土数
動物種		頭蓋骨	下顎骨	歯骨	角	頸椎	胸椎	腰椎	仙椎	尾椎	肋骨	胸骨	肩甲骨	上腕骨	橈骨	尺骨	手根骨	中手骨	指骨	寛骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	足根骨	中足骨	趾骨	
イノシシ	左	11	11	17							92		28	17	13	12		4	1	15	22		18	5	8	9		660
						23	38	17	1			4																
	右	14	12	15							91		27	15	13	18		8	3	18	13	1	28	4	5	6	3	
シカ	左				2※																							2
	右																											
イヌ	左	3	6								11		1	4	1	1		4		5	3		7		1	2		102
						3	4	3	1																			
	右	1	2								14		2	2	2	2		3		5	3		4			2		
アマミノクロウサギ	左													2						1			2		1			7
	右																									1		
ネズミ	左			1												1												6
	右		2	1																	1							
骨別骨片数		29	33	34	2	26	42	20	2		208	4	58	40	29	34		20	4	44	42	1	59	9	15	19	3	777
骨格別出土率		12.6％（98）				38.9％（302）							23.8％（184）							24.7％（193）								

※ シカの角は加工されており，移入されたものと思われる。

1） イノシシ（図版Ⅰの1～28参照）

イノシシの骨と固定されたものは，660骨片で，区画別では第8トレンチⅡ層，Ⅲ層，Ⅱb層や第1トレンチⅣ層・Ⅲ層などに多くみられ，特に第8トレンチが全体の76.3％を占めている。骨別では表2に示すように，肋骨183（左側92個，右側91個，以下同じ）が最も多く，ついで肩甲骨55（28，27），脛骨46（18，28），大腿骨35（22，13），寛骨33（15，18），上腕骨32（17，15）などが多い。脛骨や肩甲骨の出土骨片数から，28個体以上のものと推定される。一方，長骨や頭蓋は割断されており，骨の形状は，現世のリュウキュウイノシシと類似している。また，ほぼ完全な上腕骨（左）の最大長は173.2cmで，第三中手骨（左）63.6mm，踵骨（左）64.7mm，距骨（左）34.8cmで，これらの計測値は，現世のリュウキュウイノシシのものとほぼ同じ大きさである。

2） シカ（本文第29図514，515　図版22参照）

シカは，加工された角2片がみられるのみで，他の部位の骨は出土していない。加工された角については，本報告の第4章第10節を参照されたい。

3） イヌ（図版Ⅰの29～51参照）

イヌの出土骨は，第5トレンチを除くすべてのトレンチでみられ，肋骨25（11，14），脛骨11（7，4），寛骨10（5，5），下顎骨8（6，2），上腕骨6（4，2），大腿骨6（3，3）個など計102個の出土がみられ（表2参照），これまで鹿児島県下の遺跡の中でもっとも多い。推定個体数は，脛骨や下顎骨の数から，7個体以上のものである。下顎骨の最大長（101.5，107.5，111.7(mm)）や橈骨の最大長（111.4，112.5(mm)）から，山内[10]の方法で体高を推定すると，36～40cmである。これは現生の柴犬大の大きさである。

4） アマミノクロウサギ（図版Ⅱの1～7参照）

アマミノクロウサギは，ムカシウサギ亜科に属し，現在ではわが国の特別天然記念物に指定されている。遺跡からのアマミノクロウサギの出土は，わが国ではじめてで，本貝塚の第6－Bトレンチの Ⅲ層，第8トレンチのⅡ層から，上腕骨2（左），第3中足骨（右），寛骨（左），脛骨2（左），足根骨（左）の計7個の出土である。ほぼ完全な上腕骨の最大長は，65.3mm，第3中足骨は27.2mmであるが，この数値は現生[9]のものよりわずかに小さい。

5） ネズミ（図版Ⅱの8～11参照）

第6－Bトレンチの Ⅲ層や第8トレンチのⅡ層から，下顎骨2（右），尺骨（左），寛骨（右）など6骨片がみられ，2個体のものと推定される。骨が大きいことから，ドブネズミかケナガネズミのものである。

6） クジラ

クジラ類と推定される大型の骨片2個がみられるが，種や骨の種類は不明である。

以上，哺乳類5目6種の出土骨について述べたが，陸棲哺乳動物の出土骨片数を骨格別にみると（表2参照），胴骨が38.9％，後肢骨24.7％，前肢骨23.8％，頭蓋12.6％である。

次に哺乳類以外の出土骨について述べる。

鳥類（図版Ⅱの12・13参照）は，鳥口骨，上腕骨，尺骨など８骨片がみられるが，これらは，カモ類，ミズナギドリなどのものである。

爬虫類（図版Ⅱの14～20参照）は，ウミガメのもので，頭蓋，背甲，上腕骨，指骨など15骨片がみられる。

魚類（図版Ⅱの23～30参照）は，専門家の鑑定を待ちたいが，ブダイの前上顎骨，歯骨，上咽頭骨，下咽頭骨，フエフキダイの前上顎骨，ベラ科の前上顎骨，下咽頭骨，ウツボ科の下顎骨，ハタ科の主上顎，ハリセンボンの上顎骨など，総重量2918.0ｇのものが出土している。

甲殻類（図版Ⅱの21・22参照）は，カニの鉗脚で76個の大小のものが出土している。

次に全出土骨を区画別にみると，第８トレンチがもっとも多く，全体の66.1％を占め，ついで第６トレンチの19.0％，第１トレンチの9.8％であり，他は少ない。

３．考　察

本貝塚出土の哺乳類は５目６種であったが，イノシシが主体で他のものは少なかった。イノシシの出土は鹿児島県下の各地の遺跡でみられ[6]，奄美地方の宇宿貝塚[4]，サウチ遺跡[3]，中甫洞穴[7]，および面縄貝塚[8]，からも出土している。イノシシの長骨や頭蓋は割断されており，これは金子[5]がいうように骨髄や脳食のあったことがうかがわれる。骨の形状や大きさは現生のものとほぼ類似している点から，当時も現在と同じ型のイノシシが生息していたものと思われる。

シカの出土は，奄美の遺跡にはみられないが，本貝塚からは加工された角２個のみの出土があった。しかし，この貝塚人が，シカを狩猟し，角を加工したとは考えられず，他の地から移入されたものと思われる。この角の形態について，鹿児島大学理学部の大塚氏は，鹿児島県本土のシカの角に類似しているという。これらの点からも，この角の加工品は，移入と考えた方が妥当と思われる。

イヌの出土は，鹿児島県下では面縄貝塚[8]をはじめ６遺跡[6]があるが，出土量は本貝塚がもっとも多い。縄文時代のイヌは，狩猟犬として飼育されていたといわれ[5]，本貝塚の骨にも割断の跡が少ないことなどから，飼われていたことがうかがえる。また，下顎骨や橈骨の最大長から，山内[10]の方法で体高を求めると36～40㎝であり，これは長谷部[1]のいう小型犬に属するもので，現生の柴犬と同じ大きさであったことが想像される。

アマミノクロウサギの出土は，わが国でははじめてで，今まで奄美の遺跡で出土の可能性がありながら，これまで出土していなかった。現生種[9]と比較すると，幾分小さい。

ネズミの出土は少なく，これを食料としていたかはわからないが，魚類や，ウミガメ，カニなどは，当時の人々の重要な蛋白資源であったことが考えられる。

以上，犬田布貝塚を遺した人々は，イノシシを中心とした狩猟を行い，一方，魚，貝類の採集を行っていたことが示唆された。

４．ま　と　め

鹿児島県大島郡伊仙町にある犬田布貝塚出土の動物骨について調査した。

1） 犬田布貝塚出土の自然遺物は，総重量12,320.2ｇで，そのうち哺乳類が8,243.9ｇで最も多く，全体の66.9％を占め，鳥類10.9ｇ，爬虫類240.4ｇ，魚類2,918.0ｇ，甲殻類176.5ｇである。

2） 哺乳類はイノシシ，シカ（角の加工品），イヌ，アマミノクロウサギ，ネズミ，クジラで，鳥類はカモ類，ミズナギドリ類などである。爬虫類はウミガメ，魚類は，ブダイ，フエキダイ，ハタ，ベラ，ウツボ，ハリセンボンなどである。甲殻類はカニの鉗脚である。

参考文献

1．長谷部言人：日本石器時代家犬について　人類学雑誌40巻１号（1925）

2．今泉　吉典：原色日本哺乳類図鑑　Ｐ１～196　保育社　東京（1979）

3．笠利町教育委員会：サウチ遺跡　65～66（1978）

4．　同　上　：宇宿貝塚　笠利町文化財調査報告書　95～96（1979）

5．金子　浩昌：縄文時代の狩猟・漁撈　歴史公論２　67～71（1979）

6．西中川　駿他：古代遺跡出土の動物骨に関する研究
Ⅳ．鹿児島県黒川洞穴出土骨の概要　鹿大農学術報告　33，147～157（1983）

7．　同　上　：中甫洞穴出土の動物骨，鹿児島考古　第17号　41～44（1983）

8．西中川　駿：面縄貝塚出土の動物骨について，伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)　43～50（1983）

9．大塚　閏一他：キュウシュウノウサギ，アマミノクロウサギおよび家兎
ＪＷ―NIBSの骨の計測値について　Ⅱ，前肢骨および後肢骨
実験動物　30（2），113～127（1981）

10．山内　忠平：犬における骨長より体高の推定法　鹿大農学術報告　7，125～131（1958）

図版の説明

図版Ⅰ　1～28：イノシシ

29～51：イヌ

1．頭蓋　2．下顎骨(左)　3．下顎骨(左)　4．環椎

5．軸椎　6．胸椎　7．腰椎　8．肋骨(左)　9．肋骨

10．肩甲骨(左)　11．上腕骨(左)　12．橈骨(左)　13．橈骨(右)

14．尺骨(右)　15．第三中手骨(左)　16．第三趾基節骨　17．第三指中節骨

20．大腿骨(左)　21．膝蓋骨(右)　22．脛骨(右)　23．踵骨(右)　24．踵骨(右)

25．距骨(左)　26．距骨(左)　27．第三中足骨(左)　28．第三中足骨(左)

29．上顎骨(左)　30．下顎骨(右)　31．下顎骨(右)　32．環椎

33．腰椎　34．仙骨　35．肋骨(右)　36．肋骨(右)　37．肩甲骨(右)

38．上腕骨(左)　39．上腕骨(右)　40．橈骨(左)　41．尺骨(左)

42．寛骨(右)　43．大腿骨(左)　44．大腿骨(左)　45．脛骨(右)　46．踵骨(左)

47．距骨(左)　48．第四中手骨(左)　49．第四中手骨(左)　50．第二中足骨(右)

51．第三中足骨(左)

図版Ⅱ　1～7：アマミノクロウサギ

8～11：ネズミ

12～13：鳥類（12．ミズナリドリ，13．カモ類）

14～20：ウミガメ

21～22：カニ

23～30：魚類（23．ブダイ　24．ブダイ　25．ブダイ　26．フェキダイ　27．ハリセンボン　28．ベラ　29．ウツボ　30．ハタ科）

1．上腕骨(左)　2．上腕骨(左)　3．寛骨(左)　4．踵骨(左)

5．第三中足骨(右)　6．脛骨(左)　7．脛骨(左)　8．切歯

9．下顎骨(右)　10．尺骨(左)　11．寛骨(左)　12．鳥口骨(左)

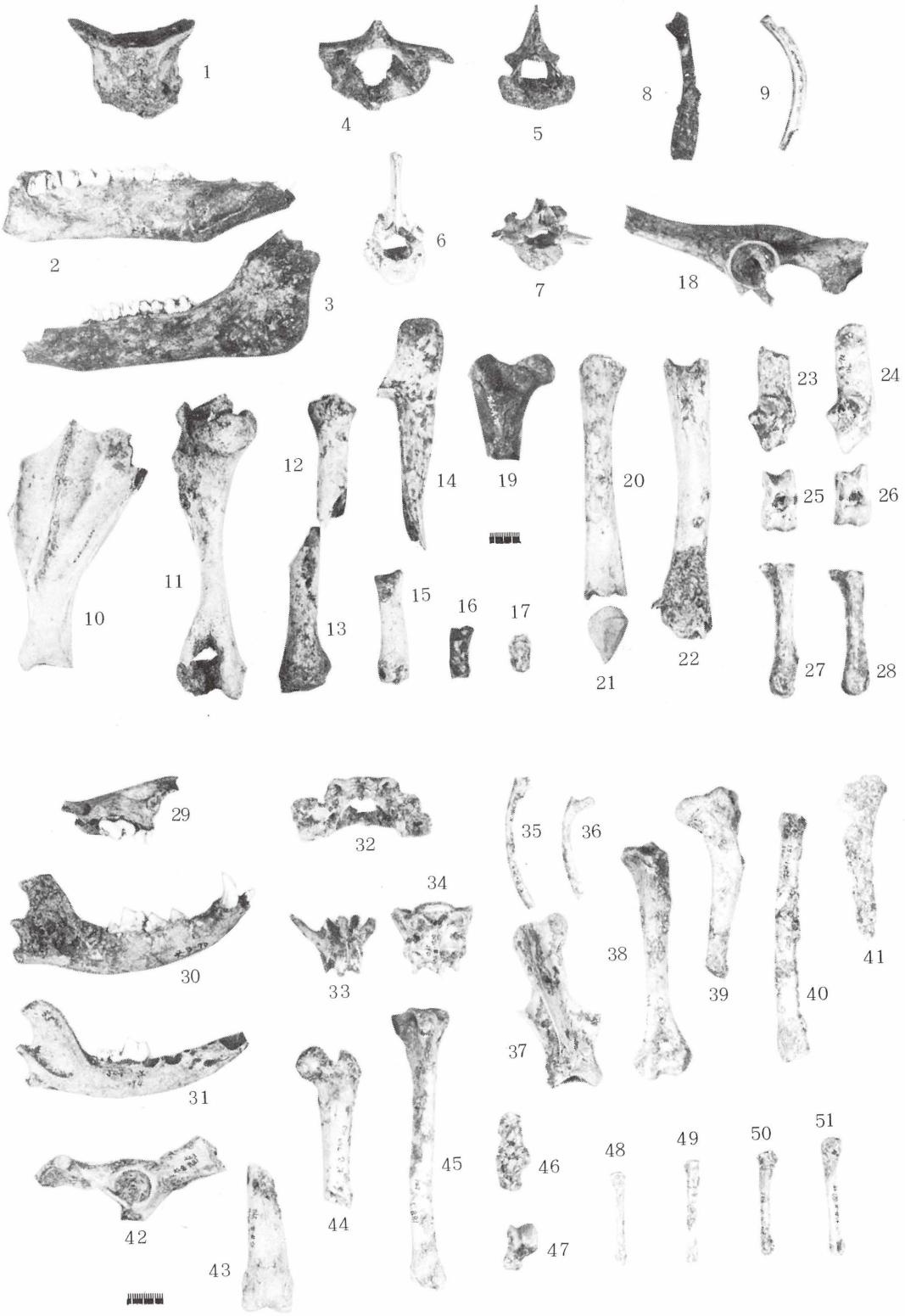
13．尺骨(左)　14．頭蓋　15．背甲　16．腹板　17．縁甲

18．前腕骨　19．指骨　20．指骨　21．鉗脚　22．鉗脚

23．前上顎骨　24．歯骨　25．下咽頭骨　26．歯骨　27．上顎骨

28．下咽頭骨　29．歯骨　30．主上顎骨

PL 1


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

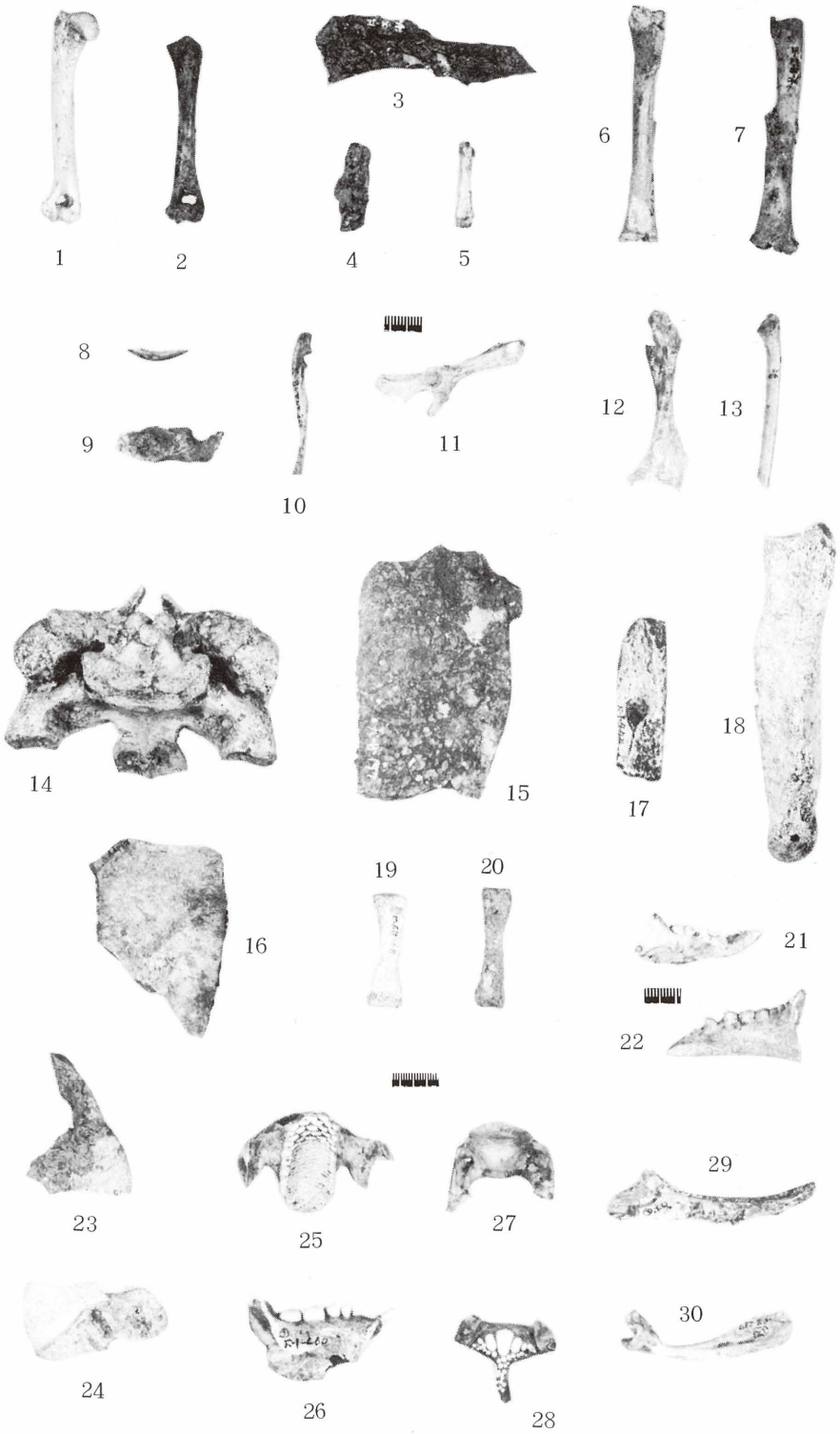
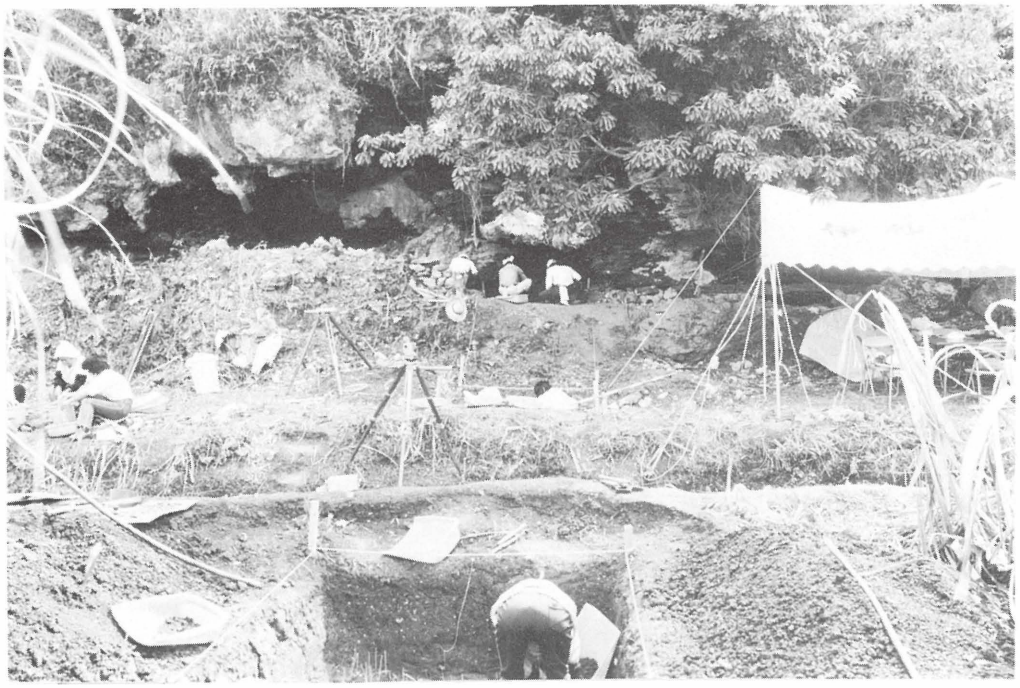

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

図　　版

犬田布貝塚近景



調査風景（手前から１T・６AT・６BT）

図版 2

調 査 風 景

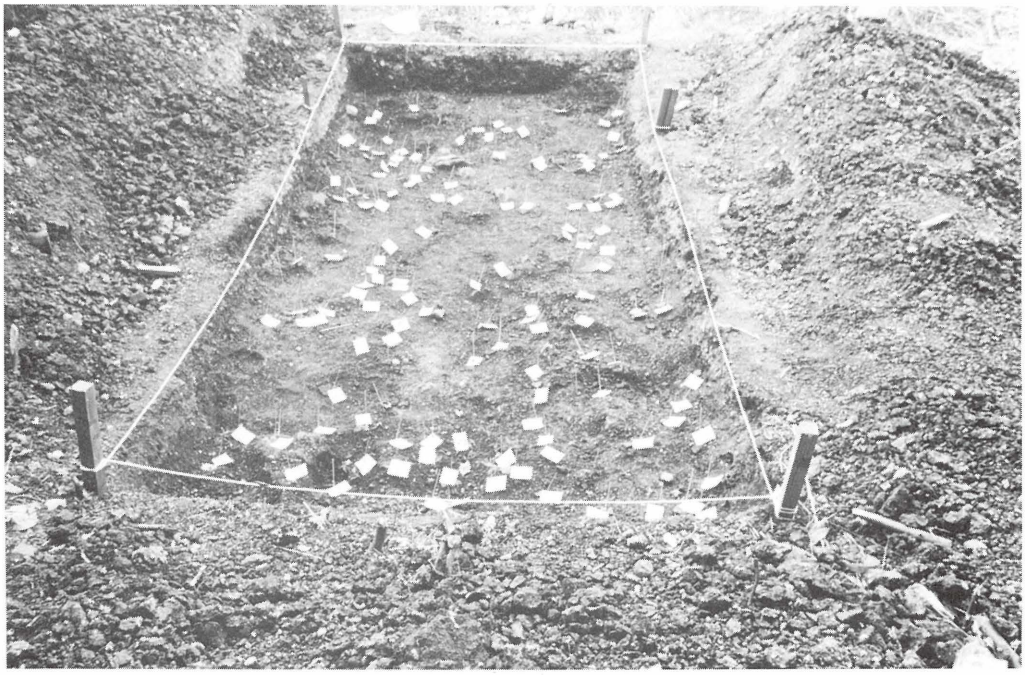
調 査 風 景

6 BT 完掘状態

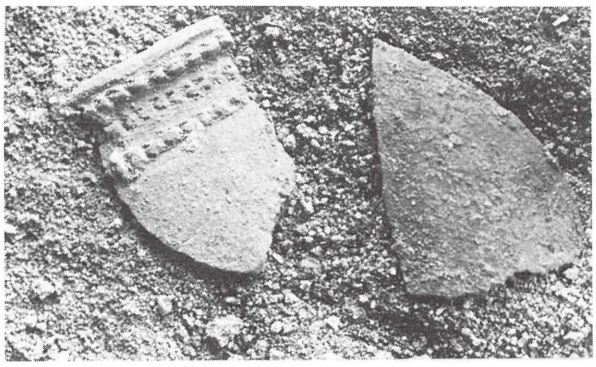
2 T 土層断面

図版 4

遺物出土状況

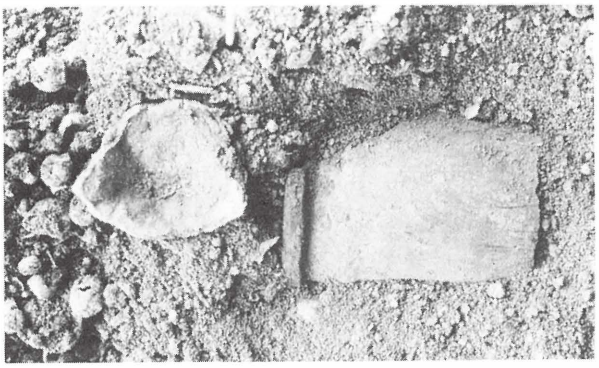


遺物出土状況



1

2

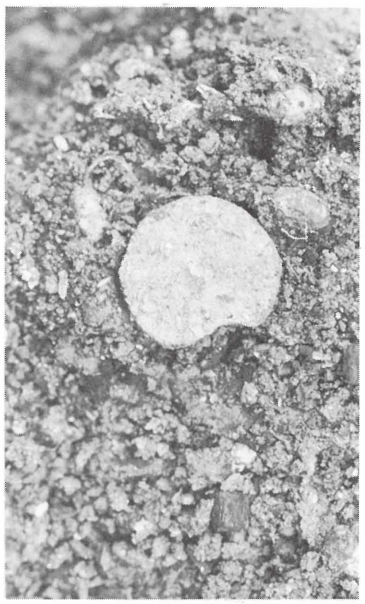


3

4

遺物出土状態

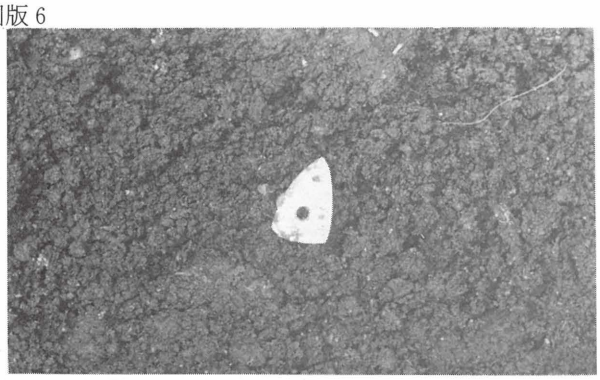
5



6

1～5 土器片
6　　土製品

図版 6



1

2

3

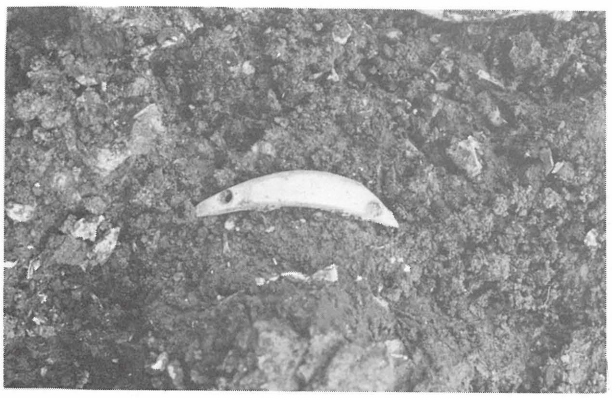
4

遺物出土状態

5

6

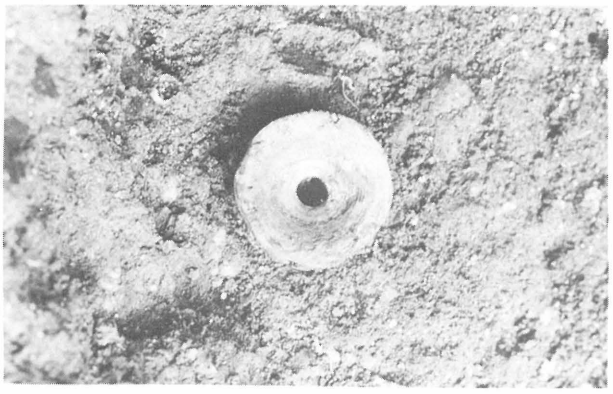
1．貝鏃
2．貝製品
3．貝製品
4．石斧
5．スイジガイ製利器
6．貝製品



1

2

3



4

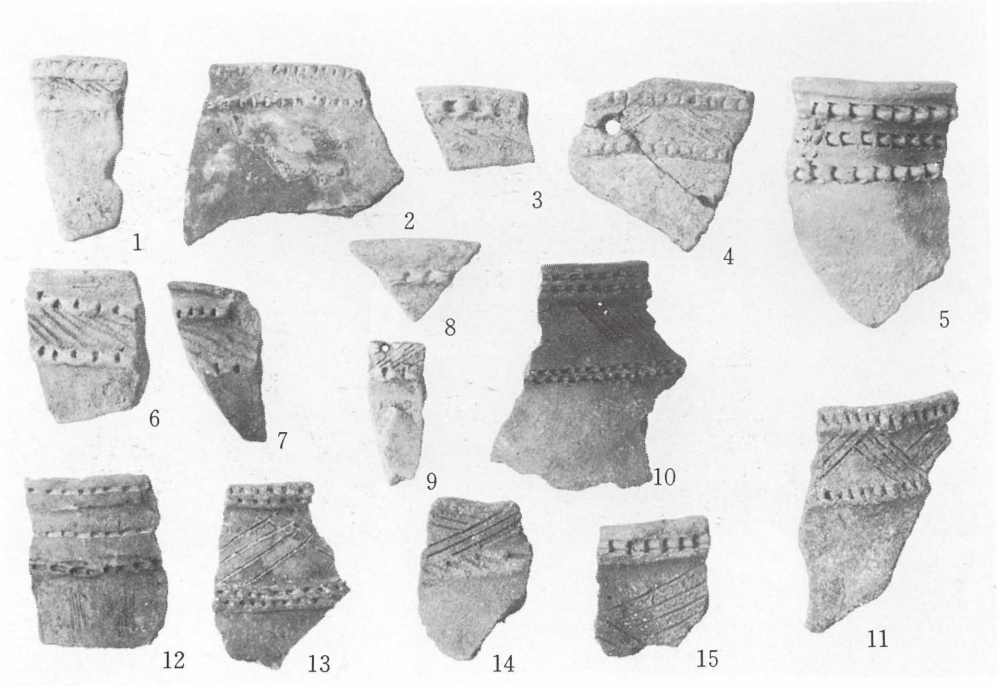
5

6

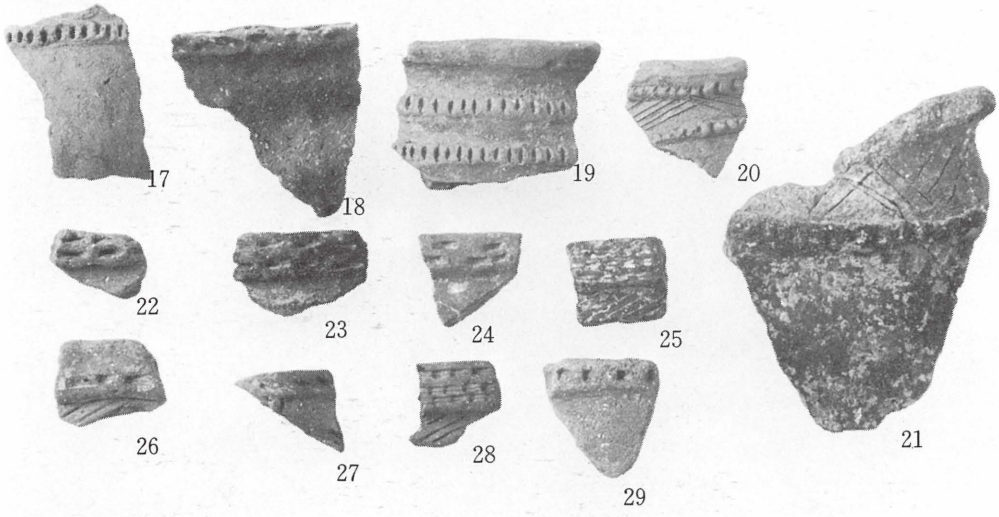
1～3　鹿角製品
4　　耳　栓
5　　猪牙製品
6　　貝製品

遺物出土状態

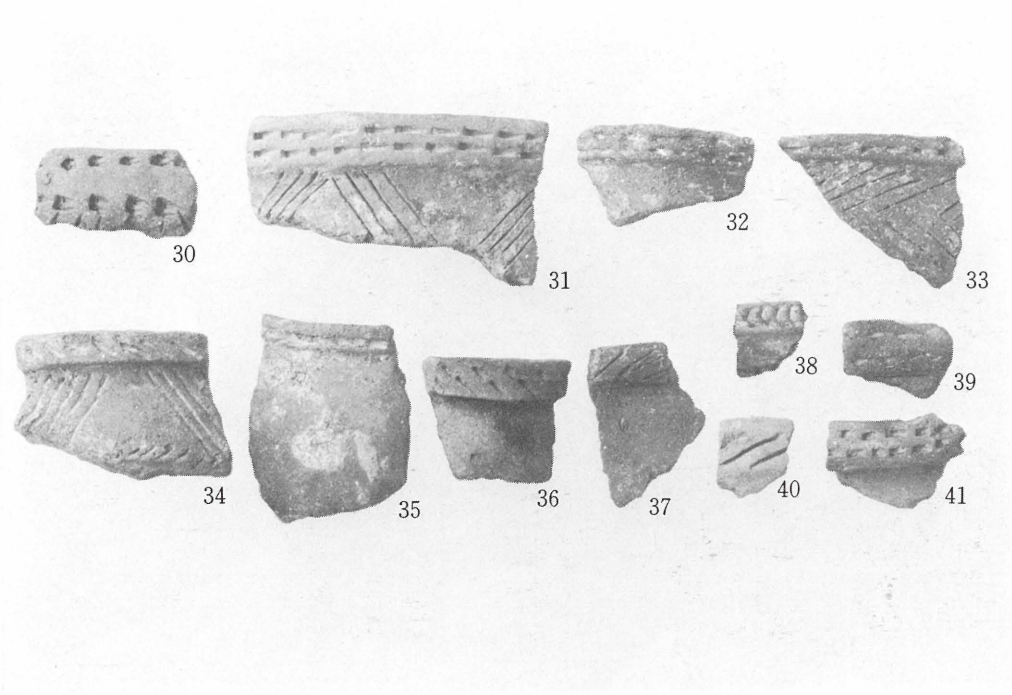
図版 8



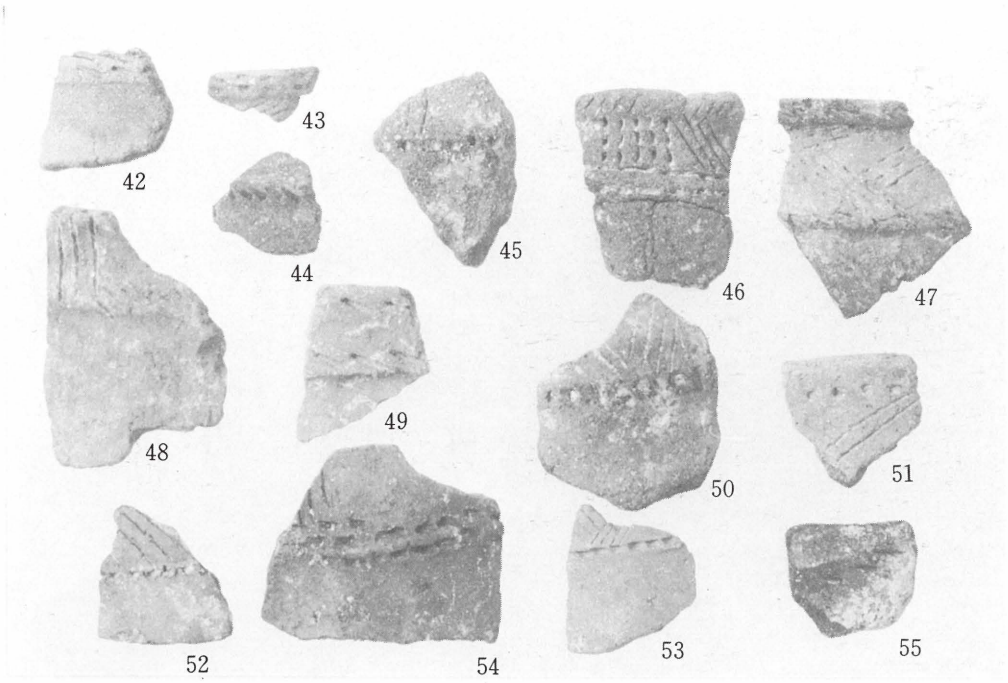
出土土器（Ⅰ類）



出土土器（Ⅰb類・Ⅱa類）

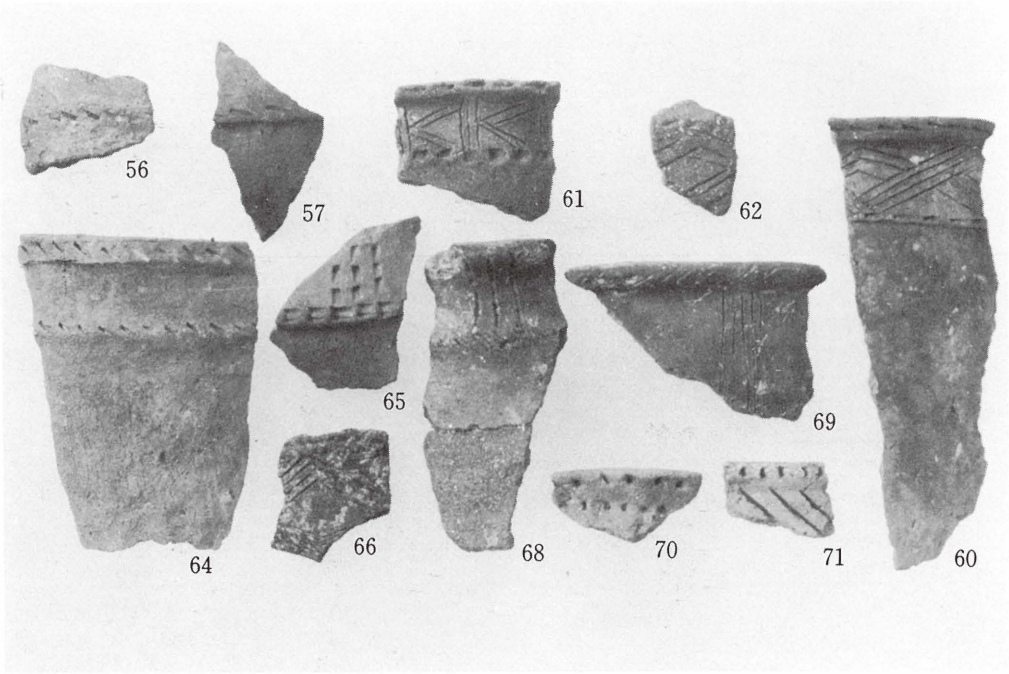


出土土器（Ⅱa類）

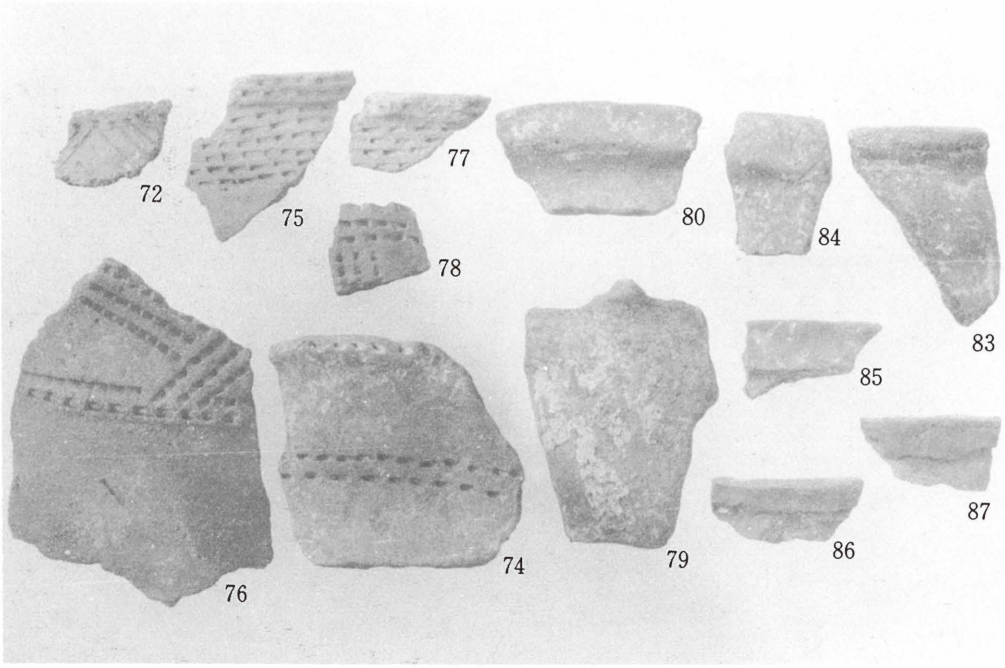


出土土器（Ⅱb類）

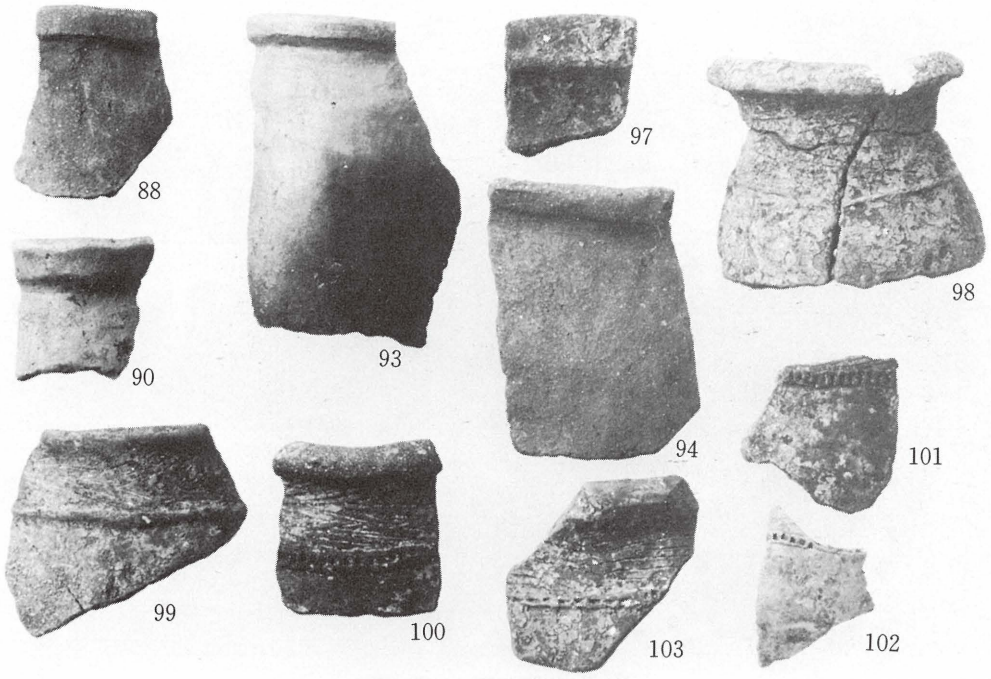
図版10



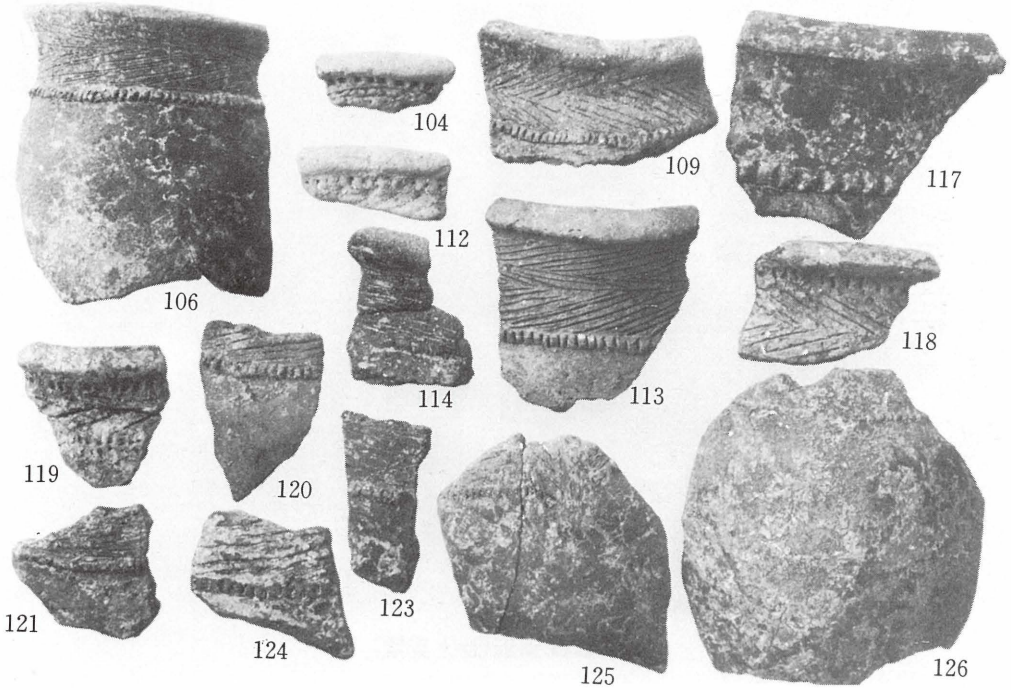
出土土器（Ⅱb類）



出土土器（Ⅱc類・Ⅱd類）

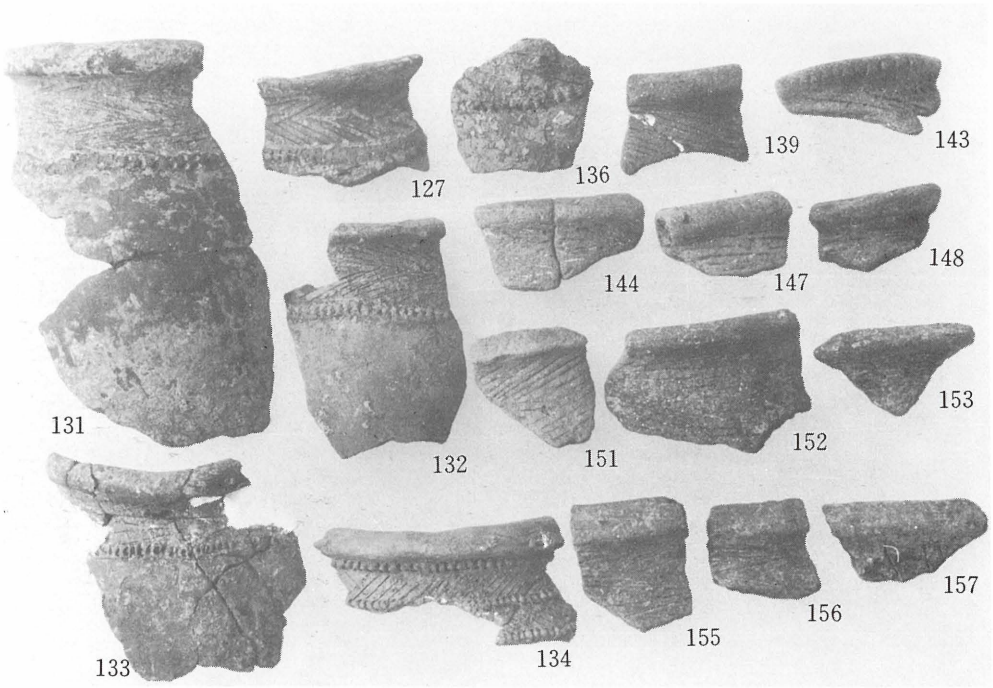


出土土器（Ⅱd類・Ⅲa類・Ⅲb類）

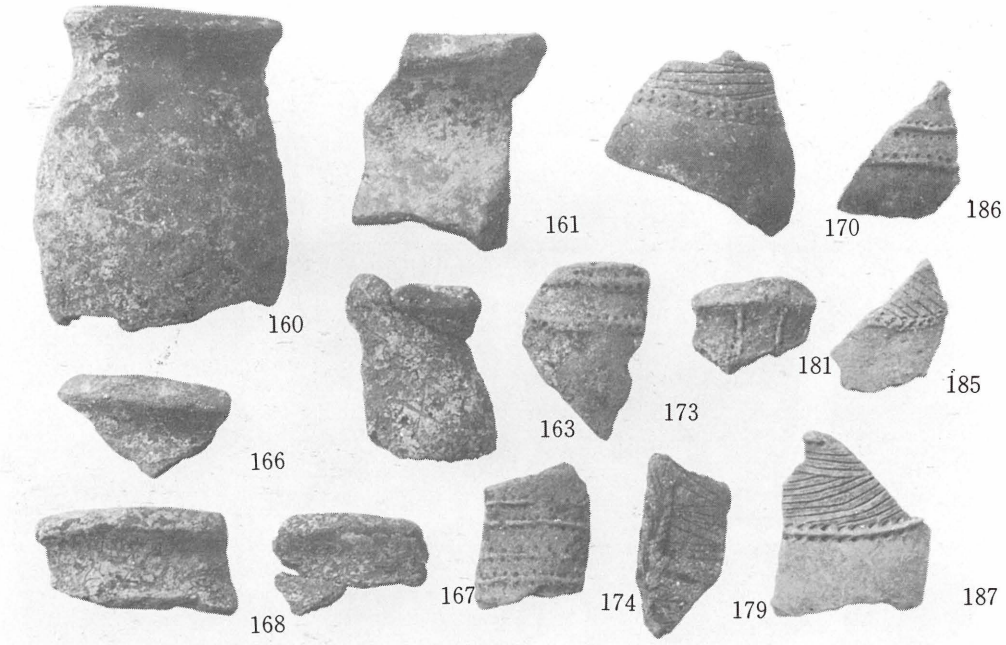


出土土器（Ⅲc類）

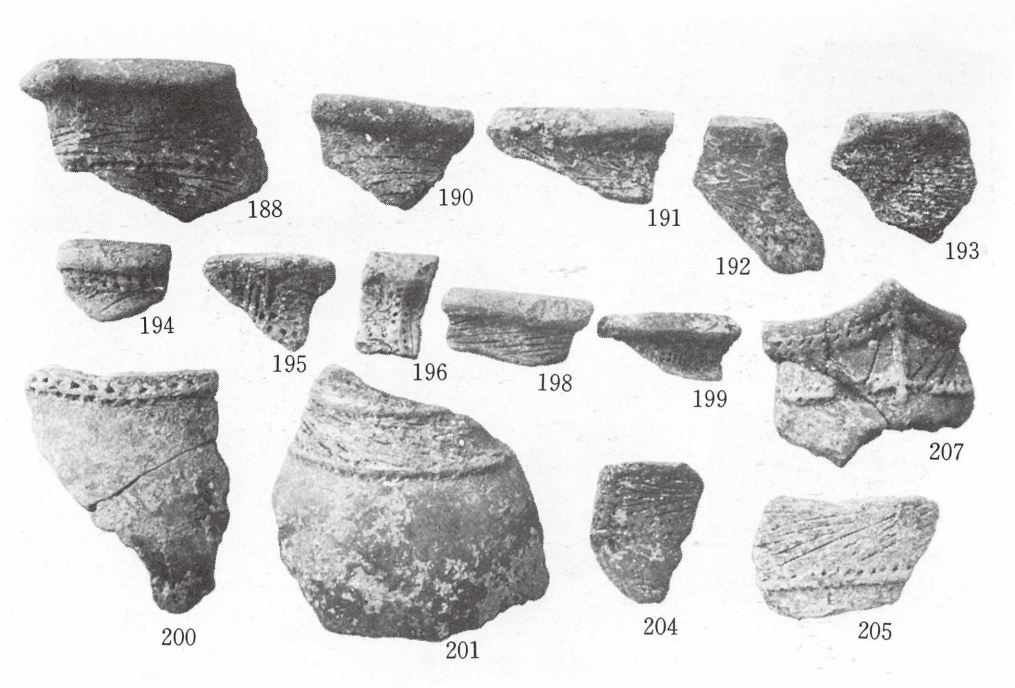
図版12



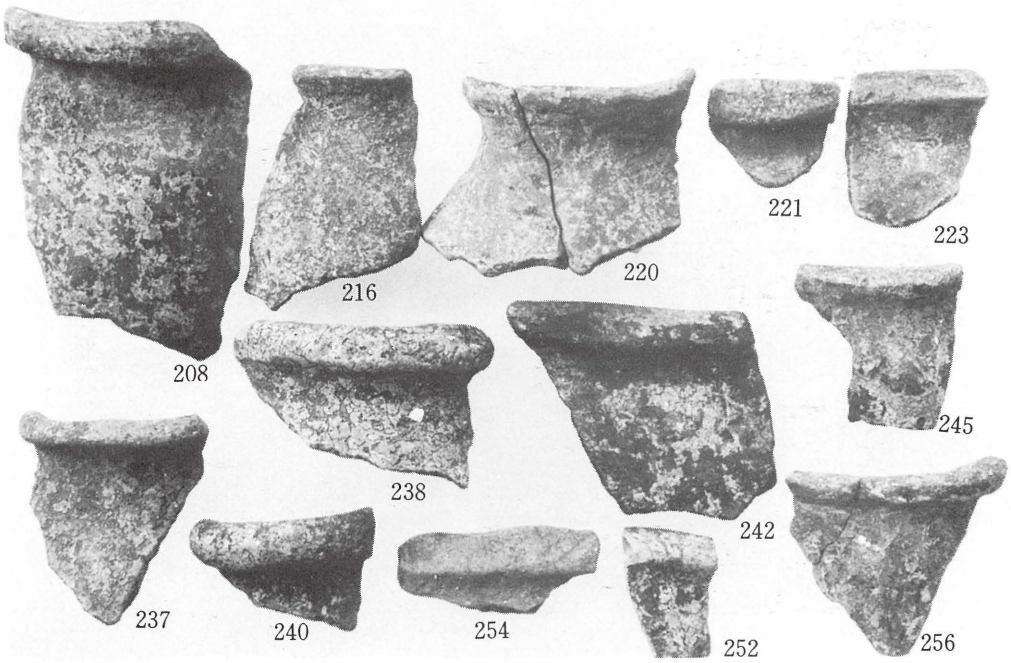
出土土器（Ⅲd・Ⅲe類）



出土土器（Ⅲe・Ⅳ類）

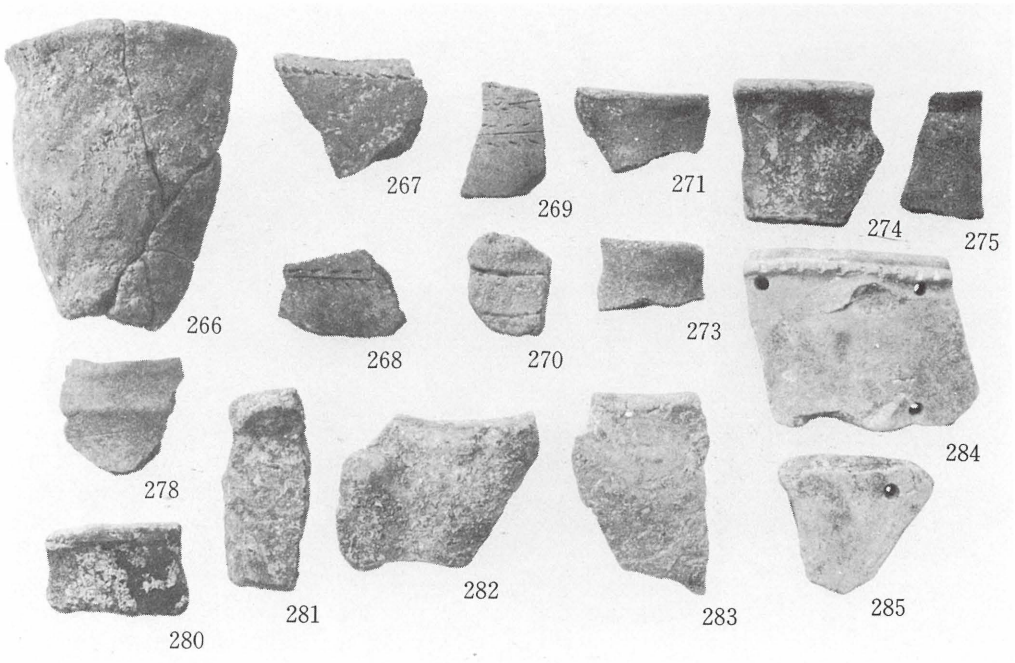


出土土器（Ⅳ類）

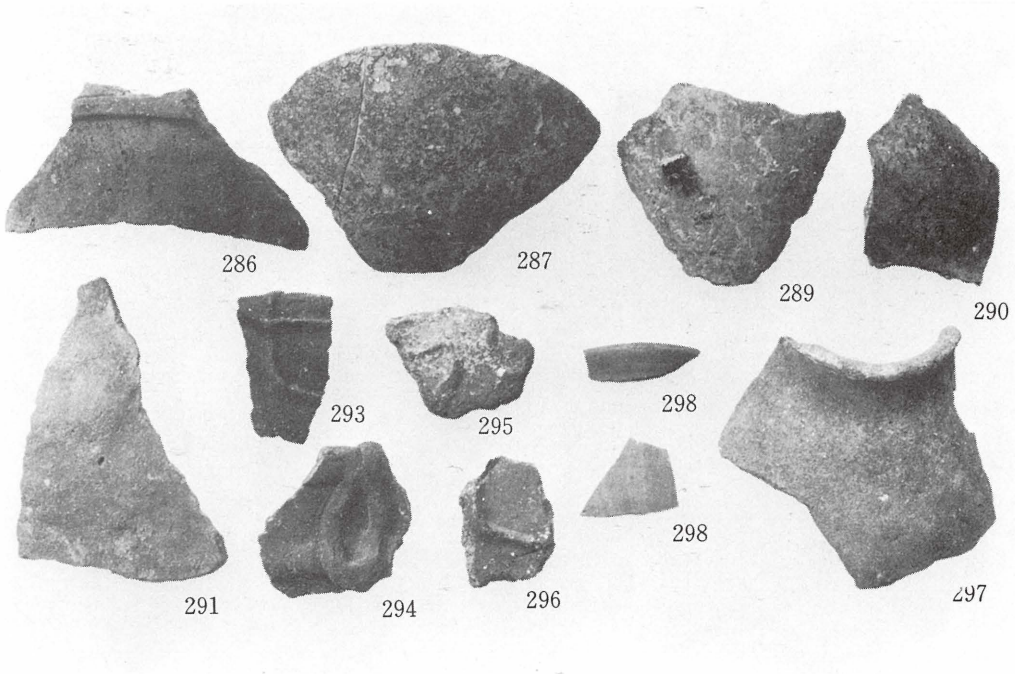


出土土器（Ⅴ類）

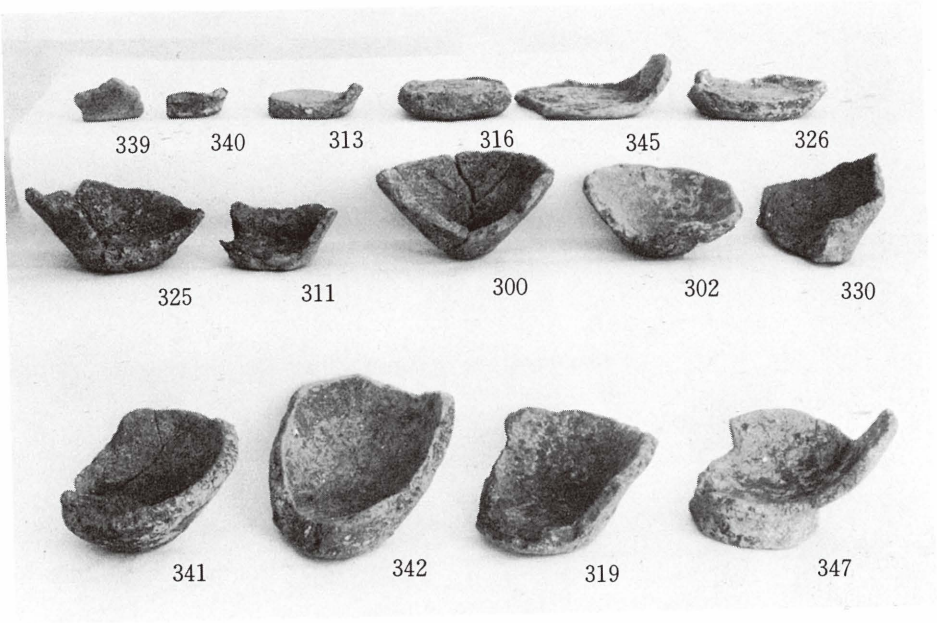
図版14



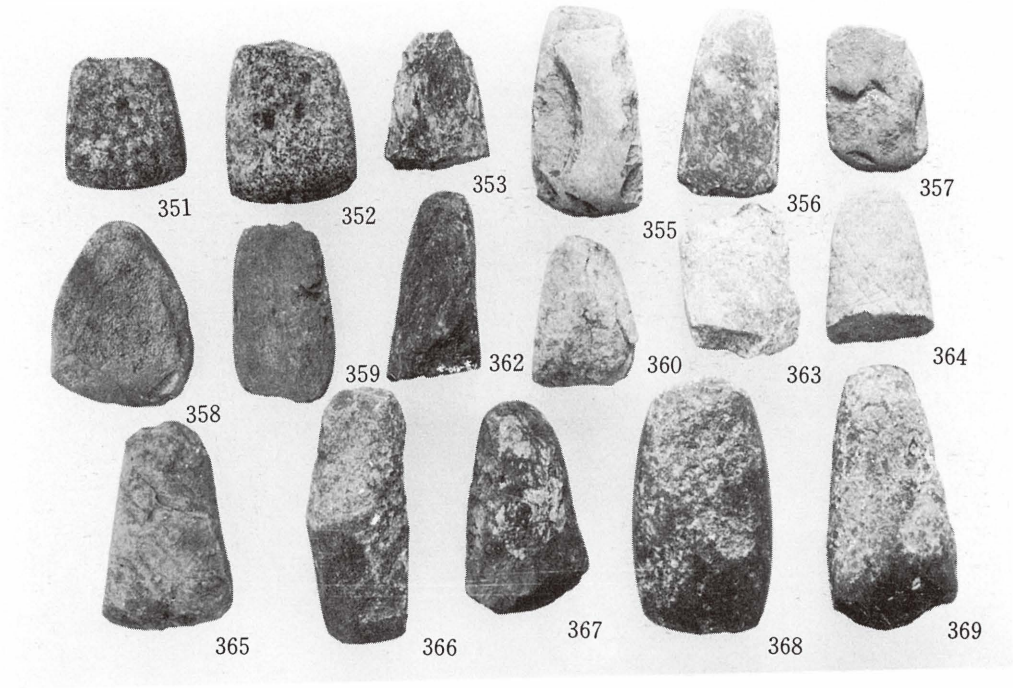
出土土器（Ⅵ類）



出土土器（Ⅵ類）

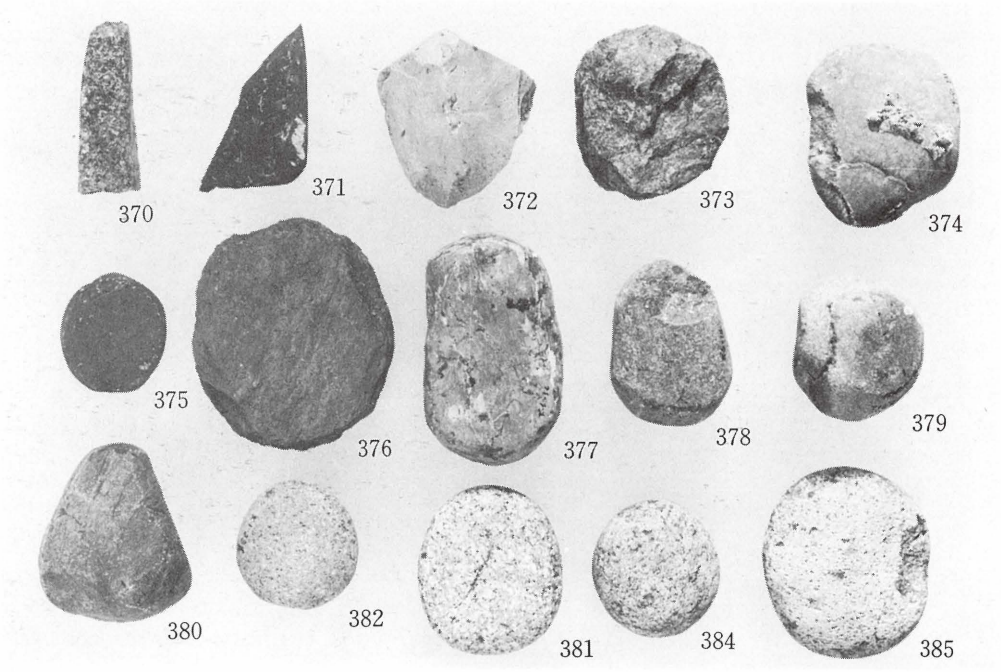


出土土器（底部）

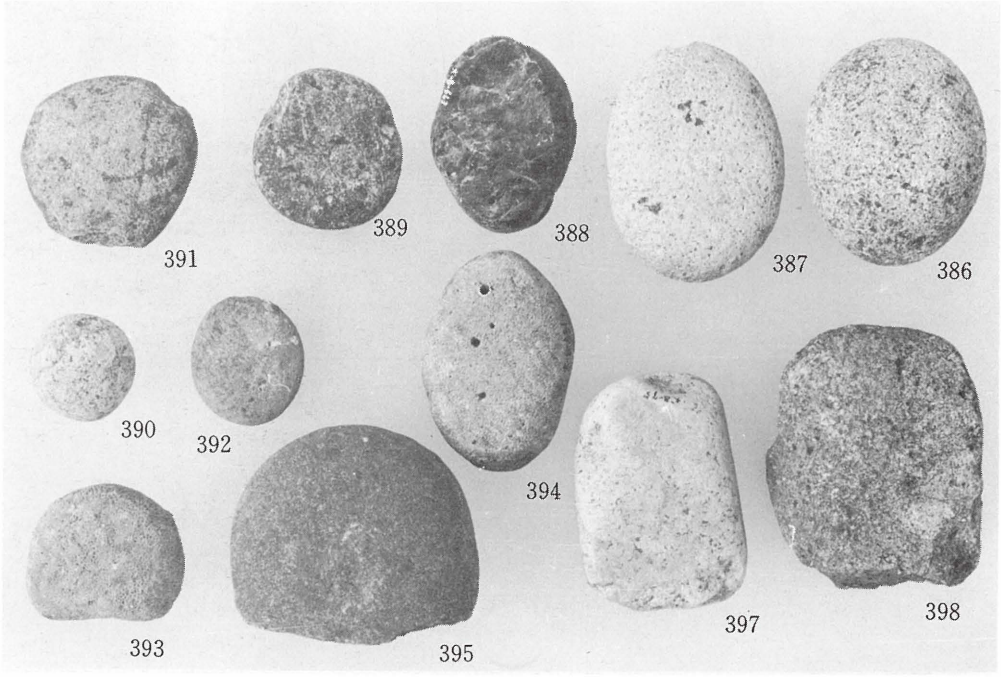


出土石器 (1)

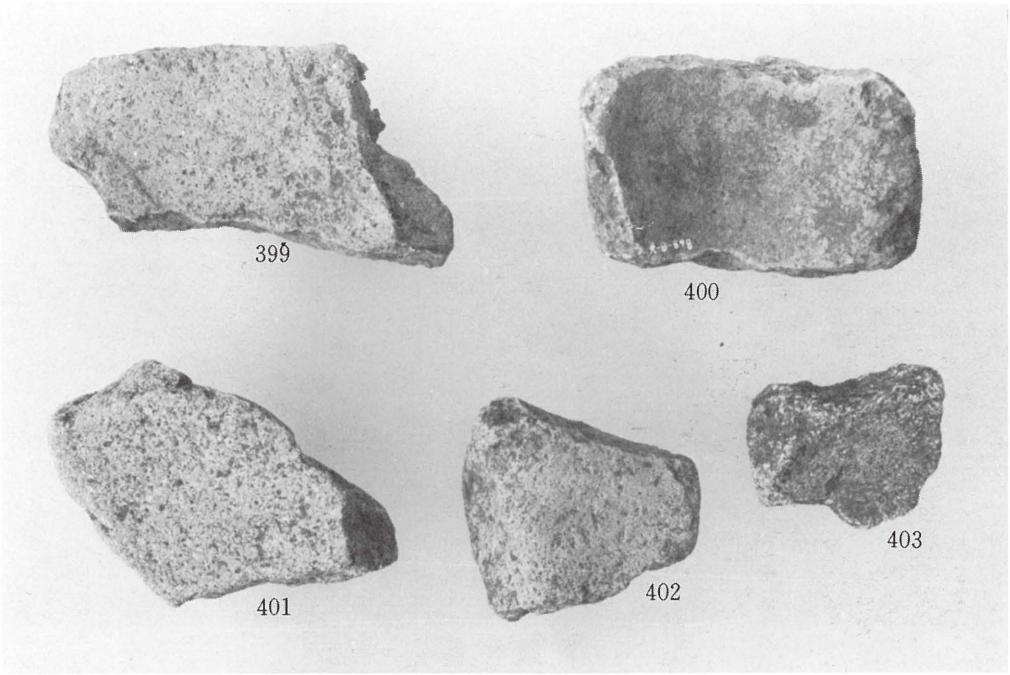
図版16



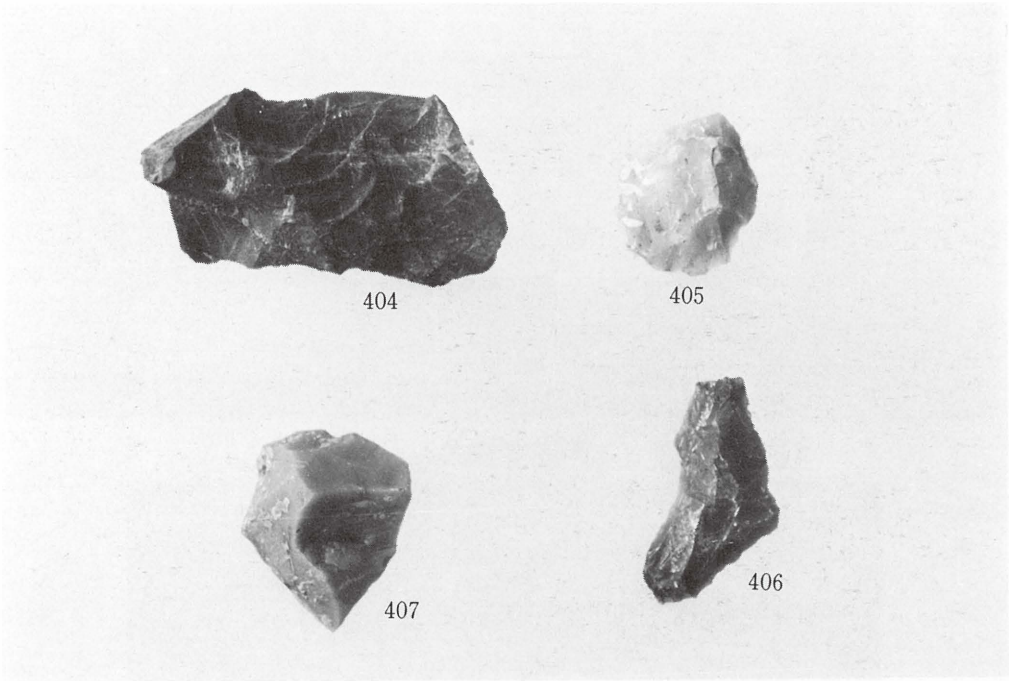
出土石器 (2)



出土石器 (3)

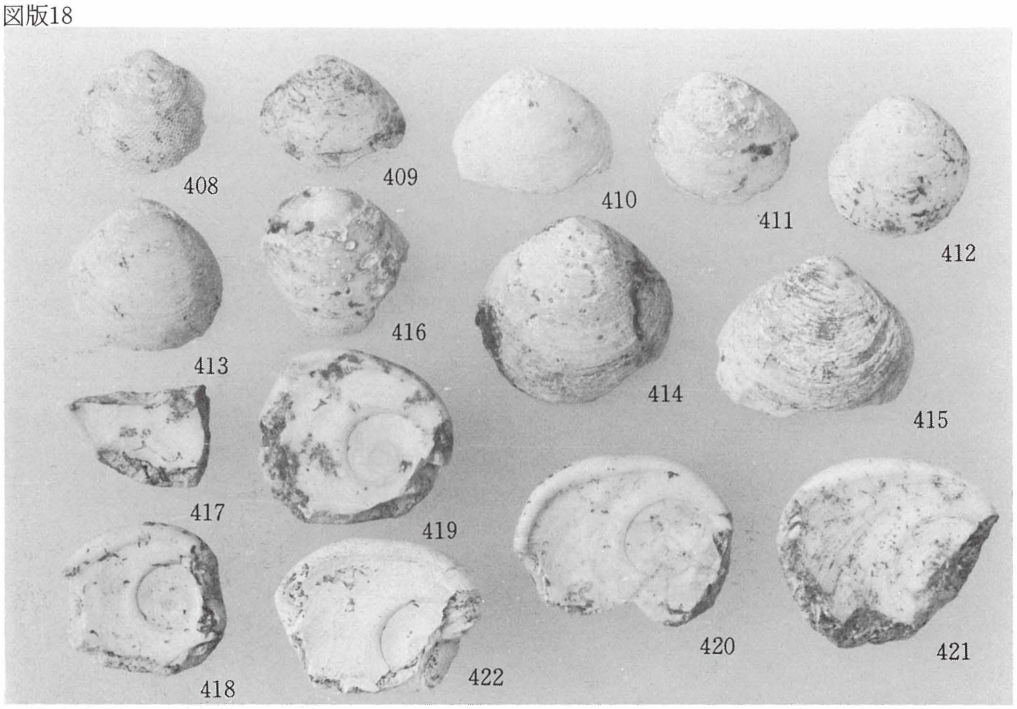


出土石器 (4)

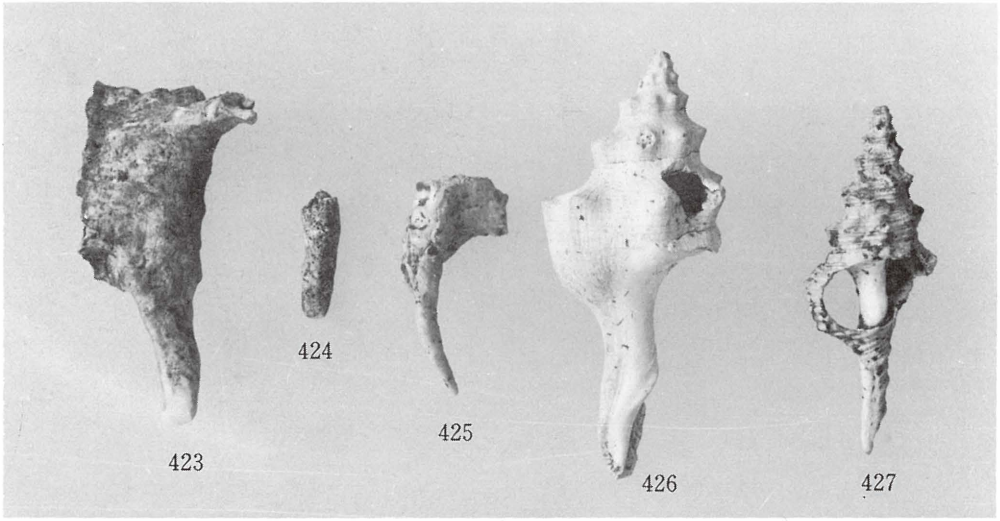


出土石器 (5)

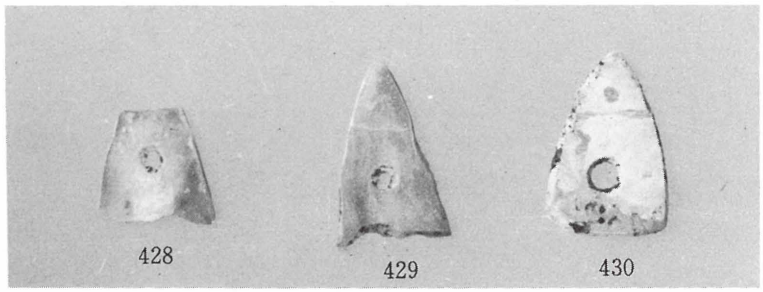
図版18



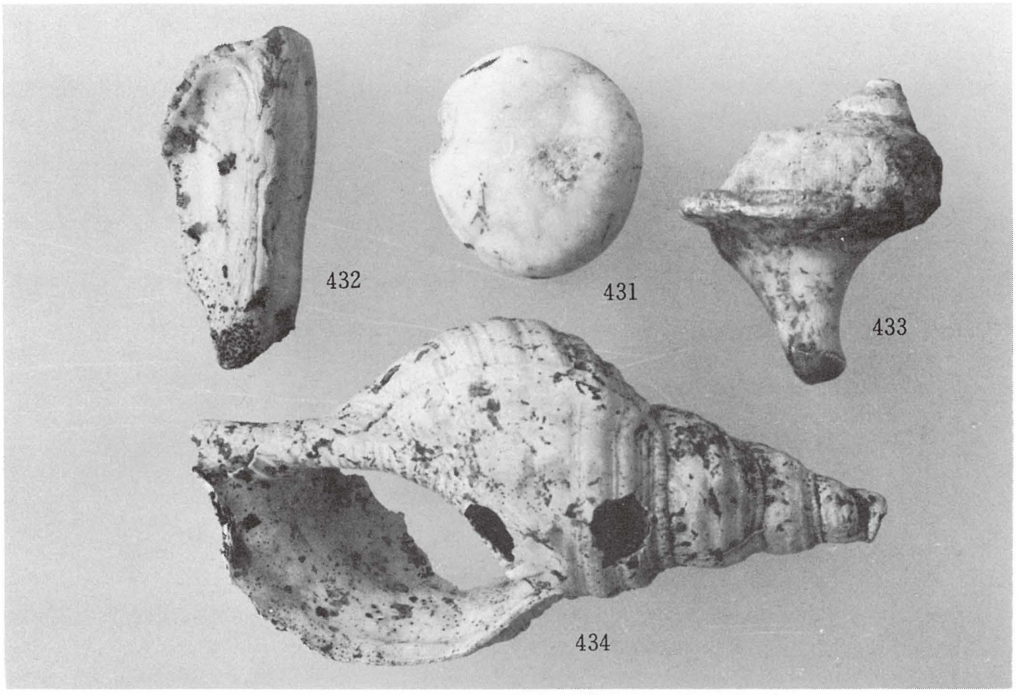
貝製刃器



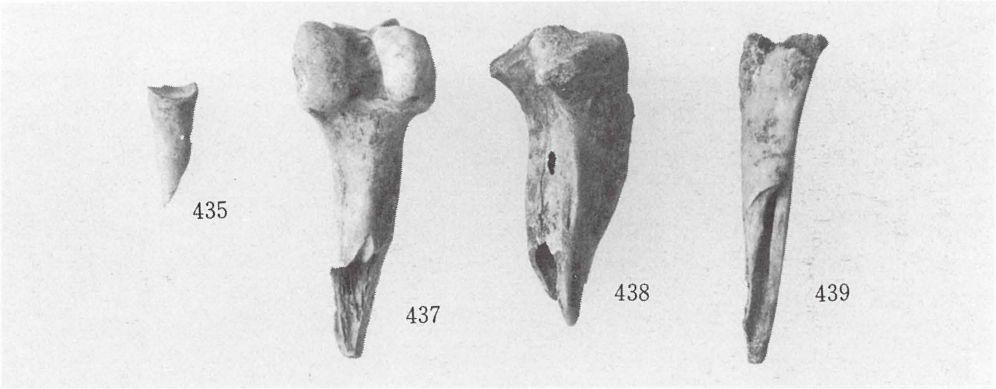
貝製刺突具



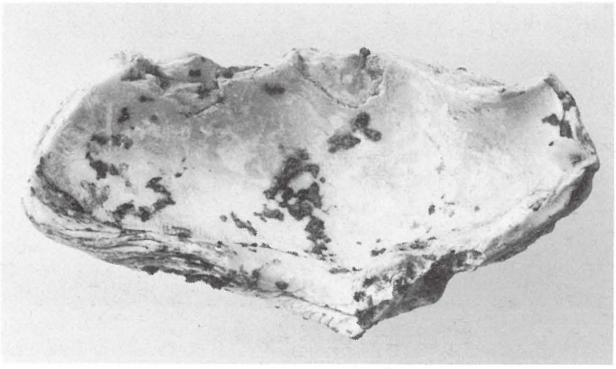
貝　鏃



貝製道具

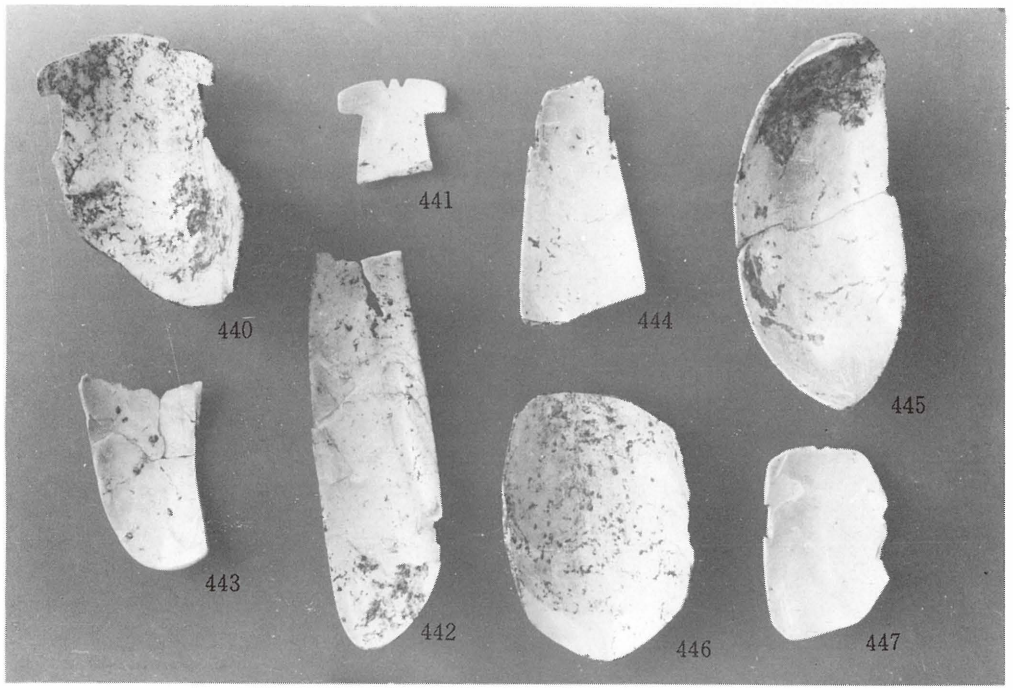


骨製利器

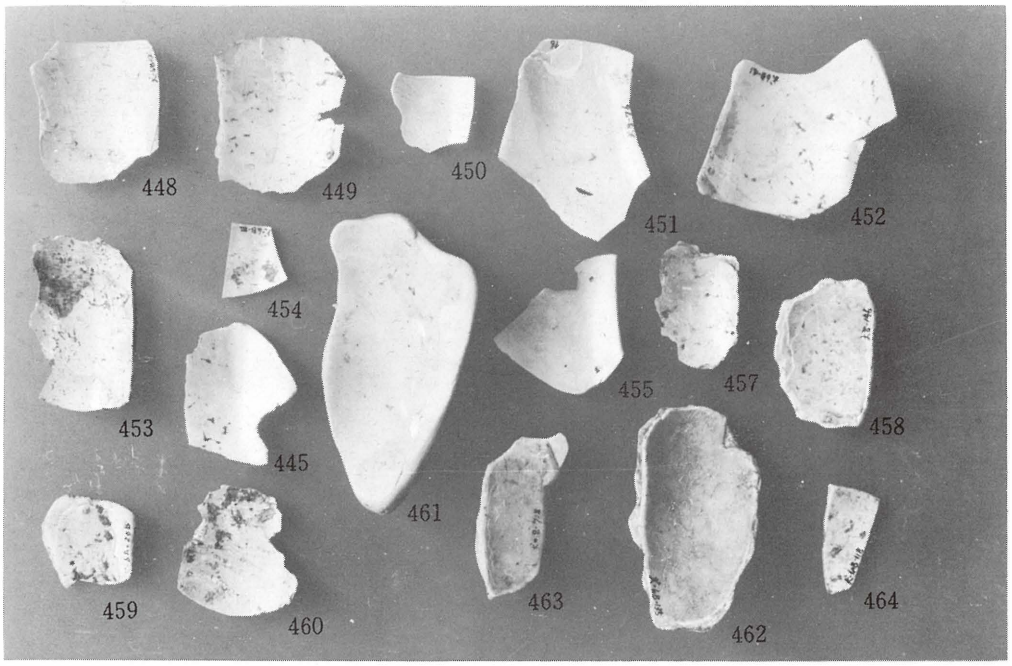


シャコガイ製品

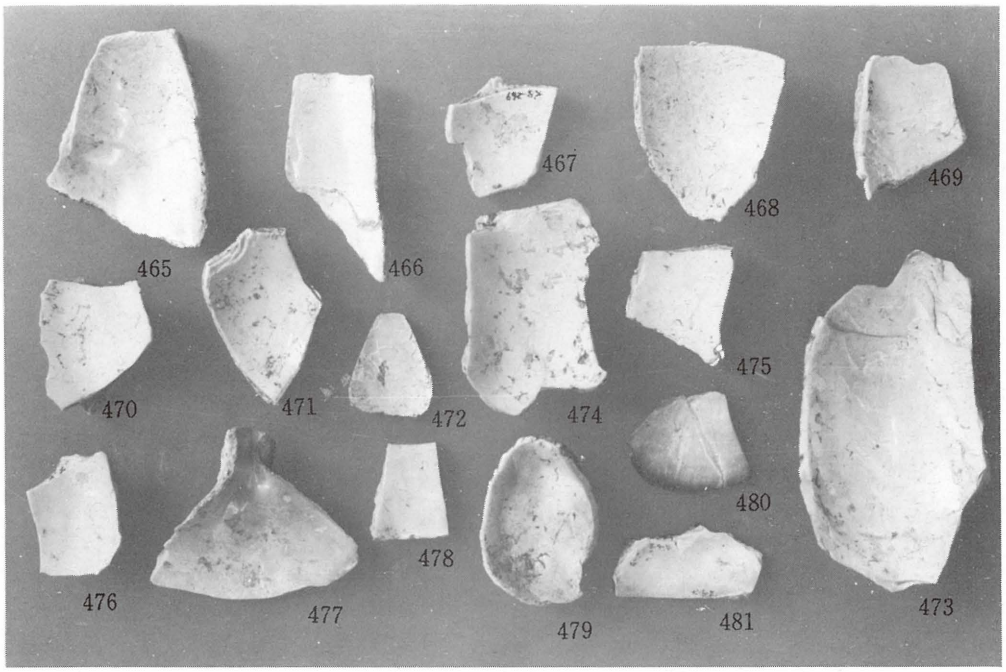
図版20



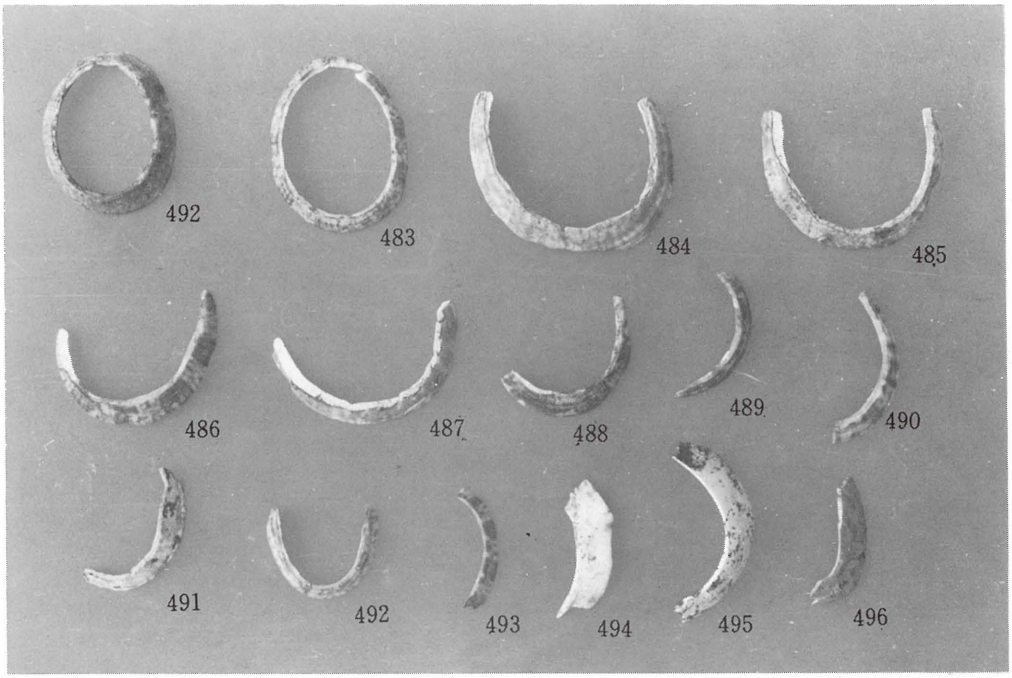
出土貝製品（貝匙等）1



出土貝製品（貝匙等）2

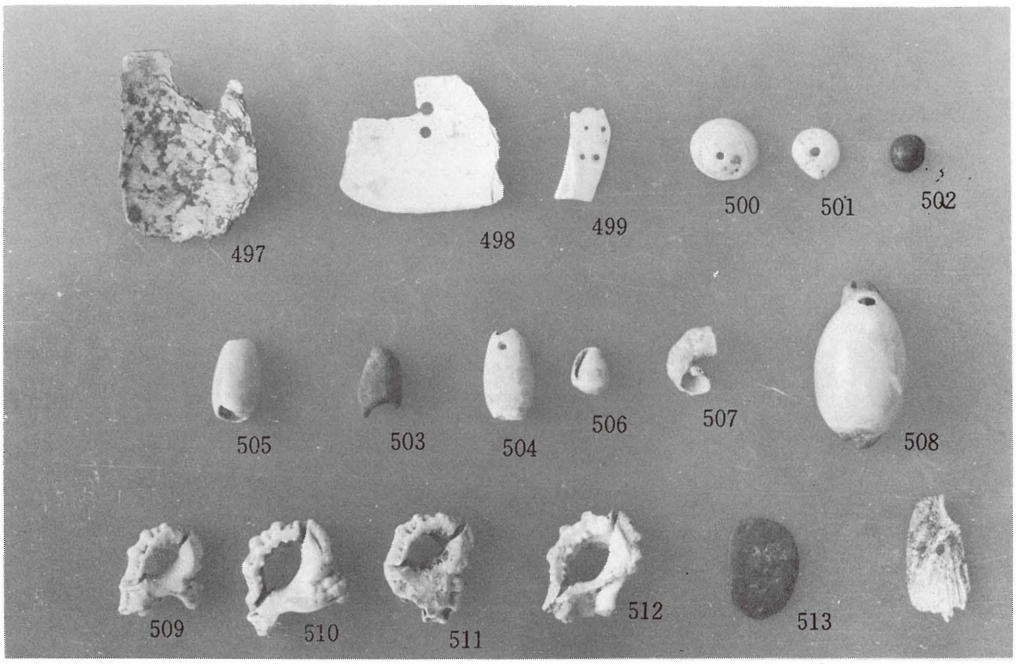


出土貝製品（貝匙等）3

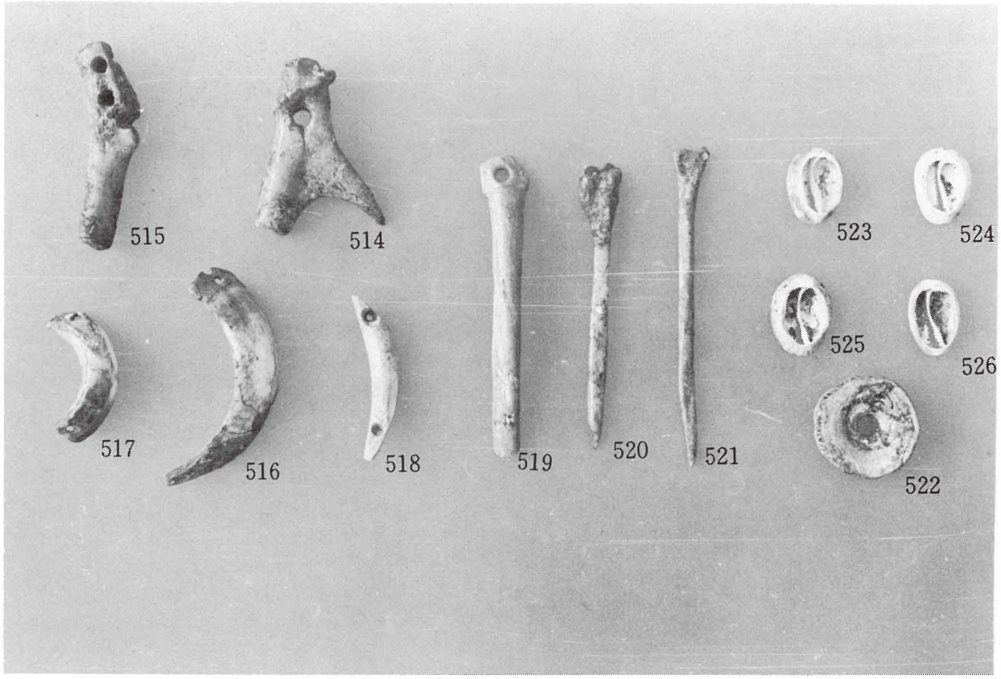


出土貝輪

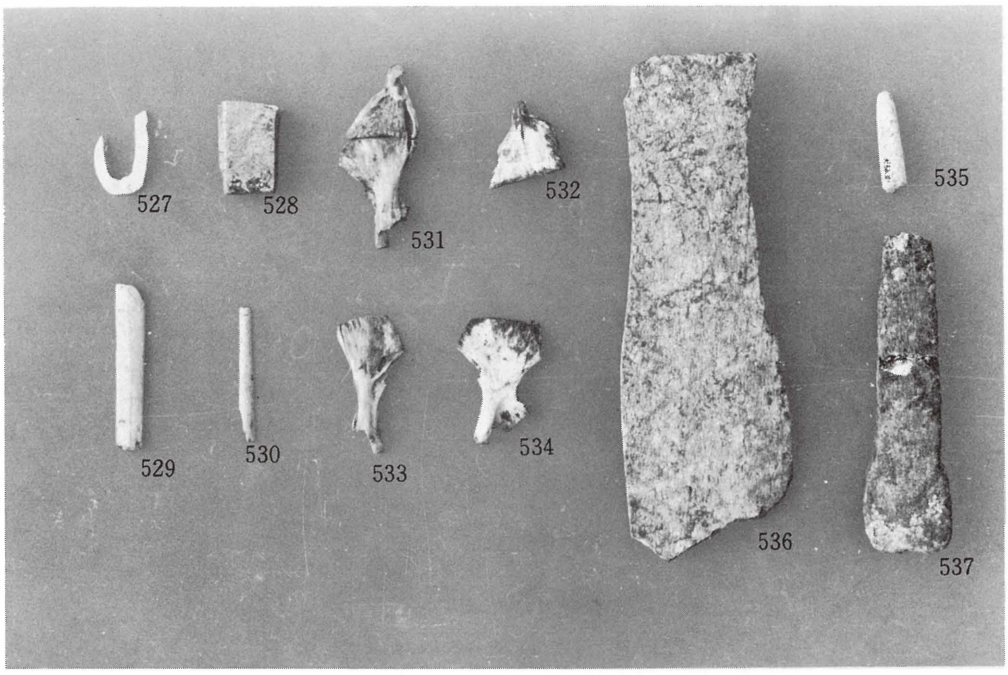
図版22



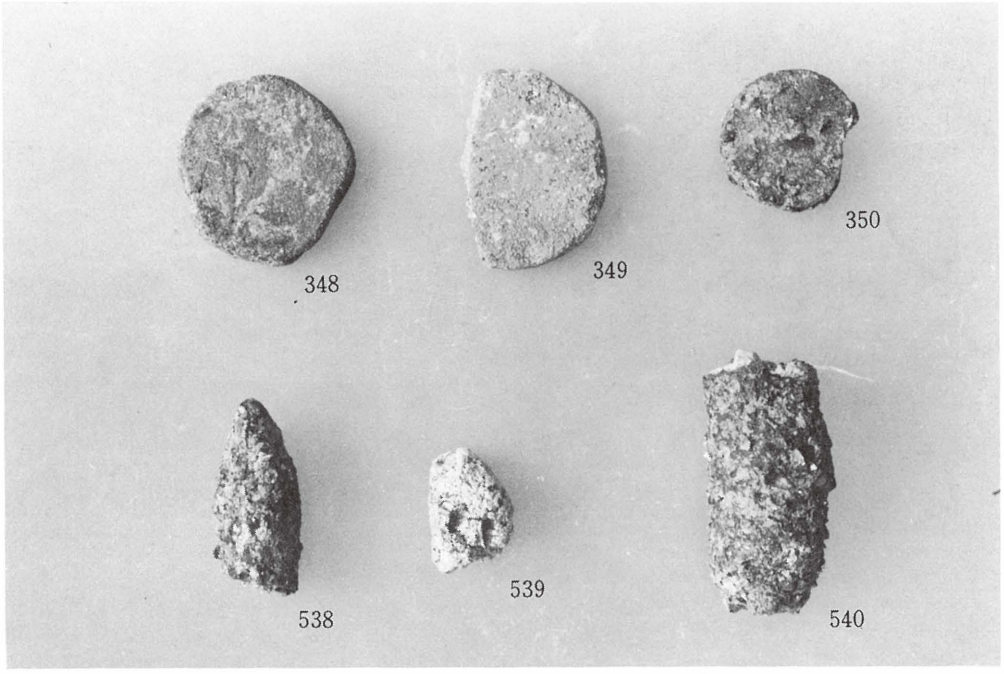
出土垂飾品



出土垂飾品・簪・耳栓・貝錘

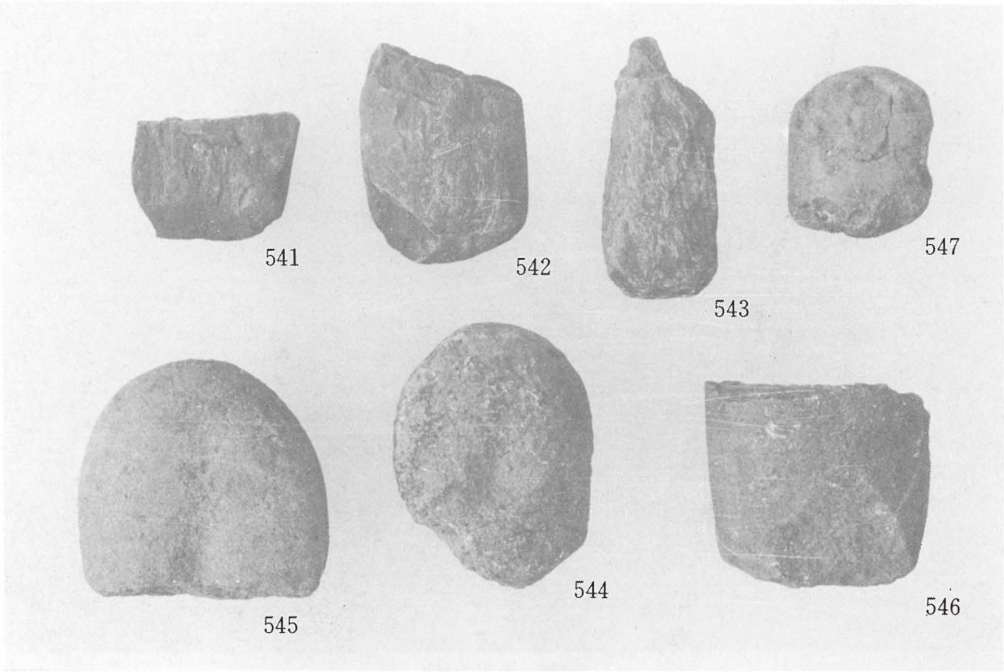

527
528
531
532
535
529
530
533
534
536
537

釣針・その他

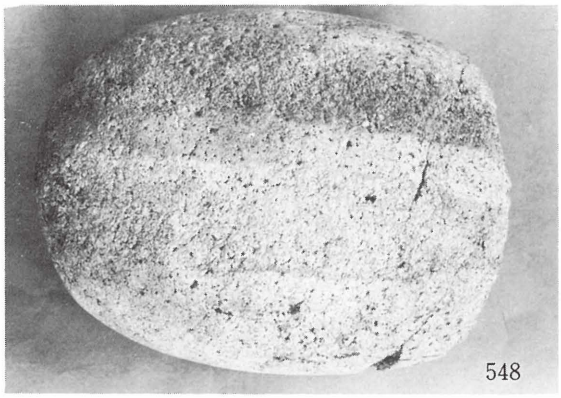

348
349
350
538
539
540

土製品・糞石

図版24



岩陰上部平坦地採集石器



岩陰上部平坦地採集石器

あ　と　が　き

伊仙町での重要遺跡確認緊急発掘調査は昨年度に引き続き2回目である。

今回の調査が計画された時より，前回参加した作業員の方々から，今回も是非参加したいという申し出があったと聞く。自分たちの町・郷土の歴史を探る通常ない良い機会に参加したいという地元の人々の熱意は，調査中においても強く感じた。

調査は，毎日足を運び，実測等の協力をいただいた伊仙町立歴史民俗資料館の四本延宏氏をはじめ，町教育委員会の積極的な援助や地元の人々や地主さんの好意により順調に進めることができました。

その結果，奄美諸島では初めての鹿角の出土をはじめ，多くの成果を得ることができました。これもひとえに地元の方々の御協力によるものであり，記して感謝の意を表します。

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)

犬　田　布　貝　塚

昭和59年3月

発　行　　大島郡伊仙町教育委員会
〒891-82鹿児島県大島郡伊仙町伊仙

印　刷　　有限会社　朝日印刷
鹿児島市上荒田町854-1